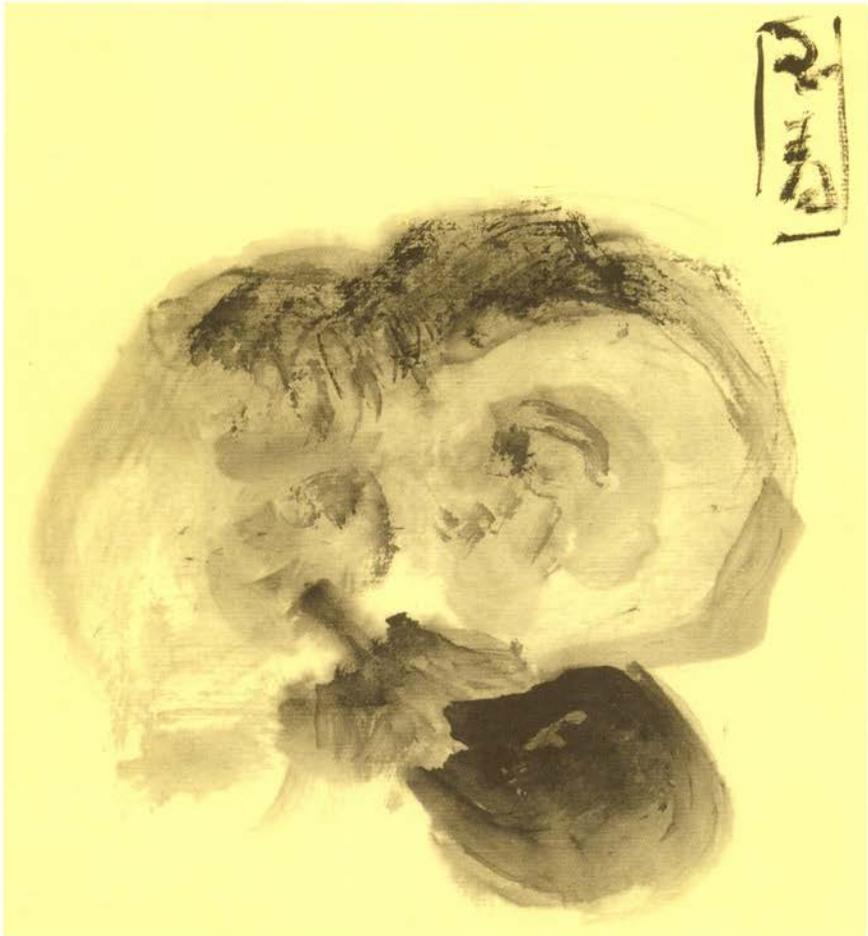


川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成十七年七月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九三八号

● 日川協加盟 ●



No. 938

橘高薰風 追悼特集号

七月号

お知らせ

九月号から「茴香の花」欄を廃止し、「檸檬抄」を新設します。男女一名ずつが同じ題で共選し、平抜き35句、秀句3句を選出します。七月十五日締切り分から本誌綴じ込みの投句用紙を使用の上、本社事務所宛ふるって投句して下さい。

本年度は仁部四郎（佐賀）、藤田泰子（大阪）共選とします。

なお、選者の任期は一年交代とします。一年間の秀句の中から一句を選び、来年十月に檸檬賞として他の五賞と共に表彰します。

「愛染帖」、「一路集」は従来通り川柳塔用箋（本社事務所取扱っています）を使用の上、投句して下さい。

川柳塔社

選者交代のお知らせ

九月号（七月投句締め切り分）から来年八月号までの選者を次の通り交代します。

水煙抄 板尾岳人
愛染帖 新家完司

川柳塔社

「檸檬抄」課題

仁部四郎・藤田泰子 共選

発表月	課題	締め切り日
17年9月	賑やか	7月15日
10月	順序	8月15日
11月	洗う	9月15日
12月	名簿	10月15日
18年1月	呼ぶ	11月15日
2月	油断	12月15日
3月	ソフト	1月15日
4月	机	2月15日
5月	ほんのり	3月15日
6月	懐かしい	4月15日
7月	隣	5月15日
8月	引く	6月15日

橘高薫風作品より

河内天笑

薫風名誉主幹が逝去されて二カ月が過ぎたが、その存在はますます大きくなるばかりである。改めて句集を繕き、同人・誌友の皆さんに愛誦してもらいたい句を選んだ。

乱れ髪式部の世より恋は憂き
労働歌 蟻が歌えば凄かろう
都会の夜 セロリは母の香に似たり
湯槽出る男 海より出ることし
旅人も 月も やがては去る砂丘
檻の鶴 又 眼を閉ずるほかはなし
惜しみなく愛は奪えと 曼珠沙華
鳥一つ買うて暮らせば 涼しから

靈柩車 辻を曲つてから 速し
妻よ子よ水の深さが臍を越す
栄光の日も一日は二十四時
恋人の膝は檸檬のまるさかな
銀杏散る風の祭りを見るごとし
恋なれやわれに鬣あるごとし
初恋のうすみずいろとなりけり
遠き人を北斗の杓で掬わんか
進む時計遅れる時計夫婦かな
惜春の音の一つに昼の三味
寺と萩マンネリズムも美しや
礼を尽くし礼を失し師と旅にあり
勲章の欲しい七才七十才
石くれも三つ積んだら思惟の塔
恩師の死 その夜眠しとも眠し
われに過ぎたり 絢爛と死ねる歳
引金をひく一瞬が 恋にあり
夏雲の 死ねば越ゆべき峰ならん

牛小屋に月光 美しき浪費
てんとう虫 ここにも小さい輪島塗
秋風に傷なきものはなかりけり
讃岐富士 一番星を簪に
人の世や 嗚呼にはじまる広辞苑
胃半分 肺半分の湯呑かな
路郎の忌 立膝癖も師父ゆずり
恋人がいま肉眼に入り来る
睡蓮は万丈光の光源よ
こおろぎのように泣けたら涅槃かな
飲む会のハガキは箸で裏返す
春眠のそのまま覚めぬ死もあらん
孔雀羽根ひろげると能役者
桐一葉 猫も座禅の向うむき
秋が来て笛は太鼓を恋しがる
八月の花火 九月に曼珠沙華
ふる里の水平線は志
人生は二幕三幕ほどがよい



座右の句

母刀自の在せし頃の御御御汁

(薫風)

私の句

新人の母をよろしく阿弥陀様

南原正和

川柳塔 七月号目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 橘高薫風作品より……………河内天笑……………(1)

昭和の雪……………瀬戸まさよ……………(2)

川柳塔(同人吟)……………河内天笑……………(4)

川柳塔の川柳讃歌(7)……………木津川 計……………(54)

自選集……………奥田みつ子選……………(55)

水煙抄……………奥田みつ子選……………(59)

■追悼 橘高薫風名誉主幹を偲ぶ……………(80)

田辺 聖子・木津川 計・吉岡 龍城・時実 新子・尾藤 三柳

大野 風柳・斎藤 大雄・竹本瓢太郎・磯野いさむ・小松原爽介

泉 比呂史・岩井 三窓・黒川 紫香・宮口 笛生・小林由多香

波多野五楽庵・奥田みつ子・仁部 四郎・八木 千代・濱野 奇童

田中 正坊・藤村 亜成・川上 大輪・栗原 道夫・板尾 岳人

橘高薫風五十句……………(97)

弔吟―薫風名誉主幹に捧げる……………(98)

昭和の雪

瀬戸 まさよ

平成十四年一月号に薫風先生の川柳の虚構について述べさせていただきましたが、今回も引き続き鑑賞させていただきます。

◆虚構―文芸などで事実そのままではなく作為を加えて一層つよく真実味を印象づけようとすること。フィクション。

◆虚偽―うそ。虚偽の反対は真実。

ムンクの絵外真つ青な雪景色

ノルウエーの画家ムンクの「叫び」は現代の不安を象徴した絵として有名。雪の白さに青味を帯びさせるフィクション。雪景色の白は真つ青な色の変化で怖いほどに輝き、ムンクの告白と対応する。芸術性豊かな句。

白の洗濯物にほんの少し蛍光色を加えることで、より白が強調される知恵を薫風師は感性でとらえる。その凄さ！

鳥一つ買って暮せば 涼しから

かつて森繁久弥が瀬戸内の小さい無人島を買ったという話を聞いたことがある。鳥一つ買う。大風呂敷の話である。裸で暮らすもよし。いつまで寝ていてもよい。泳ぐ。釣りをする。日の

出、夕日の美を心ゆくまで堪能する。孤立感、

愛染帖	波多野五楽庵選	(107)
誹風柳多留二四篇研究	政岡日枝子選	(110)
茴香の花	森本弘風選	(112)
「蠅」	古今堂蕉子選	(114)
一路集「カビ」	渡辺富子選	(115)
「銀河」	三宅保州	(116)
初歩教室「ほいほい」	山本蛙城	(118)
秀句鑑賞「同人吟」	太田昭	(120)
水煙抄	新家完司	(122)
■エッセー インド再訪		
全日本川柳2005年広島大会		(123)
六日本社句会		(124)
各地柳壇(佳句地十選/武本 碧)		(128)
柳界展望		(177)
七月各地句会案内		(178)
■編集後記	楓葉・義子	(180)

座右の句

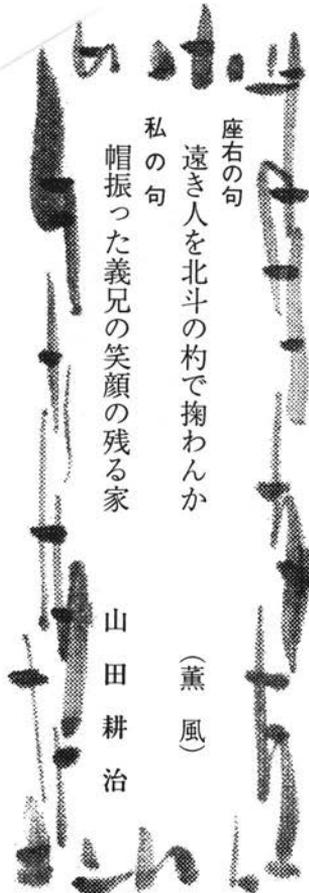
遠き人を北斗の杓で掬わんか

(薫風)

私の句

帽振った義兄の笑顔の残る家

山田耕治



孤独感を越えた自由の極み。一度は誰もが考え、実行できたらと思うことをズバリ詠み込めるのは師の実力。

恋なれやわれに鬣あるごとし

あの女が好き。さよならをしても、その瞬間に会いたくなる。われ、駿馬、獅子と化しても、いや天馬空を行く如く、あの女を攫って行きたい。恋をする男心とはかくの如し。鬣をつける男に模して自己を客観視する師。

労働歌 蟻が歌えば凄かるう

今は労働組合の活動も下火でかつての面影はない。かつて、メーデーには何万と集り、要求条件のプラカードや幟を押し立て歌いながらデモ行進をした。勤勉労働の代名詞にもなっている蟻は炎天下でも黙々と仕事に励んでいる。その蟻が一旦、声を出し労働歌を歌えば、何万、何十万の歌声は轟音となり、天地を震わすであろう。その想像力は万人のものでなし。

元旦や昭和の雪はもつと白

年を経るごとに迎える元旦。その時々のお思いは、また違っていて当然。が、そこには虚子の「去年今年貫く棒の如きもの」と同じ感慨を、もたれる薫風師。平成も十数年を経た。降る雪に色の違いはない。しかし、昭和を生きぬいてきた庶民にとって、否、自分にとって雪の色は昭和の方が、より真つ白なのだ。

わが胸に師の川柳碑打ち建てる

まさよ

川柳塔

河内天笑選

大阪市 西出楓楽

ご葬儀のにぎわいの中寒くいる(悼 薫風先生)

浄土いまだ歓迎の渦だらう

ありがとう何度言っても言い過ぎぬ

叱られた恐い顔ほどなつかしき

七冊の本に頭を叩かれる

八角弁当食べて先生偲ばんか

八尾市 高杉千歩

雑踏の街をうつろに喪の帰り

一步引く知恵で一日生き延びる

脈々と続く命を絶つ惨事

献花絶え間なし花屋を思う不遜

生き甲斐というほどでなし絵具皿

浅漬けも糠漬けもよし梅雨晴れ間

吹田市 山本希久子

みまかりし師の偉大さよ香華揺れ

愛妻家あつて愛夫家ない不思議

日常をするり脱出するスリル

運不運かわりばんこだなと思う

何ひとつお役に立てず古稀となり

黄信号ばかり検査の数値表

天に星地に人間の貧しい灯

世の中を退屈させぬ悪い奴

俯くな希望を持ってと桜咲く

たましいが濁らぬように水を飲む

高低差顕著ではない僕の顔

いつまでもお酒が飲めるよう祈る

投函をしてから昂りを鎮め

迷路から抜けると腹が減っていた

阿呆になる何と愉快な世界観

鉛筆が倒れ行く先考える

傘のなかせいぜい僕の守備範囲

目標に達した辺にある渴き

鳥取県 新家完司

広島県 藤解静風

弘前市 高橋 岳水

みちのくの惰眠を覚ます雪解川
水門を開けるとはしやぎ出す津軽

乾杯が尽きぬ津軽の花万朶

隣人を他人と呼ばぬ助け合い

物差しを並べ決断まだつかず

両の掌を重ね本音の握手する

京都市 高島 啓子

葛が要る梅干しが要る鱧落とし

人間のいる方へ来る夏の蠅

利子ゼロのバンクへ貸しのある気分

米どころうまいものあり袖餅子買う

午後の五時また体制を建て直す

水を飲む時は素直な顔になり

枚方市 海老池 洋

間引くほど蒔かんで欲しい種の鬱

神よりも仏に願うことの増え

細はそと妻と喜劇を繰り返し

火の酒ととても思えぬ透明度

恥を売り笑いを買うて永らえる

岸和田市

長谷川 呂 万

もったいない外国人にない言葉

待ち針が動かず役をなしとげる

朝ごはん熱い麦茶で間に合った

定年後命令調になった妻

便利さを求めやさしさ捨てられる

教養も風格もあり変な癖

堺市 河内 月子

満開のキウイ見ながらお茶にする

リズムよく草が抜けますいい日和

揚げ羽蝶今年も卵産みに来た

カマキリがつぎつぎ生まれいい日なり

畑には俄雨でも御馳走だ

御先祖の強い体をもらい受け

大阪市 古今堂 蕉子

うきうきとスタックカートでしゃべる声

すいすいとお手盛り議案可決する

らくらくと歌ってみたいオーソレミオ

ゆうゆうと天下のまわりものを待つ

内憂外患お茶漬け食べて思案する

私利私欲 満足の枘こわれてる

黒石市 相馬 一花

仲間割れしそう美人が入社する

体内にいつも控える不発弾

首枷をはめて女房が操縦す

汚染した沼で愚痴吐くしじみ貝

期待した発毛剤に無視される

一冊の手帳に頼り生きている

出雲市 多々納 テル子

刻々と山塗り替えている緑

春うらら大地の恵み摘んでいる

ひと冬の埃を払う春の風

花吹雪私も今日は舞い上る

焦らずに心に花を咲かせたい

強行軍頑張ったねと足を揉む

西宮市 門 谷 たず子

おだやかな流れに添うて五風十雨

シグナルは青 昨日のことは過去として

樹海抜けこころも染まるみどり彩

点線の向こうの義理に逆らえぬ

時どきは都会で活をもろてくる

糠床をまぜて死ぬまで主婦である

堺市 志 田 千 代

豆を煮る鳥も啼かない午後だから

押している人も白髪や車椅子

古稀すぎて親孝行は疲れます

老介護涙の涸れた野辺送り

さえずりの中 古里に父母の墓

小遣いは婆の名前で渡してる

寝屋川市 坂 上 高 栄

排日のデモ一先ずは歩み寄り

もつたいない環境汚染の合言葉

法王を煙で知らすコンクラーベ

郵政法生む激痛の党二分

秒刻みしのぎを削る最前線

靖国は日本の心 引けませぬ

海南省 三 宅 保 州

注射さえすれば納得する患者

学会のため休診が多い医者

営業中よりも長い準備中

一万円からでよろしかったでしょうか

禁煙席は喫煙席の隣です

コンビニができてコンビニ潰れたり

大阪狭山市 矢 野 梓

鳥帰る彼方に戦えないように

折々の花に野仏かざられる

愛情を注ぐと花はそむかない

おぞなりのお詫び誠意が見当らぬ

さよならをしてから名前思い出し

ささやかな幸をよろこび合うて生き

松江市 津 川 紫 晃

天の声地の声人は温かい

菜の花の海でひる寝のハチもいる

もう一人の私になれるサン格拉斯

残照へひと彩たして老いの絵図

さみしいと言えば小鳥がチュンと鳴く

夫婦喧嘩愛犬眠ったふりをする

大阪市 前 たもつ

もう先生酸素ボンベは要りません
病床でやっと花丸いただけり
懐の深さを仰ぐ雲のみね
答えまだ出せずに重い棺担う
路郎師を生涯追つた師に学ぶ

大阪市 鶴田遠野

美術館出れば聖人君子の顔となり
平身低頭神様を待つ招き猫
恋心ポッケに入れてひとり旅
ケイタイが貸しての妻に慌ててる
リストラの友との酒が酔わせない

大阪市 岩崎公誠

コンピニの隠しカメラが客睨む
ゆっくりと脳の記憶が石化する
脱自分少し生き方変えてみる
デパ地下の松阪肉に鑑定書
細腕の見えぬところに力瘤

大阪市 清水利武

天神さん浪花の景気盛り上げる
川柳と心中したか橘高さん
薫風さん高野の友へ会いにゆく
タコ焼の匂い嗅いでるミコシギヤル
ミコシギヤル今年も太い足を出し

大阪市 近藤正

イラクでは兵隊さんも民営化
核を持つ国が国連舐めている
一瞬を黙した罪が疼きだす
一秒を競うダイヤで大惨事
マンモスも愛知で御難熱帯夜

大阪市 岡本久峰

読書する喜び青葉目に沁みる
いっばいに差入れ届くわび住まい
颯爽と女車掌が風を切る
朝早くバアチャン走るお掘端
刈り草の匂いに鼻をくつつける

大阪市 奥村五月

ブレイキのきかぬ我が家は火の車
夢抱いた都会そんなに甘くない
古いネジちよこちよこ巻いて生きている
やっと来た嫁に遠慮の父と母
嫌だった親父そっくり酒の癖

大阪市 川端一步

風いっばい吸って酸素で脳洗う
近道が好きで時々火傷する
言わぬ手もあったと気づく帰り道
この夏は憲法前文書くつもり
日本海一度聞きたや瞽女の三味

大阪市 神夏磯 典子

カーネーション嬉し幾つになろうとも
夫には負けるが勝ちの喧嘩なり
スイッチを入れると世間恐ろしい
何はともあれ年金振り込まれ
やけくそになると風船ふくらまず

大阪市 板東倫子

八十八夜お茶とくぎ煮の贈り物
セレブ気取る女はまるで女王蜂
入歯から位牌まである忘れもの
想定外の嫁を探して来た息子
どしゃ降りの頭の中で湧く不貞

大阪市 中村叡子

カレンダー夫婦の予定色を変え
新郎の孫の衣裳は七五三(初孫の結婚 4句)
花嫁は白無垢金襴ウエディングドレス
今日嫁ぐ娘に父親は眼鏡とり
花嫁をやつとの事で抱き上げる

大阪市 川原章久

懐かしいラムネガラガラ祭りの夜
気が付いてハッと見なおす孫の羽化
春鹿の白い尻尾が美しい
切符買わぬ親に六つがふくれ面
男なら死ぬまで覗く女風呂

大阪市 井丸昌紀

非常口裏に人形隠れてる
初参加知った顔でも身構える
春霞一年分の物思い
蛍光ペン引きすぎ急所判らない
図書館で借りた本だけ読み通す

大阪市 大川桃花

ポケットのリスに車中の顔む
辞典より分厚い漫画一気読み
JR乗る時ちよっと身構える
自己中心人間ほどでない猫
駅員の無口券売機がフォロウ

大阪市 松尾柳右子

コーヒーに今日の元気を貰う朝
ストレスも溶かしコーヒー喋り出す
夢設計刻々かわる宝物
もったいないを食べて父さんビール腹
回覧の喋り出す町温かい

大阪市 津守柳伸

葱根っ子土に戻して満ち足りる
枇杷ならぬ樹をばっさりと切り捨てる
連休の夜のビーポーはけたたまし
芍薬も牡丹も好きでまだ独り
無駄口を叩き肩書には触れぬ

大阪市 津 守 なぎさ

日焼け止めこっそり買った古希の肌
露地裏の四季紫陽花と梅雨になる
ダイエット一キロ減った大ニユース
田にはった水面を泳ぐ白い雲
ラッシュユ時を避けて出かける特老券

大阪市 小 泉 ひさ乃

座禪組む耳に小鳥が来て喋る
恥じらいを覚えてからが女なり
取りあえず身辺整理だけしとく
訃報聞くこんな空が青いのに
孫ほどの歳の主治医に叱られる

大阪市 小 谷 集 一

おじいちゃん大好き孫にチュウされる
幼稚園ませた言葉で笑わせる
フルムーン ダブルベッドがまぶし過ぎ
ハイハイハイ心こもってない返事
愛の鞭父にもらったほど打てず

大阪市 津 村 志華子

彩あせた野良着で母のよい笑顔
放たれてとても不安な籠の鳥
くよくよはすまいあしたの風を待つ
新緑の光の中に亡母がいる
窮すれば意外とすわる肝っ玉

大阪市 玉 置 英 子

歳重ね心強いは子が二人
長電話切り言い忘れ思い出す
花見無理 緑地の傍に住みながら
外出は息子の車頼ってる
振り込め詐欺よそのお家はお金持

大阪市 安 達 はじめ

春風が老いの残り火掻きたてる
積年の垢を落しに夫婦旅
湯に浸り暫し浮き世の苦を忘れ
据え膳に妻ご機嫌の宿浴衣
忘却の春蘇るフルムーン

大阪市 小 糸 昭 子

一人だと気楽で良いがふと淋し
諭されて信仰心の薄い事
たかが米されどブランド名がついた
プライドの高い人ほど多い傷
素直さが欠けるとポタン掛け違う

大阪市 渡 部 さと美

めしという語がびつたりの甥が来る
クレヨン画若あく描いてくれた孫
ばら銭で済ましてくれぬ診察券
一駅のホーム立つと脱線事故おもう
腹空かし頭をひねることは無理

大阪市 榎本舞夢

春の陽へ梅は多感になつて来る
大声で呼ばれいそいそ茶を入れる
茶髪ピアス ルーズソックス卒業す
うっかりとのつた話がくされ縁
周囲ではやさしい妻で通つてる

大阪市 清水絹子

春の宵人待ち顔のワンカッパ
千差万別寄せくる波に教えられ
あじさいに遠いあの日の浴衣柄
菖蒲湯にしみじみ古希のお陰様
墓掃除迎えてくれた上天気

大阪市 熊代菜月

携帯のメールとび交う渋滞中
看板を背負う二代目若すぎる
喜寿近しまだまだ弾むまりを持ち
手をかざすと指輪のあとが喋り出す
風薫る句碑泰然と淡路島

大阪市 榎本日の出

若づくり鏡げらげら笑つてる
幸せも苦勞も食べた体重計
大欠伸出てから口を押さえこみ
長生きをすればいいことありそうだ
物忘れわたしの老化ほんまもん

大阪市 本間満津子

涼しいという五月わたしは寒いなあ
嫁がくぎ煮を作つて持つて来てくれる
簡単なことに手間取る歯痒さよ
捻子巻いた分だけ動く古時計
卒寿ならこんなもんやと甘い点

大阪市 町田達子

名誉主幹の死がとつてもとつても悲しくて
でもでもと五月の空が慰める
バテ気味を元気な雀にあやかろう
これからの事は気にせず大らかに
開きなおれば少し気持が楽になり

大阪市 伊藤博仁

休業時のつらさぶつけた三味を聞く
訛つても音は訛らぬ津軽三味
火の用心さわやかに聞くコンサート
キャッシュカードまずはめでたし靴の中
十円の戻しに封書二通来る

大阪市 西川更紗

うぐいすの初鳴き聞いて墓参り
一曲を奏でるロボットの進化
身に合つた歩幅で母の手を繋ぎ
わだかまり流して今日の風に乗る
訳もなく溜め息ついて疎まれる

大阪市 星 野 きらり

百歩ゆずり今は血圧正常値
まだ飛べる手足あるので螺子をまく
俺よりも先に逝くなど置いてゆき
おねむなら私の膝が空いてます
肝心の目を患いていまいまし

大阪府 野 田 栄 呼

山行けば乱れ咲いてる藤の花
田植する口が手伝う孫三人
苗箱を洗う娘も日焼け気に
貧富の差なくて太陽存分に
調味料つけて接して嫁姑

大阪府 初 山 隆 盛

母の日に母子の会話できる幸
風みどりいきなり梅雨を告げられる
逆らって頭したたか打ちました
煩惱の波逆らわず遣り過ごす
道一つ思惑通り走れない

大阪府 桑 田 ゆきの

この道に錬金術を探してる
薫風にスロライフの飛行船
花散って元の大樹に誇り持ち
口ポットと漫才してる愛知博
府県境またぐ桜に隣人愛

大阪府 澤 田 和 重

毒舌の復活やまい抜けをして
待たせない人を待つて胸さわぎ
これからの余生は妻に預けとく
骨拾ってくれる仲間が先に逝き
病抜けの命三度の箸を取る

大阪府 前 田 ゆ い

初入選師は神様のように見え
夢さがし師の導きにのせられて
酸素ボンベ引き師は遠路来給えり
三日月の冴えて師匠もおわします
風薫る日のご葬儀は師に似合い

大阪府 米 澤 俣 子

すれ違う風にいのちの音をきく
引き返す勇氣持つて老いた蟻
あとで来てその場の空気まぜ返す
ワンチャンス生かしてこそ今がある
亡母を思慕えんどう豆の卵とじ

池田市 栗 田 久 子

しめやかにただひたすらに師を悼む
ひまわりにはじける色となる夕日
絵心があって尾頭付きを買う
自立して今日もいわしを食べている
ジグソーのように記憶をつき合やす

和泉市 横山捷也

一人居に犬がすり寄る日暮れ時
本命を絞ってほしい娘は三十路
ライバルが仮面をつけたまま話す
あいづちを打って仲間にされてもた
回り道した人生の友の数

和泉市 中川 楓

すみません ありがとう等みんなタダ
掌のぬくもり伝え合う見舞
新緑の山くるくるとバスの旅
牡丹見に親の顔見に来てくれる
母の忌のめぐり葉桜好きになる

和泉市 西岡 洛 醉

木洩れ日にひまわり或る日そつぽ向き
正直の歩幅一粒の徳を積む
年金の暮らしに初夏が戸を叩く
ペランダに小さな趣味が咲き誇り
老い先を労わり渡る夫婦橋

泉佐野市 山本 蛙 城

月並陳謝平成の世の無力感
買収チーム連敗続くお気の毒
安直なメール練炭レンタカ
バラ銭の温もりレジで冷まされる
ボケは死語子供に還るだけだもの

茨木市 藤井 正 雄

さえずりに耳を預ける露天風呂
前置きの長い話はやはり金
箸袋二次会賛否聞きにくる
さて何をたくらむ妻の上機嫌
手土産に無理難題を詰めて来る

柏原市 永 浜 加 津 子

風みどり飛び出して行くスニーカー
五月晴れ今日も一日大車輪
味のあるお人は賞味期限ごろ
残り物もつたいないで肥えました
自然治癒信じて薬遠ざける

交野市 森 本 弘 風

風薫る今年の四月哀しすぎ
パイオフの心配一度はしてみたい
家計簿にわが家の暮し語り継ぐ
家の鍵だけは忘れず持ち歩く
診察券妻は俺より多く持つ

交野市 山 川 日 出 子

川柳の塔高くした薫風師
生と死が紙一重の差 電車事故
新法王コンクラーベして決められた
小泉さん郵政問題根比べ
老夫婦根比べして五十年

交野市 田岡九好

犯人のようなマスクで花粉症

何にでもそれもそうだと思うはく

ご時勢で道草しないランドセル

深入りを避けて挨拶だけにする

木蓮は咲いた途端の散り支度

河内長野市 植村喜代

急がれてお目にかかれずありがとう(薫風先生)

遅桜だれ見ることなく庭の隅

花筏今日は何処まで風が吹く

トイレの球切れて困った老い二人

四月バカ嘘ならよいのに友も逝き

河内長野市 村上直樹

一杯の酒にいのちの灯を点す

飲むほどに心は菩薩身は羅漢

飲み会とゴルフの義理は欠かさない

千年の闘志めらめら楠若葉

鳴く蟬やこの世はみんな通り抜け

河内長野市 山岡富美子

背伸びしたローンが重い雪月花

未だともうせめぎ合ってる折り返し

耐ハイで天下国家を取る男

保育器で明日を背負っている男

カプチャーノ飲んで介護をする話

河内長野市 井上喜醉

五月晴れ今日も我が家は豆ご飯

人間を番号で呼ぶ大病院

予約して名医のファンになる患者

贅肉がベルトの上で胡坐かき

嘘の無い愛犬の目は美しい

河内長野市 坂上淳司

子沢山お袋の石花絶えず

母の石隈無く拭う蒸しタオル

お袋に会う夢いつも詫びている

我慢して思案して立つ夜の廁

年金に説き伏せられて蟄居中

河内長野市 水谷正子

名のとおり風薫る頃逝き給う

古稀過ぎて夫婦げんかも低パワー

まだまだが突然終る人生譜

納棺に最後の甘え頬を撫で

夫逝きて後の始末に身を削る

岸和田市 雪本珠子

引き出しの中で昔が生きている

温かい笑顔に今日も癒される

下手な嘘ついて言い訳したつもり

輪の中で馬鹿になつて僕がいる

実のならぬ木でも木陰は作つて

岸和田市 井伊東吉

セバ交流意外とファンに受けている
自転車のハンドルゆらぎ老いを知る

ガラ空きの一両目避け乗る電車

教育の不毛人災生んでいる

見学を誘うチラシのメモリアル

岸和田市 岩佐ダン吉

寄せて返す波に自戒を迫られる

血路開き今九条を守りたい

頭打った数だけ学ぶことになる

細く長くそれも人生とは思う

切り抜けた機転淋しくなってくる

岸和田市 原 さよ子

薬より効く追伸の母の文

ゆきひらのお粥ほんとうの粥の味

墨すればほのかに匂う初夏の風

喜びを短冊に書く入選句

沿線は痛みのわかる情の街(福知山線事故)

岸和田市 中島寿海

買って来た本は昔も買った本

患ってはじめてわかる辛さです

年毎に増える症状減る元氣

よい季節花粉症にはつらいとき

事故の後次々ばれる罪かくし

岸和田市 亀井皎月

こだわらず平穩祈る老いの章

今日は無事明日に言及せず生きる

野暮用と今日一日を逃げのびる

押し売りのチャイムに出ない妻の知恵

集金屋ばかり来る日の月末で

岸和田市 土橋房枝

母さんの口癖一つもつたいたい

人情も薄く感じる平成人

長生きときめつけている介護法

病んでから家族の愛を知った夫

生きるとは夢追い掛けてこれからも

堺市 和田つづや

朝露をがぶりと無農薬トマト

もう少し泣いて結論出せば良い

青い花つけそうな種播いている

妻と母そのぎくしゃくの中の僕

熱三日お金を拾う夢ばかり

堺市 加島由一

初恋の切なき思い天の川

一本のラムネを妻と飲む祭り

打ち水で美人女将の待つお客

ハンサムな夜店花柄浴衣群れ

痛風に負けないビールからワイン

堺市 柿花和夫

女房が鼻唄で謎掛けてくる
釣糸を垂らすと人が寄ってきた
散つてなお大役果す花筏
コンビニを起点に道を教えられ
文字通り遊学だったバスポート

堺市 村上玄也

逆鱗に触れて地獄の底を見る
独り居に慣れてテレビと会話する
酒飲めぬ身に退屈な列車旅
秒読みになつてからでもまだ迷い
応援団邪魔で楽しめない野球

堺市 石堂潤子

命とやこんな旨い三分粥
寄り添うて薔薇十本の金婚譜
私をまとも映すウインドウ
夫が居るからゴキブリに声上げる
老いらくの夢へ一ぱい花咲かす

堺市 近藤豊子

ふでばこのかたかたと鳴るランドセル
こんこんときけんをさとす朝礼台
女生徒の声たのもしいスピーカー
通学路チューリップの茎のびはじめ
宮参り祝詞ききつつねむりかけ

堺市 齋藤 さくら

事故後から前の車両に乗つてない
休日の名前で議員騒いでる
子離れがやつと出来たと羽広げ
忘れてた頃にイラクの恐さ知り
よく笑う友に元気をもらってます

堺市 山本半銭

春から夏庭の緑が日々変わる
恩師の訃桜一度に散りました
葉桜になつて淋しさ一入に
カラフルなTシャツどれも着てみたい
大阪の派手なおばちゃんそれもよし

堺市 宮本 かりん

伝えきれない思い瞳をかがやかせ
用心をしながら同じ轍を踏み
正直なペンがさらさら走り出す
身構えたペンがなかなか動かない
舌鼓姉妹で食べるくにの味

堺市 源田 八千代

カルチャーで古き良き日の浪速弁(薫風先生を追悼)
てんと虫と蟻の労働歌に惹かれ
願わくは五月の天に昇りたし
橘香る薫風の中眠る
彼の世でも路郎先師と柳談義

堺市西村りつえ

さわやかに深読みしない人が好き
少子化に自立の遅い鯉のぼり
わだかまり一步ゆずって握手する
迷いつつ太い藁よる豆の蔓
見返りも休止符もない母の愛

堺市矢倉五月

対向車欠伸してるよ危いよ
ポイントを掴み勝算見えてきた
無意識に彼を捜しているカルチャー
冷戦の仲裁孫を差し向ける
煽てられ口火切る役飲まず役

堺市國見蘭香

歩いてる形に靴を脱いである
寺の樹は慈愛に満ちて緑増す
まわり道して体調をはずませる
からっぽの気持ちで月を眺めてる
置き忘れられてるような昼の月

堺市神原文

利子の無い国で長生きせよと言
不安湧くやたらと物を買う春日
ボール蹴り消える愚痴なら二つ三つ
あの失言心の髷にこびりつき
七夕の笹葉と流す物思い

四條畷市 吉岡 修

きっかけはあったが縁がないようだ
お詫び文 練りに練ってる広報部
大海も見たけど井戸が性に合う
あの別れ忘れて笑う日も増えた
ラストシーン続き見たいと思わせる

吹田市 太田 昭

駄目を押すライバルの手の棘棘し
認知症妻より先に罹らねば
火傷せぬ距離を保って友に逢う
酌み交わす酒で火の粉を浴びせられ
さり気ない返事の嘘を見抜かれる

吹田市 瀬戸 まさよ

女性入れ真っ新にせよJ.R
開運は晩年からと占い師
蛤に竹の子ご飯ふき豌豆
魚屋は切らずに煮よと子持ちイカ
珈琲店心得てます定連さん

吹田市 木下 敏子

母の日のふたりの嫁のくれた愛
真っ直ぐにあやめも咲いて子も巣立ち
頼られてお世辞まるごと受けとめる
いいところ見つけてまるいお付合い
こっそりと掛けた保険の満期くる

吹田市 穴吹尚士
久しぶり妻とワルツを踏んでみる
妻に茶を入れて親しむ小半時

ベイオフに何も変りのない暮し
皇室も嬪天下になるらしい
とりあえず敵の敵とは手をつなぐ

吹田市 野下之男

反日がぴたと静まる匙加減
買わぬなら買わせてみよう安い肉
運試し前の車両に乗ってみる
連休を知らぬ幸せ蟻の列
純愛の童のキスを笑うてる

吹田市 須磨活恵

写経する心の垢も身の垢も
何よりの葉ぐつすり眠ること
無駄話無駄じゃなかった実を拾う
有情無情 絡めて今日も日は沈む
涙壺脆く目薬ばかりさす

吹田市 早川棲世

天気図は蜘蛛の巣明日は青嵐
おれのに見れば国亡ほすヤング
国連の大勢金出せ口出すな(日本の常任理入り)
憲法は読んでいないが護憲論
魔女裁判むかし教会いまプレス

吹田市 大谷篤子
さよならを抱くようにして陽が沈む
携帯の黄色い声に呼び出され

夢があるのでもう少し生きてみる
蒔草草ひらがなのよう茹であがる
パソコンが私の指に謀反する

吹田市 岩屋美明

美しく老いたいものとペアルック
枝豆はなぜかビールとうまが合い
酔っても釣りはしっかり貰ろて去ぬ
たこ焼きはなにわの文化食べてんか
前立腺工事了り高速化

大東市 南原正和

御転婆が祭りの巫女で澄ましてる
タイガース負けた日飛ばすスポーツ欄
ジルバ チャチャ聞けば思わず腰が揺れ
手の平の冷たい君が忘れぬ
アルバムに僕を縛った人がいる

大東市 児玉蛙

ほどほどがいいと大きなジョッキ出し
聴診器そんなに深く見ないでよ
いい人にめぐり逢いたいもう一度
振り向いて分かったあの日あの話
漢字いや子の名もやさしひらがなに

高槻市 富田美義

甲斐あつて妻の一坪蝶あそぶ
売りことは買つてもいいよボケ予防
嫌な感うしろの気配増す歩幅
清貧も邪魔もの多しあれやこれ
バカ丁寧ヤツバリそうか寄付集め

高槻市 井上照子

先生つと夜空見上げて呼びかける(薫風先生！)
マンションの鯉は窓辺にしがみつ
傘寿まで味わい深く日を送る
豆ご飯盛り上げ日々の無事祈る
儲かると誘われ乗つた生き地獄

高槻市 瀧本きよし

綺麗だとうぬぼれいても古希はくる
遅れても多分先には行かぬはず
愛嬌のある娘は今や希少価値
ひつたくられお喋り好きな妻無口
何をしに二階へ来たか独り言

高槻市 生田義一

喜寿過ぎて日毎故郷遠くなり
五十年忍の一字と妻愚痴る
ノータイに品格なしと冷たい目
その町の勢い映す駅広場
日中の歴史絡みのデモ止まず

高槻市 執行稲子

母と子の絆の鎖 呱呱の声
ピンチの日つもり預金の助けマン
かめへんか砂糖と塩を間違えた
花嫁の次は男の子と頼もしい
キャリアには負けぬが本番手のふるえ

高槻市 左右田泰雄

懸案を山積みにして先送り
餅肌のしつとり感を磨くパフ
これ位の段差ならまだ大丈夫
天国でも暗証番号尋ねられ
音もなく桜を散らす小糠雨

高槻市 西谷治三郎

着ることもないが着物に風通し
盗み酒 齒に浸みるのを無理二合
ポーナスが机に立った頃が華
ニッポンの国技支える外人さん
J R 先頭ガラ空きあと満員

高槻市 乙倉武史

神仏隙を衝かれた大惨事
理不尽は愛国無罪暴挙デモ
反日の会議犬猿握手抜き
百均でニイハオでかいつら並べ
野球馬鹿セバの試合はおもろいで

高槻市 傍 島 克 治

思惑が見え隠れする美辞麗句
若返り出来るてホント コマーシャル
魂胆ありそな笑顔に目を逸らす
青春の血潮が戻るジャズ祭り
不都合を削り自分史痩せ細り

高槻市 江 原 秀 夫

警戒の谷間にデビル住んでいる
改革の重荷庶民につけ回し
招かれてビールを口にした不覚
歳を経て自然に歩調合うふたり
言い難いことも気楽にメールする

豊中市 安 藤 寿美子

家計簿をつけてる人を尊敬する
一族を集めてくれた亡父の忌
ひいき力士負けてチャネル変えている
完璧なアホやと言われ生きのびる
それからはほったらかしの砂時計

豊中市 藤 井 則 彦

狸寝の稽古ができた優先席
専門は何かと孫にまた聞かれ
法律も知らずに生きている平和
血流の薬が利いてかっとなり
喪服あと何度着るかとふと思う

豊中市 江 見 清

二番目に高い薬を買ってくる
妻に感謝昭和一桁口にせぬ
京料理五感よろこぶおもてなし
外国旅行だけは夫が取りしきる
お手伝いした児の跡を片付ける

豊中市 吉 田 あずき

世界一長寿国だが視界ゼロ
ロケットよ空より地球の底探れ
春の花 野山に満ちて幸くれる
いずこから来たか燕と話したい
これからがいいとこなのに目が覚める

豊中市 岸 田 知香子

目に青葉緑地うずめた人の群
連休にカートにゆだね民家博
旬の味鱈竹の子木の芽和え
色どりのテントはずんだ行楽地
パーベキュー鼻づくにおい河川敷

豊中市 檜 谷 郁 子

我もわれもと花の王なる牡丹園
流石だな豪華を競う牡丹花
薬服用忘れなど書く母のメモ
孫台風来るので準備お菓子買う
女専車に六十路が群れて賑やかに

豊中市 水野 黒 兎

トンネルを抜け菜の花の真つ黄色

さくら鯛こと春の音がする

暫くは淑女を捨てるカニづくし

大笑いしてから妥協するつもり

滝仰ぎ轟音はいま聞こえない

豊中市 山門 タ ミ

はずむ声幼なじみの電話です

親馬鹿で気になる息子案じられ

あかんたれ足が口ほど物言わぬ

一号車乗らない事にして旅へ

あんまりな神も仏もソツポ向き

富田林市 池 森 子

そつとそつと見守ることにする脱皮

違和感を与えぬようにして生きる

口実を設けてひとしきり狂う

遊んであそんで翅が大きくなりました

しなやかに節目を越えてきた背中

富田林市 片岡 智恵子

もめごとは見て見ぬふりの風見鶏

方便の嘘もつけずに立てた波

十五夜が過ぎて孤独になった月

わがままは人のわがまま鼻につき

目覚ましの音慣れすぎて起きられず

富田林市 中井 ア キ

そよ風に触れると脆い鬼瓦

午後の街 赤い噂が駈け抜ける

それぞれに言い訳のある終電車

変わり身の早さ女の嘘まこと

越えてきた修羅忘れた笑い皺

富田林市 藤田 泰 子

信頼を乗って乗っていたのにJ R

ばあちゃんよりギヤルを乗せたい人力車

住み馴れた街で迷子になりました

激辛を食べてマンネリから覚める

追われるより追う方が好き最後尾

富田林市 稲川 恵 勇

鍵盤を叩いて老いを追っばらう

好き嫌いみんなカルテに出る答

おーいとはい掛け声にしてつつがなし

古里の匂い素足で嗅いでみる

つなぎ目を繕うている共白髪

富田林市 中崎 深 雪

ゆっくりと噛むとこんなに蜜の味

ああこれまで何を齷齪してたのか

ゆつたり気分ぶち壊したるガン告知

読みかけの本かきかけの絵どうする

とりあえず今日という日を美しく

富田林市 大橋 鐘造

私だけの貴方にしたい風の中

不器用に生きて来ました真正直

夢抱いて走り続ける走馬灯

信じてた神が時どき牙を剥く

立ち直るチャンスをくれた母の海

寝屋川市 森 茜

ピオトープ目高の学校すゝいすい

誤解したままで別れてきた握手

まん丸い月に影踏みさそわれる

こつち向いてほしいと法螺を吹いてみる

春愁やゆつたり泳ぐ飛行船

寝屋川市 富山 ルイ子

平手打ちされ収まらぬ胸のうち

悪態を聞き流せよとなだめられ

人見る目なかつたことが悔やまれる

ピアノ弾く悲しみを消す手だてかも

着物縫う昔をたぐり寄せながら

寝屋川市 籠 島 恵 子

散り終えたさくらに掛けている言葉

ふるさとの風のとよりに飢えている

分かり合えた振りをする二本のレール

にぎりめし今日はたまたま機嫌いい

父の日と一緒にします誕生日

寝屋川市 江口 度

声かけて子のトラウマを治す愛

習わんでも煙草吸うのはすぐ覚え

ランドセル探すため池干しあげて

好きなこと習うとどんだん覚えられ

恋愛をするロボットも出てこよう

寝屋川市 太田 とし子

客の猫ほめて帰った猫ざらい

和解したとは言うものの負けられぬ

無い袖を振ってうごめく負け惜しみ

夫までかあさんと呼ぶあほらしさ

カッコいい買いたい百貨店

寝屋川市 平松 かすみ

寅年の男性ひとり減りました(薫風先生さようなら)

四月末ボトリと逝って仕舞われた

花水木 今咲いてますさようなら

カレーうどん余程お好きか食べてはる

青インク滲む絵ハガキ温かい

羽曳野市 酒井 一 壺

主流から洩れて本音を吐く男

去った後シャネルの香りそつと洩れ

イエスノーはつきり言つて孤立する

人生へ答を急ぎ蹴躓く

なるほどと思う息子の口答え

羽曳野市 吉川 寿美

師の訃報嗚呼早すぎる早すぎる(薫風先生を偲ぶ)

亡父の轍踏んで生涯雑魚でいる

古里がだんだん遠い回忌膳

亡母憶う音で大根煮えている

人生は長し短し一幕一場

羽曳野市 三好 專平

刺股が平成の世で見直され

必勝になるときまってポカが出る

持統帝見習うべしと進言し

カウンセリングという膏藥に癒される

カーブではいつも速度を出し過ぎる

羽曳野市 安芸田 泰子

巡り合いはころぶ花に散る花に

散る花を我が物として風遊ぶ

履歴書に載らない罪はたんとある

食べて寝て残る時間をもて余す

飼犬が死んで運動不足です

羽曳野市 徳山 みつこ

母の日の母いそいそと豆ご飯

幸せはもらい上手な嫁がいる

スピードを落とせ列車も年月も

迷彩服はいやファッションにしても

晴マーク続くと疲れます私

阪南市 森村 美花

遊ぶ話盛り上がってるシニア族

楽しみが膨らんで行く春の雨

新緑にむずむずしてる旅プラン

夫には言えぬ疼きがひとつある

菜園を眺めて会話弾みます

東大阪市 笠井 欣子

駆け込み寺欲しいと思う甘ったれ

知らぬふり忘れたふりもして親子

我慢しよ仕事の鬼となる軒

慕われてけむたがられて一ツ屋根

ウエストは合うがこだわるこの値札

東大阪市 谷口 義

臨時休業は正当防衛です

一言に気合を入れて申し上げ

貫禄があるから言葉などいらぬ

古今東西大阪弁は便利なり

満場一致というのもちよつと嘘がある

東大阪市 安永 春

ビッグニュース跡継ぎできた娘の電話

若いのに時の氏神買うて出る

ラブコール嬉しくさせた花言葉

乗馬にもチャレンジしたい風薫る

おばちゃんのおおきにだけで和む店

東大阪市 西村哲夫

病体のままで付き合い出来る仲

値打ち無し順番制の役どころ

我が身さえきつと裏切る時がくる

夢うつつそれは夕べのサスペンス

風薫るお師匠様はお浄土へ

東大阪市 中岡 妙

不器用ですぐに答えを出したがる

片隅へ寄せたい嘘がふたつみつ

リサイクルフェアに親子の店屋さん

肩の荷が身丈に合うて離れない

春風が肩の力を抜けと言う

東大阪市 北村賢子

目的地へ無事運ばれるありがたさ

平凡凡普通之母で居れる幸

新緑の中で浄土の風に逢う

穏やかなり四天王寺の鳩ポッポ

北斗星の近く恩師の星光る

枚方市 寺川弘一

個人情報 俺も当然含まれる

金借りる方は友情噛みしめる

息子より若いドクター信じよう

ゴミ置き場置かれたものはゴミになる

ゴミの分別ランク付けではありません

枚方市 丹後屋 肇

たけのこの皮をはがせば出るくしゃみ

目からウロコ落ちて広がる世界地図

電線を揺するツバメの初だより

三川合流 背割堤の若葉騒

十石舟漕ぐ櫓にからみつく柳

枚方市 二宮山久

入園のおしゃまな孫は歌が好き

五月晴 夫婦旅する露天風呂

目に青葉幸せすぎる夫婦旅

愛妻弁当が食え今日元氣

宅急便届いた妻の笑顔かな

枚方市 安達忠央

威勢良い声に鯛の目活き返り

待たされて金魚の数をよんでいる

三ヶ月孫がニッコリはじめた

口止めをされて余計に喋りたい

封筒を開けず喜びあためる

枚方市 宮川珠笑

眩きを妻のあくびに押さえられ

合縁奇縁日本語話せぬ嫁が来る

転倒のたびに歩幅が狭くなり

エンストのように言葉が出て来ない

難聴は消えたが内緒にしておこう

枚方市 森 本 節 子

乙訓寺傘に護られ牡丹花

さつき晴れモチの木ぐつと枝をはり

筍を目当てにお参り楊谷

パフはただけであの子は化粧映え

眼鏡にも頼れなくなった目のわるさ

藤井寺市 高 田 美代子

これでも大人かと自問自答する

泥舟であろうが何時か岸に着く

プライドがあつて依怙地になつてゐる

赤信号を見ない振りして行く大人

ロボットに任せてからの人余り

藤井寺市 太 田 扶美代

春絶唱いのちゆつくり萌えてくる

執刀医同姓と聞きほつとする

マシユマロの感触母に似てないか

リング剥きながらやさしくなつていた

釘煮する去年と変わらないうらし

藤井寺市 鴨 谷 瑠美子

いま何を言うてあげても火に油

試されているのかお釣多過ぎる

外出着愉しい彩を組み合はす

ひとくせもふた癖もある人と住む

夕やけの匂いの抜けぬ玩具箱

藤井寺市 若 松 雅 枝

さわやかに生きる手だてを考える

信じ合うただそれだけである平和

話すことなんにも無くて良い夫婦

欠点も長所もあつて父が好き

歳かしら食べ放題が食べ切れぬ

藤井寺市 中 島 志 洋

出会いから長いドラマの幕が開く

やんわりと言われた皮肉気が付かず

クーラーが暑さに弱い子に育て

ネクタイを緩めてからの旨い酒

ピヤホールここでも女強くなり

藤井寺市 楠 昭 子

反発で孫たくましく見えて来た

ほどほどの持ち味で良し身を守り

割り切れぬ数字あるからまだ続く

気まぐれな風に狙いを奪われる

だれよりも母は小さくなりました

箕面市 出 口 セツ子

信じたくないのに読経流れてる(薫風先生を悼む)

出逢いから四十年で来た別れ

何もできぬままに恩師は逝きにけり

生きざまを飄々として教えられ

自然体だから優しさ胸に染み

守口市 石森利昭

頭ごなしに怒る親父もいなくなり
杯に愚痴を聞かせて独り呑む
初めての名の果物が出る食後
頂点を極めた椅子にある孤独
親としてしつかり背中見せておく

守口市 井上桂作

憎しみを忘れこの世をすごしたい
つい顔に出さぬつもりがまた顔に
淡い夢かなわぬままでも追いつけ
長生きは必要なしと保険庁
反日は民族主義のエネルギー

八尾市 宮崎シマ子

窓開け放ち節電の風鈴よ
妻が我を通しペランダは洗濯場
殴られて殴り返せずひとり酒
恋のかけひきぬるめのお茶を出すことも
マツケンサンバで阿波踊りでもおどろうか

八尾市 村上ミツ子

散る花を供に浄土へ旅立たれ
JR乗る娘を送り出す不安
何輛目に乗っているのか確かめる
心配抱え仕方なく乗る電車
安心をはずたずたにした列車事故

八尾市 宮西弥生

輝いた日に戻りたいユニホーム
散歩からもう近所のええ噂
一本の大木光る一刀彫
後ろから背を押す風は仏だろう
貧しさを見せぬ横顔から春に

八尾市 吉村一風

笑い方妻は上手に使い分け
思いきり泣いて未練をすばり絶つ
年輪の見せる笑顔の皺やよし
やりたいことまだ有り男捨てられぬ
子をほめてほめてやる気を起こさせる

八尾市 山本宏至

気を許す椅子には深く腰かける
治るのが早い名医の荒療治
見得切つて喝采を呼ぶドサ回り
ぜいたくな桜吹雪に春惜しむ
人情のあふれる海に溺れてる

八尾市 内海幸生

居直つて生きるしかないあとが無い
子や孫の世話にならぬと思うだけ
花開くチャンスは一日なのに雨
隙衝いた敵にも弱点たんとなる
もう六年自炊で磨く男鍋

八尾市 生嶋 ますみ

四季の風知らぬ花屋のカスミ草
少子化へ団地にさびし鯉のぼり
プランター花と野菜が手をつなぎ
手を貸してほしい背中へ貼るくすり
出来るなら介護保険にたよらずに

八尾市 長谷川 春蘭

私の生きた証に子は五人
五月空過疎の息づく鯉のぼり
激しさと哀しさ織って新能
市場籠揚げた男が板につき
指切りの旅も果たせず友は逝く

八尾市 井尻 民

カモフラージュしながら生きる不整脈
平熱に戻って見えた自然体
年輪を重ねた人の渋い背な
向う傷自ら晒す過去の夢
湯豆腐をひとりでつつくあほらしさ

神戸市 山口 光久

一冊の本に人生変えられる
馬鹿になることができずに損ばかり
失った過去を捜しに古本屋
にやにやを演出しているマンガ本
居酒屋に悩める志士がとぐる巻く

神戸市 伊勢田 毅

庭の草油断するなど攻めてくる
電話口透明な声孫二歳
スコア出ぬゴルフを風のせいにする
左遷地も住めば都の風が吹く
美人薄命 妻の姉妹は健康だ

神戸市 池田 善守

微笑を突然奪うJ.R
春風も花粉まじれば兇器なり
先送り出来ぬ宿題CO₂
ジムに来て若さと元氣もらいうけ
古稀をすぎ妻にはノウを言わぬ日々

神戸市 山口 美穂

年金のことより九条を思う
言い勝っても犬の甘えに負けている
ヨン様でないわたしの好み探してる
村から市へみんなの暮しは変らない
胡瓜トマト オクラも加わる小さい庭

神戸市 木村 貴代子

脚光を浴びた記憶が邪魔をする
事故速報見ずにはおれず見ておれず
生命より利益重視のツケ無慘
漠とした不安が消せぬ未来像
安静と言われて脂肪ばかり増え

相生市 中塚 礎石

兵士の碑 号令のまま東向き
紙おむつ まだまだ生きるから頼む

なぜだろ傘寿の坂で身構える
正直な朝の鏡が怖くなり

年金に合わせて二人ひそと住む

芦屋市 黒田 能子

桜散り風かおる日の詠の知らせ

川柳塔の星となり輝やけり

師の講義朗々として耳にあり

出直しはあの履きなれた軽い靴

芝居がうまい泣きたい時に笑う人

尼崎市 軸丸 勝巳

トンネルも造る造幣局の春

わが町のニュースで埋まる重い日日

連休は危ない日本から抜ける

花やよし葉桜もよし散歩道

交流戦揉めた去年の花が咲く

尼崎市 田辺 鹿太

掛け声をかけると腰がシャンと立つ

牛丼が食べたいなどという茶の間

睦ましい夫婦の屋根に虹が立つ

口に戸をたてて近所とお付き合ひ

会釈しているがほんまは好かんタコ

尼崎市 林 昭三

七人の敵が出来ても味方なく
耐えてます出てゆかれると困るから

次女はいい気楽に恋の二つ三つ
とほとほとガイドの旗に追いつけぬ

一品は奴豆腐と決められる

尼崎市 春城 武庫坊

首輪ない犬公園を飛び回る

落石や過去の恨みが落ちてくる

微温湯に馴れだしてから物忘れ

旅はしたいが乗車気になるJR

列車転覆日本中に尼崎

尼崎市 春城 年代

大正はとおく亡父の浪花節

やたら消防車がゆく風の町

惚けることは自慢じゃないよ老女たち

八十代を余裕の歳と思し召せ

いつの日か捨てねばならぬがらくたよ

尼崎市 長浜 美籠

花疲れ月を仰いでただひとり

二幕へ移るに丁度よい間合い

後半へサブリメントが効いてくる

落日の岬をまわるカモメ二羽

煽てられその気になった木の芽どき

尼崎市 松下 比ろ志

年金に馴染み暮らしが締まつてる

無理するなの声が天から降りてくる

お婆ちゃんと妻を呼んでる母の日

新緑で俗塵落す箕面溪

あれからは二輛目までは避けて乗る

伊丹市 山崎 君子

てふてふと昔の匂う文字にあう

昼の夢あんさん じょうちゃん師の声が

アルバムに旅の思い出細い顔

鯉のぼり迷子をさがす愛知博

マネキンのヌードまぶしい衣替え

川西市 西内 朋月

食べられることを知らない養殖魚

青信号安全だとは限らない

キッチンに黄色くなっているレシピ

煩惱が消えて無色になる命

輪の中で苦手な人にする微笑

川西市 米原 雪子

孫の粘り回転ずしへ行くことに

手作りも箱に入れば冴えて見え

やつと取れた予約の知らせ弾む声

うすうすは邪魔と知っても世話をやく

弁当箱デカクなつてく成長期

三田市 久保田 千代

カラフルな鯉が五月の空泳ぐ

おふくろの味をお金で買うてくる

ちよつとブレイク南の風入れてみる

老いたかな散る花びらが好きになる

騒音にゆとり無くした村の道

三田市 北野 哲男

脈拍が上がる足音待っている

モナリザの視線を今日は避けている

不肖の子もつて長生き出来てます

朝六時もうコンビニが混んでいる

鈍感なお方ですネと睨まれる

西宮市 西口 いわゑ

共白髪 生きた勲章だと思つ

美辞麗句 女くらつとしてしまふ

老木にいとおいしいほど花が咲く

労わられますます傷が深くなる

あの人は宇宙人かも知れないぞ

西宮市 山本 義子

冷蔵庫いっぱい詰めて凡なる日

母を看た唯一わたしの救いなり

苦い過去もむらさきにする花菖蒲

列車事故 神さま酷と思し召せ

古希越えてまだ剣ヶ峯ふみ迷う

西宮市 秋 元 てる

それ以上言わぬ約束癩を病む
上り下りまさかの坂もあるこの世
取敢えずばかりで生きて来たわたし
いい所で一息入れるミステリー
素通りの出来ない性を知る姉妹

西宮市 牧 淵 富喜子

古里の道まっ直ぐになり迷う
明け方の花の素顔を独り占め
通過する手前で黙禱絶やさない
蛙なく久方ぶりを聞いている
簡単に人は裏切る鯨開く

西宮市 緒 方 美津子

九官鳥呼ぶだけ呼んで知らん顔
あの人に盗んでほしかったところ
泣き上戸だったと笑う伯父卒寿
遠耳のけんかのような睦まじさ
邪魔になるお手伝いにも礼をい

西宮市 井 上 松 煙

鮎ずしの臭いが結ぶ郷土愛
打ったアー逆転勝だバンザーイ
不義理しても咎められない歳となり
狂言のスローテンポが性に合う
予定表詰めてはすぐに消している

西宮市 菊 池 トミエ

犯罪の手口を変えて襲いくる
病床で明日は来る子の待つ永さ
日溜りで猫もあくびをする日永
事ありて家族の絆深くなる
身の丈で暮す余生の軽い靴

西宮市 坪 井 孝 一

人生の序破急 波瀾あり過ぎて
頑張らず素敵な日日を目指してる
我慢の目いやな世間が見えてくる
微笑みを混ぜると酒も夢を見る
粉っぽい黄色いカレー母が居た

西宮市 亀 岡 哲 子

平凡の中のこだわり味噌の味
順調に歳とっている風みどり
幸せは大きな嘘もつかず生き
気がつくくと長老席にいる夫
年齢不問たまにあります求人紙

姫路市 古 川 奮 水

駅前のおでん屋消えて夢冷える
観光の地図は記念にスクラップ
一宿の友と網走博物館
北海道 雪と連休戯れる
ジューシーな香りが誘う北新地

兵庫県 大谷 幸次郎

誰も来ぬ連休の日々風薫る
菜の花の黄が嬉しく春謳う
ブレイキの利かぬスピード恐ろしい
海山の幸ビタミンをたつぷりと
春蘭がこっそり淡い紅をさす

奈良市 米田 恭昌

鯉のぼりの半旗掲げて師を悼む(薫風先生を悼む)
薫風下ばらの花にも師を偲ぶ
柳友集いばらを愛でてる(霊山寺(吟行))
ささやきの小径で熟女姦しい(歩く会 2句)
氷室神社枝垂れ桜が春を呼ぶ

奈良市 天正 千梢

不眠症眼鏡を拭いてテレビ版
風通しよくて長いつき合いで
裏表知ってるマダム帯の位置
星空が肴大ジョッキが並ぶ
赤トンボ止まって地蔵にんまりし

生駒市 飛永 ふりこ

せかせかと歩くヒト科を亀笑う
根回しがすぎるあなたに逆風が
見渡すと独りよがりな高い鼻
許したい胸の振り子が鳴り続く
ありがたい勿体ないが身につかず

香芝市 大内 朝子

春眠のごとく恩師のデスマスク(師を偲ぶ)
病床を見舞えばやさし生き仏
句集読む師の面影を偲びつつ
立膝のありし日の師がなつかしい
病魔から解かれ自由な雲の峰

橿原市 居谷 真理子

やさしさが鍛えられてくポランティア
思い出が寄り添うてくる土の道
鉛貫て身の上話聞くはめに
上質の笑いゆつくりやつてくる
神さんが精魂こめた美女である

橿原市 安土 理恵

別々の思いで祝う記念の日
潔白と言うから黒にちがいない
後学のために見学する家裁
軽い気で言うてしもうた好きやねん
思いどおりならぬこの世が捨て難い

大和郡山市 坊農 柳弘

ほんのりと匂う杜若のお洒落
利口さと狡さカラスの知恵袋
飾らない言葉で人を煽り立て
過信した夏へエルニーニョの誤算
念入りに微罪を流すシャワー室

奈良県 渡辺富子

酒とろり男の夢がふくれ出す
冷ややつこ黙ってつづく差し向い
夢追つてひらひら翔んでいく娘
青田風 里の便りが途絶え出す
面倒なこの世の旅もまた楽し

和歌山市 牛尾緑良

同行二人悔いを少々削ぎ落とす
ミルク飴時々かえる幼い日
約束と健忘症がせめぎ合う
大吉を過信しているのも若さ
着メロを変えて私を塗り直す

和歌山市 福本英子

あり余る自由 連休過ぎたのに
未知の道踏んで勇気を確かめに
お遍路の誘いも来なくなつた脚
言い訳に使う便利な歳がある
お詫びから始まるニュースNHK

和歌山市 桜井千秀

先生に従いて歩いた法善寺(薫風先生との思い出 3句)
夫婦ぜんざい先生困んだ小雨の日
先生と半ぶんこしたみかん畑
何もかも納得づくの道だった
あやふやなままの昨日がまだ続く

和歌山市 木本朱夏

風薫る五月を待たで逝き給う(薫風先生を悼む)
凜として鶴大空へ翔び立ちぬ
師を偲ぶレモン一個を掌に
ヤアと手をあげて浄土へ立たれしか
師の文の青いインクの温かさ

和歌山市 田中みね

水面下で既に決まっていた話
両親から確と受け継ぐ肩の凝り
ブランド名を外向きにして持つバッグ
夫婦ではもつたないよラブホテル
挨拶は苦手なんです東大出

和歌山市 古久保和子

オーバーヒートしながら街の水を飲む
君に向く仕事はあると慰める
長靴を履くとフアイトが湧いてくる
食べ方の知らないカラフルな果実
迷つたら素直に聞ける年の功

和歌山市 松尾和香

波頭、心を洗う熊野灘
指切りを破つた僕の迷い癖
匂を盛る母の手料理里の味
姑と嫁仲よく生きる車間距離
おおらかな母の子育て孫元氣

和歌山市 堀 畑 靖 子

闘病記ポツリ話せるようになる
ぶあいそうでもね見ました別の面
ミステリーハウスにならぬよう掃除
坂道を登りつめたる恋や恋
沈黙をつくろったけど如何にせん

和歌山市 楠 見 章 子

お茶の湯気そろそろ朝が動きだす
風みどり足の裏まですべすべに
ハンバーグ好きな男の細い顎
落書きの中に本音も入れておく
初夏の風潮の香りも連れてきた

和歌山市 岩 本 美智子

痛み痺れの苦行に耐える夜の底
眠剤の浅い眠りに母と逢う
犬鳴山夫と登る泣きながら
スタスタと私が歩く夢の中
隣人が見分けられない認知症

和歌山市 玉 置 当 代

札幌の夜景に酔うたフルムーン (札幌 2句)
白樺の林抜ければビルの街
海ほたるアクアラインも波の上 (千葉 2句)
風紋がきれいな九十九里浜よ
帰宅して番茶が旨いそば枕

和歌山市 木 村 初 子

草萌ゆる緑の風に深呼吸
八十路にも大きい空を見るゆとり
花びらと共にほおばる握り飯
無にかえり風に流れる雲を追う
長生きの幸ここにありデイケアー

和歌山市 武 本 碧

夢詰めた風船神の手を離れ
崖つ縁おんば日傘が邪魔をする
大らかな喉に小骨が立っている
流したい憂さを他人が塞ぎ止める
合併へふるさとの町他人めく

和歌山市 山 口 三 千 子

肝心な時に頼れぬ破れ傘
口の暴力心の傷が深くなる
母の日に血圧計を息子から
線一本引いてけじめをつけました
永久に立つ旅の準備は弾まない

和歌山市 宮 本 三喜夫

喧嘩する相手あるだけ幸福ね
花便り計画立てて間に合った
人並みに生かされているありがたさ
運命は明日のことなどわからない
法王も大聖堂に落着いた

海南市 谷口義男

豊かな国に心の飢えた人多い
帳尻が合えば内容など問わぬ
変化球妻は見事に打ち返す
見栄張った顔で同窓会へ来る
昭和史の悲運背負つて来た世代

海南市 堂上泰女

亡き父の遺伝子だろうこの一途
ノーと言えぬ母さん少し疲れ気味
はんなりと潤いくれる花水木
胸張つて生されば風が心地良い
子を産んだ娘まだまだ子供ちゃん

和歌山県 中後清史

陽光を浴びる緑が素晴らしい
新緑の梢を渡る初夏の風
木漏れ日の囁きを聞く森の中
静寂の森で聞こえるわらべ歌
葉桜をむし返らせる蟬しぐれ

鳥取市 土橋はるお

闇に目がすっかり慣れりや歩けます
嘘言えぬ月がしつかり見てるから
溝掃除わたしがしますさわやかに
午前様こっそり茶漬流しこむ
大阪弁が道をたずねに来る畑

鳥取市 加藤茶人

しがらみがわが家にはない娘のオナラ
スピードを競う何かを置き忘れ
その気にはさせるが金は出し渋り
今日のお茶うまい和菓子は加賀土産
貧乏に産まれ何食うてもうまい

鳥取市 春木圭一郎

意識して背筋をすつと伸ばしてる
心から笑えることを見つけない
健康な笑いに脳も若返る
いやなこと当たり前だと思いたい
次のため大事ぼかんとする時間

鳥取市 田村邦昭

ほほえみが微妙 娘の意地悪さ
悪くとも良くとも酒のせいにする
もの言えぬペットが愚痴を聞いてくれ
大成がかなわぬ夢とあきらめず
誘惑に負けて無色になりきれぬ

鳥取市 美田旋風

若い日の無用の用が物を言う
褒められた趣味へ悪友燃えてくる
裏の顔バレて表の顔が泣く
親の癖子に見てひやり汗をかく
先輩面するとみんなが逃げて行く

鳥取市 林 露 杖

踏切りで車窓の顔と目が合った
模造葉に包まれ店の柏餅
老妻と宇宙の話して疲れ
母の日だ温い鯛焼妻と食う
物忘れ度忘れちよんぼ勘違い

鳥取市 塔 寛 子

すぐにまた口も手も出し生き急ぐ
予定表びつしりつまり老いを研ぐ
ワタシだからこなせる自負に生かされる
告げ口に耳貸しどうも落着かぬ
用済みの鯉 群泳の列に入る

鳥取市 田 中 憧 子

まだともう使い分けする病み上がり
ジグザグの人生だけど悔いはない
贅沢を覚え雑魚にはもどれない
病む母は冬も重いと夏布団
買物は食後に行けと儉約家

鳥取市 宮 脇 道 子

戦中派食満ち足りて蓬摘む
母一人チューリップの花語りかけ
誕生日梅酒で酔って良薬に
誕生日よくぞ生きたと褒める我
一鉢にメロンを植えて愛そそぐ

鳥取市 土 橋 睦 子

脈々と相続をする川柳誌
ポーナスの話は嫌い縁もない
ツマとしてやさしく添うている大根
遺伝子とあきらめるしかないトホホ
蝸牛雨のやみまに虹を見る

鳥取市 徳 田 ひろこ

宮殿に栄華の夢と血の臭い
かなしみを呑み込み静かなるセーヌ
街並の歴史に叛くものはない
佇めば蒼きモナリザ嘲笑う
エスカルゴよりもやっぱり蟹が好き

鳥取市 録 沢 風 花

風薫る五月訃報の雨が降る
安全神話つぎつぎ崩れゆく日本
悔んでも悔みきれない大惨事
魔術師のように桜は衣替え
血液がサラサラの手で菜を刻む

鳥取市 吉 田 弘 子

やりきれぬ憤りと無念献花にも
就職難畑ちがいを覚悟する
豆のつる むげん信じた青い空
たまだから楽しく食べるひとり飯
相談の結果を包む金一封

鳥取市 杉本孝男

眠れない夜繰り返す深呼吸

酔うた真似されて孫にもからかわれ

闇雲にくしゃみが出るよほめ殺し

窮極のルールは弥陀の声で決め

季節感狂わすハウス物溢れ

鳥取市 山本益子

長生きにいひガソリンを補おう

アドレス帳のうしろページは丸秘書く

七人の敵どんな顔触れ覗きたい

コココーラ子供が飲むと歯が消える

飲む話さつとまとまる平社員

鳥取市 山宮愛恵

人のよい中途半端も好かれたり

反省に反省のいる繰り返し

大声で笑っていると救われる

うっかりの波がひたひた押し寄せる

物忘れいつも何処でもつきまとう

鳥取市 奥谷彩子

天を抱く夢見て二葉眼をさます

生きている証そう鬱くり返す

向かい風翔び立つ刻を模索する

生きているだけで万歳アドバルーン

花道にブラックジョーク埋めて置く

鳥取市 福田登美

憂きこともプラス思考に今日生きる

心の灯余韻を繋ぐさみしい夜

友情の電話嬉しく声つまる

飛ばし読みされると困るお経本

五月晴れ無駄でも化粧して見たい

鳥取市 夏目一粹

千切れそうでも絡まっている男女

家のため世間を狭く生きてみる

棘のある人に甘さが見つからぬ

ちよつとした仕草に思いやりがある

欲あれば寿命も延びる気がします

鳥取市 富山檳榔樹

心眼を磨いてにらむ石仏

燕飛び雛の餌運ぶ青田風

うしろにも目がある母の小言受け

月をうしろに帰る夫婦の影長い

ソユーズを飛ばし地球を見張りする

鳥取市 倉益一瑠

弱点を隠すパッドは高くする

シッポ振る生きたい欲が透けて見え

羽化はいま少女に風が吹き抜ける

白旗を振ろうかオイル切れてきた

若いつていいなオンボロ着て似合う

鳥取市 岸 本 宏 章

友だちがみな貧乏でありがたい
贈与税そんな心配してみたい
円卓を囲むと物が言いやすい
自信ある顔が正面向いている
堂々と吸えぬたばこが不味かるう

鳥取市 岸 本 孝 子

仏とは楽しい話だけをする
大声で笑うと体軽くなる
旅プラン金と暇とがかみ合わぬ
連休は癒しの森にでも行こう
流行歌覚えてボケを封じ込め

鳥取市 西 川 和 子

花束を抱いて怒りと悲しみと
涙雨友の遺影に香を焚く
回復へ飯が力を付けてくれ
太つても三度の飯は欠かせない
ご亭主は霞んで妻は飛んでいる

鳥取市 福 西 茶 子

野あざみの棘よ傲慢すぎないか
のんびりと暮す嫁妻母終えて
鶯もあんじょう鳴いて春さかり
新緑に包まれ碇草の舞
イエスノー言えず陥る自己嫌悪

鳥取市 上 田 俊 路

水増ししてもやがては薄くなる中味
今朝もまた百を夢見てジョギングだ
ひとはみな悲しみ秘めて生きてゆく
目が合った日から心を捉えられ
美しい嘘みんな真面目に聴いている

鳥取市 永 原 昌 鼓

オレ流の料理で家族手なずける
現ナマへ尻尾をふらぬ自負がある
ブランコに揺られてしばし児に還る
どの服で出ようか緑萌えだした
明日ひらく蕾の笑い声がする

鳥取市 西 村 黙 光

惚け止めに毎夜お神酒で身を淨め
惚けたかな記憶装置のひどい錆
惚けるのがとつてもうまい二枚舌
惚けたのか話相手の名が出ない
夕暮れになると狂うよ羅針盤

鳥取市 中 村 金 祥

引力の作業はいつもサツとする
紙一枚で尻込みなんかしておれぬ
つべこべと言つてはいるが朝の露
私にも責任一分あるらしい
オンボロになつても人は進化する

鳥取市 有沢 せつ子

弁当箱大きくしてと四年の児
洗車する予定の朝に黄砂降り
大切な友達だから裏も見せ
洗濯も晴れが続いて底をつく
森林の気をいただいた深呼吸

鳥取市 鈴木 一弘

孫の手が届く背中に鈴の音
渋柿も甘柿となる母の知恵
土用波うなぎに難が寄せてくる
くよくよを置いてきました旅の宿
身にしみる無事に届いた忘れ物

鳥取市 近藤 春恵

子や孫の愛につつまれ喜寿迎え
おにぎりが無言の愛をくれました
怪我をして家族の愛の深さ知る
たつぷりと水をもらった花が病み
たつぷりと墨ふくませて命名す

鳥取市 近藤 佳子

神様は優しいかたと信じたい
曼珠沙華咲き競うなか君が居る
風ぐるま回りたくない風もあり
どう育つ思いあぐねた子も五十
花を愛で地酒を愛でて人を恋う

倉吉市 山本 玲子

玉垣に先祖は信仰心きざむ
神さまと指切りしたい願い事
ご隠居が仕切つてくれる村祭り
割り勘だ飲めや食えやと調子よい
いい話何度きいても飽きません

倉吉市 牧野 芳光

連休に頑張り過ぎた筋肉痛
年金を補う野菜植えている
煤だらけの顔が支える製鉄所
ラーメンが誘惑をする午後十時
恨みはないが沖を睨んでいる漁師

倉吉市 山中 康子

湯舟からはな唄もでる有頂天
一途さに泣いて泣かせる子のセリフ
悪玉を抜いてすっきりする視力
寂しさをしわがれ声がなお誘う
気楽さは老いふたありの離れ部屋

倉吉市 最上 和枝

恋に落ち隠れたパワ―噴き上げる
不倫願望包んで夜の汽車に乗る
春の来ぬ冬は無いもの雪に堪え
希望する席には他人が唾つけた
突然死希望しながら医者通い

倉吉市 米田幸子

堂々と人の情けに胡坐かく
ブランドの靴がなめたか足をかむ
恋人と熱い想いで見た映画
学校をさぼって行った映画館
アイラブユーなんてわからんことをいう

倉吉市 野口節子

同病の仲間がくれる深情け
血管の壁に悲鳴をあげられる
ピンク色卒業出来ぬ喜寿傘寿
ハングリーの頃がきらきらしていたな
ブレーキを持たぬ心が刃物持つ

倉吉市 猪川由美子

自殺願望仲間とやれば恐くない
ケータイ普及恋も手軽になつてくる
真紀子節 毒オモロイが票成らず
弱腰外交 総理へコルセット贈る
鬼のかく乱寒暖酷い地球だな

倉吉市 松本よしえ

やれやれと仮設住宅灯がともる
牛突きも出来た災害乗り切ろう
オンパレード漁船連らねてありがとう
列車事故過密ダイヤの恐ろしさ
悲しみのやり場トップに向けられる

米子市 政岡日枝子

鈍行という友がいる旅仕度
さわやかに初夏を感じる足の裏
少年は無限の色を多く持つ
夫婦箸まだまだしつかりと握る
憎むのはよそう安眠するために

米子市 林瑞枝

娘の誘う加茂川遊覧して戻り
新緑はいいなあ栗鼠と小半日
大地抱く伏流水は喋らない
雫して花も褥りを深くする
うなだれて仲間と語る向日葵だ

米子市 白根ふみ

小悪魔のえぐ味を抜いて露の臺
わたくしも鳥も新樹に酔うている
連休は二三見舞に行つただけ
もずくにも春の香りが確かなり
飲み干した今朝の銘水から力

米子市 澤田千春

遅くないこれから植える実のなる木
子の感性無限に伸びるすばらしさ
これからは空を見ること忘れまい
生きている限りどこまで種をまく
野仏のあたりの風はさわやかだ

米子市 野坂 なみ

人も仏も花のパワーに支えられ
握手の手心の奥をのぞきこむ

恩に着ることはけろりと忘れてる

ブレアさん三期の尻尾切れそうだ(英国選挙)

老母の言葉をエンディングノートに包む

米子市 木村 春枝

気が付けば離れ小島に一人ぼち

核家族睨みまかせる主欲しい

うつの日はせめて器に夢を盛る

前向きへ仕切り直しの眼鏡拭く

白魚の指物語る浮き沈み

米子市 光井 玲子

母にでもこころ覗けぬ反抗期

愛し子のためなら罪を着るだろう

お父さん少し怠けていいですよ

童とて油断は出来ぬ世の中だ

迷い道どこまでゆけば謎とける

米子市 中井 ゆき

万緑が生きる力を吹きこんだ

何時までも未練ひきずる飛行ぐも

もう結構とんで来ないで黄砂殿

おしよせるみどり煩惱吸いとおつた

電線のガラスがにらむ目をそらす

米子市 青戸 田鶴

香ぐわしい五月の風に癒やされる
手の平に残る弟との別れ

気合い入れて今日のお客をもてなした

父のバースデーめずらしくにらみ鯛

きぬ着せぬ言葉で友をきざづけた

米子市 門脇 晶子

傘寿から鈍行線に乗りかえる

母の駅姉も私も通り過ぎ

左手を添えた握手があたたかい

メガネはずして空の青さを見きわめる

外出はオシヤレメガネをかけてます

米子市 本吉 宗光

あの時の愛を育てた五十年

今にして初恋のひと思う日々

縁だなあ一週間に一度逢う

彼女から愛の告白夢に見る

決められたカラオケ今日は唄う日だ

鳥取県 植田 一京

美人画にほくろを一寸入れてみる

また噂されているらしくシヤミ出る

人の世の波にもまれて花が咲き

万札の行方は風に聞いてくれ

脚色も入れて綴った半生記

鳥取県 石谷 美恵子

指先も老いて小銭がすぐ出せぬ

青白い顔で健康法を説く

性格は直らぬせめてもの笑顔

特別という招待がみなにくる

ささやきに不向きな人の太い声

鳥取県 蔵本悦子

春は罪 楽しくさせて眠らせぬ

さくらさくら みんなが美女に見えて来る

オンボロに聞くとなんでも知っている

生きるには飯に醤油も掛けて食う

花粉症 与作もなっているらしい

鳥取県 山下節子

ガイドなどいらぬ さくらは咲いて散る

現ナマが絆締めたり緩めたり

米食わぬ人が田んぼの上に住む

オンボロの脳で回路が狂い出す

内心をよみとる握手ゆつくりと

鳥取県 谷口次男

猫の手を借りた田んぼが化けホテル

アベックも魚もすぐに岩陰に

縁側に母の命や置葉

JRスーダラ節の大合唱

希望のせ宗谷岬が凜とたち

鳥取県 佐伯やえ

心に別れきめて最後の手を握る

大声で話のできるいい家族

愛無限ことしも届くかしわ餅

あたたかい土のいのちを知る蚯蚓

師の色紙 月と砂丘は宝です(薫風先生よりの色紙)

鳥取県 細田裕花

緑濃い野心を抱いた苗植える

雑草の小さな野心引き抜かれ

五月晴 野心がひとつ芽を吹いた

深呼吸 緑のエネルギーもらう

薫風に勢いついてきた背中

鳥取県 竹信照彦

還暦を過ぎて兄弟夫婦会

畔草を刈るのも一回では済まぬ

農薬が薄いかどじょう顔見せる

雑草に四季あり畑手が抜けぬ

飽食が過ぎて贅沢 山野草

鳥取県 平尾菜美

持ち前の壺にらくらく愚痴おさめ

貝になる覚悟が愚痴をきいている

成りゆきを読んで動かぬ舟の中

積み上げた落葉無にせぬ汗がある

夢の權もてば明日の櫓がしなる

鳥取県 深田 俱久

合併の町を違えず燕来る
さりげなくハガキにマル秘認める
八十年探す自分に未だ逢えぬ
赦せない己を許し仰ぐ空
裁くのも裁かれるのも俺はいや

鳥取県 奥田 保子

供養にもうわざ話をしてやろう
留守電へ話すことばがつまりがち
どうしても良心売る気ありません
うかうかと話にのつた後の悔い
バスの中ガイド無視して寝てばかり

鳥取県 山本 正光

金と欲 恋もしてるしまだ死ねん
満点でない爺だから気は楽だ
鎮魂の鐘ひびかそう大惨事(電車事故)
連休も静かな日日の里に住む
旅帰り大山見えてほっとする

鳥取県 澤 裕子

春らんまん蝶もわたしも弾んでる
ひと呼吸おけば心も風いでくる
ちっほけな悩みだ天を見て気づく
オンボロになっても母は母である
添いとげて酸いも甘いも知りつくす

鳥取県 下田 茂登子

砕けたこと何度あったか夫婦仲
策士家の罫もだんだん老いてきた
学歴が人生だとは考えぬ
金婚式欠席に丸つけて出す
負け知らぬおとこの背にも涙あり

鳥取県 国森 武子

何も彼も姑に習った五十年
いつまでも美人の姑を忘れない
故郷がだんだん遠く思われる
故郷の夢もだんだん見なくなり
頭にはいつもはなれぬ生家あり

鳥取県 盛田 夢路

決めてからギユツとへその緒締め直す
ジグザグの足跡つけて古希走る
エルニーニョ日本の四季を惑わせる
ひつじ雲に誘われちよつと憂さ晴らす
老い先は気ままで目次など要らぬ

松江市 三島 崧丘

古希の坂パワー全開して登る
梅雨明けへふとん二枚を干して夏
夕映えの海が眩しい鬼瓦
ライバルと目す男は赤が好き
電柱の凜と立ってる使命感

松江市 小川 注湖

平凡でよいと思いつ欲がある
損しても騙したことはありません
捨て犬が我が門守る縁不思議
たつぷりとかいた汗には春がくる
卒業式職かニートか分かれ道

松江市 銭山 昌枝

キャンパスの花野に沈む大夕陽
空間を埋める手頃な絵を描こう
大観の迫力足が動かない
消化不良のままの昨日がふて寝する
ご期待に添えない妻で終りそう

松江市 佐野木 みえ

不覚にも転んだ段差一センチ
娘は銀婚 私花と五十年
牡丹園どの花見ても王様だ
庭中がつつじに染まるみどりの日
ここだけの話は加速ついてくる

松江市 川本 畔

嬉嬉とした自慢話を囁む欠伸
心ころころ遊ばせながら嘘を言い
わたしの耳にわたし聞かせる衣の音
噛みころす独りの宵があつてよし
美しい夢見て女磨こうか

松江市 松本 知恵子

バラよりもカーネーションの愛のいろ
ふるさとはれんげたんぽぼ泣きにゆく
目に青葉ほととぎす鳴く山何処に
機械化に案山子聞きたい田植え唄
青春のときめき揺れるフォーク聞く

松江市 安食 友子

終極を逆算しよう微笑して
不機嫌な切れ味ですな今日の乗り
ネイルエナメルじいんと甘くたぶらかす
メールです毒か葉かわくわくだ
自画像は物怖じしないから好きだ

出雲市 岸 桂子

陽が沈む浄土の色に染まりつつ
美容院ゆつくり噂聞いている
日めくりの格言希望湧いてくる
母の日に一番咲きのバラを剪る
とんぼ返りが上手になった時刻表

出雲市 久谷 まこと

行き先を杖は知らない曲がり角
見えぬ糸やはり誰かが引いている
言葉じり底まで透けて見えにくい
葉漬け自分の意志はままならぬ
定置網 魚は利口迂回して

出雲市 城 多喜

牡丹散る何の未練もないように
小豆煮る今日を目度くするため
平凡に生き平凡に老いてゆく
へアブラシ胸の纏れも梳したか
ジャンケンの五本の指は皆達者

出雲市 富田蘭水

老いてなおレジャーの波に乗ってみる
シルバーのマーク不用の自信過剰
苗物に夢いっぱいの水をやる
あす知れぬ身が決断を急がせる
四季めぐる日本の良さに目のみはる

出雲市 佐藤治代

迷っても母の匂いのする港
震度七揺れております夫婦の座
表向き気を遣い合う嫁姑
成績の悪い日疲れどつとでる
競い合う仲間にハツパかけられる

出雲市 森 茂美

町名の消える土地です牛が哭く
一分の黙禱長く短くて
苦勞はなし楽しく聴かす老いの腕
空想を誘うて満ちる月の海
三日間の大家族なり子ら帰る

出雲市 多久和敬子

主婦の座を守り続けて四十年
この頃は隣近所が遠くなり
母の日のお花売り場に並ぶ列
花粉症辛さ忘れて翔んでいる
竹の子に亡父の姿を懐かしむ

出雲市 伊藤玲子

思い出をたたむ折り目をつけながら
蓋少しずらして本音聞いてみる
突然のキスに飴玉うるたえる
くすぐったい猫撫で声にまた嵌まる
髪切つて夏を先取りしてみよう

出雲市 小豆沢歌子

パン捏ねる一緒に躁もウツも捏ね
躓いて迷路の出口わからない
七十路青いところが見つからぬ
五月晴 笑顔が揺れる花筏
約束を信じた燕扉を叩く

出雲市 岡 あきら

タケノコを貰う糠まで添えてある
客の顔見て灰皿がしゃしゃり出る
植えつけた苗今日だけは陽をうらむ
海外へ飛ぶ人達を見て茶漬
堰切つて自分を主張して帰る

出雲市 石倉 芙佐子

出雲市 小白金 房子

鼻高面のつぎは阿多福さんの出番
紫の錦の御旗立ててます

青い青い月夜の晩に出る狸

いなかつべ大将と決めてる内の人

次つぎと弁舌爽やかなる末裔

出雲市 吉岡 きみえ

エネルギーいっぱいもうらう深呼吸

舌の先ころがしているカタカナ語

付け替えた仮面だいぶんくたびれた

鼻毛抜く男に内緒と言えぬ

さらさらと言えば奥歯に絡むもの

出雲市 青山 久子

ブランコが揺れるよ風の子守唄

アンテナを伸ばして青春しています

今巢立つ翼に青葉マークつけ

さらさらと言われ納得してしまふ

青嵐に立つて芯まで青くなる

出雲市 小玉 満江

針穴の向こうにやさしい亡母の顔

お休みと人形に言う淋しさよ

脱線事故毎朝テレビに泣かされる

ブルーメラン何度投げても返らない

桜餅大福 女は餅が好き

神前へ真心吊す注連かざり(五月一日隣保の祭り)
放牧の牛に薫風地の匂い
みやこわすれ逢いたき人の笑みを抱く
一番列車時計代りの音で行く
公園のベンチ塗り替え初夏を待つ

出雲市 園山 多賀子

雑魚のまま齢重ねて群れたがる

内緒話膨らんで来た箸袋

大正の女てふてふ飼い馴らす

したたかな風に挑んで辞書を繰る

逆風が卒寿のファイト逆撫でる

雲南市 毛利 幸

時として裏と表が逆になる

新緑をまるかじりして深呼吸吸

古里の山並みなぜか遠くなる

だいこんと私の美脚いい勝負

六十路坂のパワー不足で途中下車

島根県 伊藤 寿美

古里の空青く澄み母が居る

手のひらの海にわたしを浮かばせる

森と湖魁夷の青を見る画廊

古稀になつても逆らう癖が直らない

友が皆まばゆく見える春の川

島根県 榊原 秀子

筆不精という友からのいい便り
昔の話嫌いという娘憎らしい
友だちの会話をじつと聞いている
きつと会おうと約束だけで未だ会えず
茹で上げた筍いただくありがたさ

島根県 持田 多輝子

運命に夢を重ねて老いてゆく
木の芽和え今日も元気で母米寿
明と暗 漸く迷路抜けられた
アルバムの遺影となった親友笑う
合併で来るべきものが追いつめる

岡山市 井上 柳五郎

万緑に風はみどりの香りする
幸せの重さ曾孫を抱きあげる
平凡に生きて幸せ噛みしめる
副作用呑んだくすりにあるを知り
補聴器の変った声が聞きつらい

倉敷市 井上 富子

ファッション性ちよつと加えて見る野良着
冷や飯の味が滲んだ人生譜
宝石の過去をたぐれば血の匂い
青くさい意見も容れる広い耳
命より利益優先する企業

倉敷市 小野 克枝

まっすぐに歩くと風も裏切らぬ
言い切ったものの心に穴があき
花の香がこぼれたためらう花鉢
計算がびつたり合うた声になり
客として座るふるさと温かい

真庭市 国米 きくゑ

新緑の輝き増した五月晴れ
洗濯機の軽いハミング五月晴れ
事故現場の呻き聞こえる五月闇
五月晴れ森林浴という贅沢
しっかり者たまにB面覗かせる

真庭市 福岡 智恵子

生涯を清濁併せ呑んだ人(酒豪の夫脳梗塞で逝きました)
夫は逝く暴れん坊のままに行く
炎鎮み煩惱消えて遺骨だく
人並に骨壺だいて妻の顔
好きに生き皆羨まし葬の酒

美作市 小林 妻子

不景気な国にスポーツ氾濫す
あちこちがこわれて医者と仲良しに
一緒には死ねぬと妻に言いふくめ
水甕は歳の事など話さない
手提げ籠にひ孫を入れてやってくる

美作市 山本玉恵

意に染まぬ風にほろりと花が散る

六法の抜け道さがすふしあわせ

気がつけば長寿の列の先頭に

B面にリズム狂うたうしろ影

一雫の愛にはなやぐ花の彩

美作市 大石 あすなろ

でこぼこの道を歩いた靴二足

いい言葉冷凍保存しておこう

発想が古いと脳にハッパかけ

それ以後の評価は聞かぬマニフェスト

反論はあるが流れに逆らえず

竹原市 小島蘭幸

折り畳み傘持つ男なんて嫌い

子供の日 母の日 とてもいい順だ

父の日のネクタイばかりあるいくさ

豆ごはん ばあちゃんがいた父がいた

花金は赤ちようちんで飲みますか

竹原市 石原淑子

歩を止めるペンペン草のハートの実

この街の川とお寺と人が好き

雛囀る鳩の好きな木庭にある

お隣が名乗りを上げる核保有

華やかな水着見たくて海に行く

竹原市 正畑半覚

生命とは静かなものよ郁夫展

根は一つ南山の樹郁夫の樹

一枚の絵に全魂を傾ける

満月は郁夫の瞳ではないか

五重塔は平山郁夫だと思ふ

竹原市 時広一路

百葉の長の良薬口に良し

複数の病名友として余生

十時就寝きつちり守る健康法

人の心に素直に入る花の精

雑草の強さ過保護など知らず

竹原市 岩本笑子

ファックスで来る金貸しの無神経

瀬戸の海キラリキラリとみなダイヤ

梅一つ落しウグイスお隣へ

海また海 沖繩の青さは

三泊四日雨でも楽し空の旅

宇部市 平田実男

お袋の味を知らない少女A

転んでも只では起きぬ族議員

前向きになると出て来る力コブ

まだエッチ若さの秘訣かも知れぬ

振り過ぎる尻尾野犬に見下げられ

美祿市 安平次 弘道

雨季乾季やはりパズルは埋まらない
ぼろぼろの地図にも夢がありました

凡人にしては大きなことを言い
陳謝しても所詮眠りは浅かった

無精卵今年もやはり夢だった

唐津市 井上 勝 視

介護ごっこ喧嘩しながら丸く棲み
無言劇半日もたぬ老い夫婦

苔むした古木の桜気負いなし
見よがしの気はさらになし山桜

ゆとりない世にせめてもの初夏を助け

唐津市 宗 水 笑

ハイテクの世に罰則は草むしり
次々の謝罪にトップ慣れてくる

ばらばらの党内郵政民営化
ジーンズの穴に若さの自己顕示

理解度は子供ニュースでちょうど良い

唐津市 樋 口 輝 夫

始まるととどまり知らぬ孫自慢
さりげない顔して医者ガンを言う

見てくれと言わんばかりの胸の谷
一票が足りず今日からただの人

ばらばらの拍手の中に義理もある

立板に水の美人でまだ独身ひとり

唐津市 久保 正 剣

味噌汁を朝のメニユーから外す
延長戦スタミナ切れのフォアボール

子宝に御利益ありそなご神体
生きているうちは見せたくない写真

唐津市 山口 高 明

鉛筆を削る物だよ肥後守
パチカンへ世界平和の列つづく

身障の息子生き生きバスケット
僕のママ南瓜に目鼻つけたよう

箆碁でも打つ手パチリと決めて居る

唐津市 市 丸 晴 翠

若い芽を過密ダイヤの斧が断つ
争点は不明で終る子の喧嘩

子等巣立ち大きな鍋が隠居する
良妻に自信 賢母はクエスチョン

同じ干支性格は別クラス会

唐津市 坂 本 蜂 朗

仕様のない子です聞いてと高い鼻
孫自慢やめた訳皆知りたがる

説教とセットの酒が胃にもたれ
薄い胸の妻に圧倒されている

筍が畳押し上げ児ははしゃぎ

熊本市 永田俊子

北斗の杓泣いて恩師をお掬いし
柳界を泣かせて詩聖逝き給う
遠くからただお悔みの手を合わせ
ふだん着でふだんの暮らしにある平和
涙の修行やっとお客を笑わせる

熊本市 岩切康子

霧囲気で留守と見たのは不覚なり
穀雨なか根ごと分けやるシャガの花
夫待たせ早足になるお買物
好きな色知った売り娘に勧められ
診察を梯子し悩み持ち込まれる

熊本市 高野宵草

居直れば意外人生面白い
お馴染みの軒私の子守唄
畏友逝く回顧に寂寥のみ置いて
よく笑いたくてキレイに歯をみがく
楚々と咲く野花が好きなきも居る

東かがわ市 清川玲子

きのうまで居た犬小屋に立ち尽くす
巢立っても毎日電話来る絆
憧れの先生が居た廃校舎
手鏡に教授の席を棒に振り
安全と思う電車の大惨事

東かがわ市 池内かおり

大人でも返事するのはあたりまえ
型くずれ隠すベストを編んでいる
せめてもの情けと許す夫のウソ
告げ口は塩も砂糖もたつぷりと
人混みをするるり小さいおばあさん

東かがわ市 成重放任

プロ野球仕事しながらガムを噛み
料理法メールで母の助け船
草を焼く煙が僕を追っかける
若葉寒 丹前ほしい旅の宿
一芸が思わぬ人気一人占め

東かがわ市 神保坊太郎

老春を楽しむむ毀れないように
誰にでも判る涙は流さない
正論にお若いですなとなぶられる
あの角を曲るといつも化かされる
連休に予約さされる孫の守り

東かがわ市 伊勢八重子

胸の襲かすかに煽るすき間風
雑踏を避けて若葉の風に酔う
母の胸泣きたい時の守り神
大風の如連休の子等帰る
桜鯛浜は一気に弾み出す

東かがわ市 原 賢

立ち枯れの草木の愚痴を聞いてやる
砂浜は小さな夢が落ちている

早起きで煙草一本多く吸う

気晴らしに少し斜めに佇って見る

したたかに生きる雑草の気をもらう

東かがわ市 川 崎 ひかり

こちよく泳ぐ夫の手の平で

敢えて言う自分が納得するために

見守ってくれてるような丸い月

茶をすするだけの恋ならまだ出来る

良い便り来るようポスト磨いてる

高知市 小 川 てるみ

うす桃の花に抱かれた桃の里

大義名分立てて男が飲みに行く

溜息をついて独りのレモンティー

ひと昔のもったいないを処分する

利益優先が招いた列車事故

高知県 赤 川 菊 野

もう一度逢う約束があつたのに

世の移りじつと見下ろす鬼瓦

翔びすぎて着地の事は考えず

肩書きをとるとこんなに軽いくつ

無骨でもすじの通つた人が好き

松山市 高 橋 宏 臣

お友達ごっこ疲れを持ち帰る

弱いとこ見せ合つてから仲が良い

弱気だね後ろばかりを振り返る

一言を呑み込み悟り顔でいる

縄抜けをした日の過去は喋らない

松山市 宮 尾 みのり

ライブドアから脱線と目まぐるし

不条理を刻み老女になりました

弾んでた雑魚へ突然汐が引く

血統書猫も首紐つけられる

お人柄ジョークへ棘は抜いてある

松山市 丹 下 美津子

ハネムーンGパンで行くヨーロッパ

もういいかい弾む胎児がノックする

お茶だけですまぬ仲間と見抜く妻

雰囲気を押されうなずく羽目になる

一泊の母が見抜いた透き間風

松山市 古 手 川 光

久しぶり鬱金に会いに通り返け

カウントダウン今進んでる大地震

もどかしかった亡父の動作が今の僕

薬より医者のお優しい効いてくる

辛い時もっと苦しい人思う

大洲市 中 居 善 信

あれ何で茶碗がぼとり落ちちゃった
何処行つた易しい文字が出てこない
鎌の柄のようなんこが出てこない

かと言つて銭計算はまだ出来る
尺二重大きな墓を建てちゃつた

西予市 黒 田 茂 代

追憶も夢もふうわり風の中
寂しいな今日もポストの音がせぬ

駆使するにはまだ末消化のカタカナ語
疑つてかかると何も食べられぬ

あれは神の造形だろ星の砂

砂川市 大 橋 政 良

ゴミ戦争使い捨てから抜けられぬ
年金の目減りが痛い釜洗う

ネオンです光に迷わないように
切り株が一つ平凡だった父

ゴム紐の伸びた形で喜寿となる

日高市 根 岸 方 子

蓮の花恩師の句から匂いくる
カラオケに悲しみ捨てる雨の午後

木もれ日が邪心を払う散歩道

石橋を叩き前進まなならず
三宮あの出合いから今日があり

弘前市 櫻 庭 順 風

本物を欲しい欲しいと下駄スキ
特訓に気合を入れる茹で卵
優勝を学校挙げて出迎える

その日からスキー人生始まりぬ
幻の五輪選手になるなんて

弘前市 今 愁 女

豪雪に耐えて花咲く春に酔う
名づけ親恨んでいます犬ふぐり

可憐さを地に群がりていぬふぐり
春謳歌土筆たんぼば競い合う

菜の花も蝶のキッスを待っている

弘前市 高 瀬 霜 石

土砂降りが似合う青春交差点
目に見えぬお宝持っている老舗

実印をゆつくり押しした曲がり角
日々平安政治家に金花に水

あの路地を曲がればサザエさんがいる

弘前市 福 士 慕 情

外出の妻鼻歌で化粧する
いい話蹴つて娘は家をでる

カルチャーへうきうき赤いシャツを着て
ゴクラクと妻の呪文を聴く出湯

気紛れな風とワルツを舞う枯葉

弘前市 須郷井蛙

愛犬を残して逝けぬから必死

一日に二つの会議くたげれる

婦人部の会議で拾ういい話

年金じゃ足りず小さなアルバイト

反日の古い時計が動き出す

弘前市 相馬銀波

発想のテンポで柘目埋めるベン

中心花だけのりんごに労の日々

ねむりたいテンポで遅い子守唄

花束は墓前に親の七回忌

自己主張重ね訥弁すてられる

弘前市 宮崎ヒサ子

春なのに今日も冷たい雨になる

長びく風邪しびれ切らして街に出る

ぱったり友と春の話題が暖かい

手を抜くと俎上の魚睨みます

童話読む今の心で読んでみる

弘前市 岡本花匠

昭和史と生きたプランコ揺れ炎える

連休に身蟲屑ざくら咲き誇る

茶を淹れて踏んばるいのち余裕持ち

掃宅して待つひとがいる温かさ

哭く鴉笑うカラスに身構える

十和田市 阿部進

喜寿なれど心の中は十八歳

万博のロボット子等に夢与え

普段着の温泉探し北の旅

善の道歩んで背中子に見せる

福寿草咲いて心が弾みます

青森県 小寺花峯

もりもりと春を食べてる深呼吸

飲み会を優先しての予定表

ノルマなどないが毎日汗をかき

雨の日もハウスの大根白く待つ

退治する酒もあります二日酔い

さいたま市 八田敏

筍を食べ過ぎ老いにもきび出す

君子蘭晩春惜しみ咲き誇る

ペランダはしゃがむ隙なし花作り

種を播き新芽を挿して絶えぬ夢

うとうとと電車の怖さもう忘れ

佐倉市 岡井やすお

暑い暑い言うても日本知れたもの

海の日はプールをやめて海に出る

謝れば却ってかさにかかる国

反対と言ってる国へ何言いに

メイドインジャパン選つてる愛国者

八王子市 播本 充子

解る喜びパソコンにのめり込む
気紛れに人なつっこいハーモニカ
孫たちに愛されてます子供の日
将来が楽しみ負けっぷりがいい
妻の留守一週間が速すぎる

武蔵野市 亀井 円女

誰だつてみんなコロリと逝きたいの
亡夫と居る絆は永久に切れぬまま
ひる鏡いとしい皺にラブコール
何たつてイチロー松井は鑑です
平和を好みいつも流れの外に居る

東京都 岸野 あやめ

洗うのに手間のかからぬほどの墓
諭吉様ヒョイと出現衣替え
弱い順爺さんばあさんそしてパパ
整理術着ないものなど捨てなさい
ボクのこと見捨てないでと服が泣く

東京都 清原 悦子

一つずつ積み木を積んで黄昏れる
よく歩き元気のツボが刺激され
母さんが笑うと食がよく進む
正論を弱者秘かに隠し持つ
風邪ひとつ引かず峠を越えている

東京都 小川 賀世子

深い傷発酵してたこの笑顔
丹念に丹念に千羽目も折る
バーゲンに朝から家事がよく運ぶ
暖簾の味守り抜く店その気迫
恩返せないままでした通夜の月

横浜市 菊地 政勝

正直に生きて近道選ばない
生涯の道連れというあの出合い
辛酸をなめて自信が湧いてくる
二の足を踏んで好機を遠くする
日の丸を燃やす大国の小心者

横浜市 小野 句多留

GWはのつべらぼうの不精髭
ゴミ出しの曜日間違うほどの暇
毎年で変りようないクラス会
地球博人を持たすにほどがある
運勢欄頼るつかない日の鏡

富山県 島 ひかる

無事下山して温泉の有り難さ
火の国に住み温泉を好きになる
温泉と地酒やさしい風に会う
クアハウス嫁の水着とよくはしゃぐ
ゆとり教育根太がだんだん腐りだす

静岡県 菌田 猥杏

大津市 中 宗明

ガラ空きになる診療所農繁期
爺ちゃんも茶農繁期一人前
厄介な飛び地合併火が残る
九条を今見直しているところ
天下り先の設備をまた造る

静岡市 安本 晃授

京都市 都倉 求芽

辻棲を合わせてからの失語症
決断の二の矢天から降ってくる
掌に宿るもののひとつあり詩書の彩
無職でも一人前に腹がへり
未来図の終章飾る靴選ぶ

可児市 板山 まみ子

亀岡市 井上 森生

名所より山にひっそり咲く桜
万博で並ぶ忍耐教えられ
配給の時以来です並ぶこと
シナリオは見るだけのはず陶器市
歩くこと好きになったら老いの域

愛知県 早川 盛夫

いい笑顔きつと倅せなんだろう
充分でないが年金貰ってる
旅人の喉うるおして尽きぬ水
賑やかなのが一人いて旅たのし
回り道しても食べたい蕎麦があり

現ナマにこだわり過ぎて嫌われる
優先の席で寝たふり失礼だ
喜寿近く各所オンボロ無理たたる
品悪いギャグの連発興醒めだ
人生をのんびりし過ぎ悔む日々
少子化に日本の歩幅乱される
改憲の炎全国の消化器を
ニンベンに替えると仏になる私
平日でも日曜でもない毎日
筍へわが家の木の芽機嫌よい
重大事故も経済大国の落し穴
機械ではないぞ効率は気にしない
我が悪しき習慣病が顔を出す
意をこめて歩くと足からルンルンに
自分史のこれから先を楽しみに

川柳塔のぞみ
8月旬会

日時 8月23日(火) 13時から
場所 人形町区民館(地下鉄人形町A1出口5分)
宿題 「寝言」「コイン」「いまいち」各題2句
「自由吟」1句 欠席投句8月20日必着
〒193 0832 八王子市散田町2-31-3 播本充子宛

川柳塔の

川柳讃歌 ⑦

木津川

計

僕の講演を聴いてくださる方の中に、気になる人がいます。上の空でほんやりしている人と次の句のような人物です。

深入りはすまい斜めに向かい合う

安土理恵

お前はなんぼのもんじゃない、と斜に構えておいでです。理恵さんのめり込んだら大変とガードを固めたのです。そうさせる人が確かにいます。身を乗り出して聴きたく、わくわくして向い合える、そんな方ばかりだったら地上はどんなに楽しいことでしょう。ですが、慎重に構える人がいるのです。

石橋を叩き時流に放つとかれ

神保坊太郎

うーん。「かくれんぼ上手にかくれはほっとかれ」（かずを）の児童とは大違いです。石橋まで叩くことはないのに、「転ばぬ先の杖」

「濡れぬ先の傘」「念には念を入れ」などとことわざでも申してきました。ですが孔子は「過ぎたるは及ばざるが如し」とたしなめてもいたのです。ときには人生、大江健三郎の「見る前に跳べ」の精神で先頭を切る勇気も必要なのですが。

先頭を代つてくれる人がない

播本充子

つらいですね。覇者が倒されるために君臨するように、先頭は抜かれるために走るのです。充子さんの場合は、あるいは最年長の先頭かも知れません。桂米朝さんも古稀の前年から言ったはりました。「どこへ行つても最年長になってまいりました」。代つてくれる人のいよいよ少ない傘寿に米朝さんはなり、電話で話しても弱気になられました。ここは充子さん、みんなわたしの年下と思ひ、遠慮せずに過してください。

深呼吸くらいはしたら妻がいう

中居善信

「そう、音楽も『休止符』が大切なんです。その『休止符』の間のとり方が、次のフレーズがフレッシュに聴こえる決め手となる

んですね」、作曲家・富田勲さんの言葉です。善信さん、深呼吸です。深呼吸でリフレッシュを図るのです。あんまり忙しいのも、逆に何にもしなさ過ぎるのも体によくはありません。

ガンバレというから手術こわくなる

小野句多留

日本人のガンバリズムでした。入試会場に向う息子にも「がんばれ、がんばれ」と励まします。がアメリカ人は「*Don't worry*」（気楽にやってこい）と肩の力を抜かせます。「みんなやる手術や。どうちゅうことないで」ぐらいでちょうどいいのです。

凍として未練断ち切る落ち椿

山岡富美子

さりながら、だれもが死に怯えます。あの椿のように、不意にポトリと未練もなく逝けたら……。昔、行った足摺岬は一面の落ち椿でした。「王宮の氈を踏むより身の派手にわが思はるる落椿かな」（皷子）。虎が死して皮を残すように、椿も王宮の氈より豪華な絨毯を残します。富美子さんも語り継がれる佳句を一杯残して下さいよう。

（立命館大学教授・「土方芸能」誌代表）

自選集

河内天笑

丑三つ刻にまとめて笑う仁王さん

風船が浮いてる様な赤い月

満月はちつとも歳をとりません

几帳面な人からユーモアが零れ

日に三度背伸びちぢこまんように

胸の奥 葛藤続く善と悪

さりげない仕草に温い父を知る

坪庭の花が知らせる季の移り

法話聞き心洗われ通夜の席

お別れへ人徳しのぶ涙雨

絡ませた小指が疼く日のざんげ

立ちくらみ不吉な予感背を走る

夏草に思いを焦がす夏蛩

背を映す鏡はいつも持ち歩く

度忘れが毎日老いたなと思う

川島 諷云児

河井庸佑

木村 あきら

蝶さえも訪ねてくれぬ水中花

反骨の弓はとつても折れ易い

竹槍の国へ原爆降ってくる

誘蛾灯淋しがり屋が寄ってくる

節水の宣伝カーのゆく暑さ

病室で花見も洒落たものですね

外泊の許しを頼む春の宵

美しく咲いて病窓開けさせる

寝入りばな覗きこんでる見舞客

サイレンの音で病院起される

黒川 紫香

小西 雄々

こっそりと画布から抜けてきた蛩

飲みたらぬ式から帰りワンカップ

点線の先は想像せよという

レクイエム男の嗚咽もれてくる

見栄はった結婚式ですぐ別れ

小林 由多香

不機嫌な父へ御飯がまずくなる
急ぐことないのに速度違反した
猿知恵も壺の中から手が抜けぬ
白い堀べたべた描いてみたくなる
中二階うるさい人がいる政治

斉藤 焔

ありがとこのことばが素直子の寝顔
師の意志をしつかり継いでいる接ぎ木
花言葉添えて蓄の置き土産
もう少し咲かせておこう花鋏
さくら餅話上手が来てくれる

田中正坊

春落葉 師たり友たり二十年(薫風さんを悼む)
くんぼうの呼名 浄土の風に消え
檸檬 薔薇 漢字で書けば匂い立つ
花筏 末は行きつくところまで
何時からか涸れた社会の保水力

玉置 重人

高速に乗ってちよこちよこ来る娘
竹の子も曾孫も伸びる春の雨
ど忘れを自慢のように言う喜劇
火傷した株をすすめにくる電話
ロボットがせかせか歩くターミナル

恒松 町紅

自販機が人を待つてる無人駅
少子化の空気が包む屋根瓦
惚けたより始末が悪い職場ミス
足元はまだ惚けてない口達者
遊ぶ声しばらく聞かぬガラス窓

遠山 可住

まだ上がある八十の坂の夢
山開きこだま一挙に若返り
良心があつて百円供えとく
宝くじもつたないと言妻が言う
一枝に母の祈りがある奇蹟

土橋 螢

牡丹ぼたんの花といのちの根くらべ
人間を包む浴衣の紺がすり
悪人になり友だちに恩を着せ
父はいま母と息子の板はさみ
正解は北の方角から攻める

仁部 四郎

てにをはを暗誦してる第三者
てにをはのきまり議会にないらしい
銀座日からてにをははマイペース
定年の日からてにをははむずかしい
野の花の声にてにをはを教えられ

波多野 五楽庵

合掌の指から洩れる躁と鬱
夢売りに来たのか雨が止まらない
窓際の椅子で予感を待っている
屈辱をぐっと飲みこむかたつむり
寂然とせぬが辞表を書いている

藤村 女

胸にまたたいたんで母の丸い顔
如才なく生きて世間の灯になごむ
倅せな夢の続きを見て眠る
母の味たつぷり見せて茄子の彩
無愛想に開き閉まった自動ドア

芳地 狸村

台湾の夢がつまった旅鞆(台湾五句)
軽食の店が並んだコンコース
どの道もバイクでうまる朝の街
日本の顔を見せてるパチンコ屋
そこのけのバイクに負ける夜市客

宮口 笛生

ゴールデンウィーク旅を考える
八人乗り八人乗って温泉へ
渋滞を承知連休遠出する
のむだけの楽しみ朝昼晩の酒
酒ビールジュース老人会のバス

森下 愛論

挑発へさらりとホタルの話する
青テントさくらが上に散ってチョン
修羅重ね罪の重さを悔いのか
自分史のペンの先から呆けを見る
バラ百本売れて花屋は店仕舞い

八木 千代

山桜散らせて天は人を召す
鬘のごと風の字の切っ先よ
ずっとやりとりしていた穏やかな手紙
生前の口調で枯野より電話
死なぬ限りはめぐる四月の橘忌

八十田 洞庵

伽羅の香が品よく匂う歌舞伎席
ピカピカの背広仏間の灯も揺れる
ハミングでさわやかにする割烹着
丘に出た壺は古代のたつき知る
桃の花風も口づけして通る

両川 洋々

ニセ札で神までだますから恐い
相棒へまさかの試し斬りにあう
出口なき怒りを今日も抱くイラク
長生きをしたけりや余罪みんな吐け
脱都会風が仮面を脱げと言う

自己過信まだまだやる気のスニーカー
出しゃばって結局自由まで縛る
甘えかも知れぬが老いの夢を持ち
歳だから空気を読んで引きさがる
嘲笑の中で教わる事もある

阿 萬 萬 的
石 川 侃 流 洞

食うて寝るだけの生活へ爪が伸び
峰打ちの情けへ味方反旗振る
ベンチの首伸び切っているホームラン
高温処理の骨からDNA出た裏目
鑑定団へ偽者やらせではないか

板 尾 岳 人

有情とや男同志で許されよ
愛すべし檸檬絞ってティータム
肉眼や見つめるひとやいまいずこ
愛染よ男と女愛すべし
真面目に生きて陶冶の詩を思う

奥 田 み つ 子

ありがとう最後のお声耳の底
紫明の絵「彼岸」を飾り師を葬送る
むらさきの雲に師の影 ありがとう
媚び売らぬ生き方もあり風さやか
焼き直す自分 轆轤か手捻りか

第23回 夜市川柳大会

と き 7月31日(日) 10時開場
と ころ 堺総合福祉会館 5F
事前投句 7月20日締切

題と選者

「毒」	河内 天笑	選
「残る」	古久保和子	選
「星」	竹内ゆみこ	選
「相談」	両川 無限	選
「恋」	志田 千代	選
「挑む」	新家 完司	選
「美人」	加島 由一	選
「幕」	河内 月子	選
「喉」	井上 一筒	選
「散る」	前田 咲二	選

席題なし、各題2句、出句締切12時
軽食呈、賞品多数、会費2,000円
欠席投句拝辞、入選句発表2時～4時半
ベストテング招待の宴5時～7時

第13回 和歌山県川柳大会

と き 9月11日(日) 11時開場 1時開会
と ころ 和歌山JA会館 (JR和歌山駅前)
参加費 1,500円 (軽食・発表誌呈)
事前投句 「ストレス」 田中 みね 選
事前投句のみ欠席投句可

投句料 1,000円(発表誌、送料)所定用紙に2句
必要事項記入、定額小為替、切手不可
8月15日締切(必着)

兼 題 「舞 台」 榎原 公子 選
(締切12時半) 「飾 る」 那須ひさし 選
(各題2句) 「それでも」 寺田 裕美 選
「窓」 問屋啓二郎 選
「友」 寺下 敏雄 選

当日参加費 事前投句あり 500円
事前投句なし 1500円

懇親宴 3,500円 当日受付にてお渡し下さい
投句先・問合せ 〒640-8111 和歌山市新通
7-17 古久保和子 宛
TEL・FAX 073-423-8930

主 催 和歌山県川柳協会

水煙抄

奥田みづ子選

合格の窓清明の花明り

池田市 北出 北朗

人知れず穀雨の情け土に沁み

夏立つて草もここぞと自己主張

日々つつがなく小満の胡瓜もみ

芒種過ぎビールに化ける麦を刈る

ミニの後三步遅れて夏至を行く

犬山市 金子 美千代

タイトルに惹かれて買った本の嘘

幸せを運んでくれた子の帰省

私をみどりに染めて誕生日

脱皮する決意を試す春嵐

意気込みをまたカワセミが嗤ってる

出来合いへわが家の味をちよつと足し

佐渡市 高野 不二

何かあるたんびに風邪をひいてます

介護保険上げます税も上ります

酒よりも高い漢方呑んでます

天災人災住みにくい世になって来た

馳走より低カロリーにある人気

喋りつかれて慰労会から帰り

大阪市 升成 好

塩味に甘さを足して人間味

ひとつ捨てふたつ拾って磨く自我

ちっぽけなプライドだけど捨てられず

分の悪い話はみんな四捨五入

生き方へ比較はすまい自然体

争わぬこと身上に母白寿

河内長野市 木太久 正一

朝食がおいしい今日のスケジュール

休むのにうしろめたさの戦士かな

申し分ない天気眺めてままならぬ

読み残し多くなりさし月刊誌

早朝の散歩で見える町の顔

東京都 やまぐち 珠美

ひこばえにその名見つける獅子のころ(薫風先生ご逝去)

引き潮の慈母の深みへ還り行く

生真面目な名刺が辿る喜怒と哀

暁の素肌に夢は背を撫でる

もみくちやの人民元に華美の森

岐阜市 平野 あずま

青い鳥飛んで来そうな愛鳥日

別姓の夫婦も着てるペアルック

まだともう脳と体の曲り角

音楽堂の落ちる雨垂れ四分音符

一日は短く二十四時長し

大阪市 三浦 千津子

歩け歩け森のオゾンを欲しいまま

風みどり柵さらり躲さんか

筆跡の弾む便りに頬ゆるむ

ゆっくりとこなして行こう余生の譜

がむしゃらに缶を蹴ってる無為無策

高知県 桑名 孝雄

二礼二拍手あと一札で効いてくる

汗顔の至りハハハで済むネアカ

おい飲みに行こうと亡友に誘われる

道草をした分友はワンサ居る

剪定の枝にもあつた運不運

札幌市 三浦 強一

人間と神の予定が噛み合わず

自己過信 椿ぼとりと落ちる音

満員の待合室は風邪の貌

ポケットの隅の記憶が出て来ない

バックカスの魔法で本音吐かされる

泉野市 備後 三代子

一代記聞かされている孫の彼

母の日にだあれもない広い部屋

褒められてすぐにその気の粗忽者

媪らの四方山ばなし花ざかり

予報ピタリ雨音のする寄り合い日

神戸市 両川 無限

負けて勝つ甘い決断かも知れぬ

まっしぐらだけでは迷路抜け出せぬ

企みを見抜かれて雨の午後

同じ人なのに仮面にだまされる

灰汁みんな抜くと魂まで抜ける

大阪市 池上 清治

巨星墜つ師の短冊を読み返す

ときどきは明るさ欲しいトツプ記事

文化祭 孫の元気を吸いに行く

大鯛を貰い二人で持て余し

浜育ち いわしがあればそれでよい

堺市 羽田野 洋介

仰ぐ師の影遠ざかり風薫る(薫風師を悼む 2句)

人柄に惹かれこの道はまり込む

ひらがなでしゃべるすがたのやわらかさ

孫の癖思わずわが身振り返る

三代でペットを囲む輪が温い

今治市 塩路 よしみ

そのあとが聞きたくお茶を入れかえる

朝露を散らすに惜しい花鉢

まあまあと水に流せと言う外野

色褪せて花が無口になつてくる

生きてゐるたつぷりもらう陽の恵み

堺市 奥 時雄

赤ちゃんはあくびをしても喜ばれ

聞いているふりのあくびが目に入る

繰り返しあくびをしてもまだ喋り

説明に上司平気であくびする

病人に覚られぬようあくびする

神戸市 山田 婦美子

嬉しい事あるから赤い服を着る

ちよつとだけ飲んだワインが本音吐き

人の疵見るのは片目だけにする

三猿がときどき辛味をふりかける

損得もなく澄んだ瞳の三歳児

和歌山県 村中悦男

朝とりのなすは絵心誘い出す

いい話変らぬうちに握手する

鍬持てばやはり昔のこつが生き

農に生き野菜と対話する日毎

草をひく野菜の精にはげまされ

日立市 加藤 権悟

生まじめな仁王にジョーク届かない

望郷の千鳥さくらはいま盛り

朽ちかけた伽藍にさつき咲き乱れ

水の音母の日変りない厨

よれよれになつて帰つて来た噂

長岡京市 山田 葉子

芽ぶくまでの一途な思い身にまとう

萌えるのを待つてた鳥のコンサート

糸電話ほどの絆にすぎる日も

子供なのに遊びの予約いらない

準備なしで走り出したらとまらない

羽曳野市 森 下一知

ふる里の空を飛び出す竹トンボ

合併の村にまたがる虹の橋

義母実母梯子で看取る老介護

働いて退屈しのご遊び下手

路地住まいプライバシーは有つて無し

大洲市 花岡順子

敵しかった母が優しい顔になる
長生きはしたくないけど生きている
フアイトフアイト脳細胞に言ったとて
握り拳で何度も死んだ腹の虫
紐ほどく事なら母に任せてる

和歌山市 柏原夕胡

思慕ひとつ抱いて乾いてゆくところ
丹念に洗う無心になりたくて
透明なガラスに嘘を許される
愛しくて憎くてこころ吹き荒れる
許せないのは嫉妬わたしを切りきざむ

泉佐野市 稲葉洋

悪夢なら覚めよ輪禍に声もなし
逆縁の親の嘆きを何度見る
四面楚歌 昭和につけた傷の痕
敗地から再起のジャパンだからこそ
若者の会話に入れ歯うずきだす

尼崎市 河津正治

酔うほどに話の裏が見えてくる
清濁の話も添えて子を送り
抱くと言うコミュニケーションだつてある
想い秘めステンドグラスの七光り
現し世を今日も懺悔の遍路笠

堺市 大久保伸子

ライバルが弱い所をつきたがる
動くこと出来る喜びかみしめる
血脈のあわれ深さを思う日よ
殺戮の絶えぬ地球の隅に生き
花散るを一期一会と掌にうける

広島市 馬場利子

背伸びするたびにぼつりと夢一つ
野良仕事すると落着く老いふたり
雨の詩ひとり占めして花の傘
老いなりに心の鍵は持って生き
自画像を空に描いて風を選ぶ

八尾市 松葉君江

躓いて学ぶ心に火をつける
先輩の生き方視野の真ん中に
筋通す父の背中を教科書に
寒い世に心温もる絵を探す
姑の世話どうせやるならにこにこ

奈良市 乾春雄

散る花を笑う造花のうす汚れ
待っていた手紙わくわく封を切る
登校拒否の子が遊んでる鳩の群れ
反芻をしたくなるよな今の幸
こんなにも夢中だったか古日記

東京都 井上 つよし

聞く耳を持って鬼から猫になり
釘一本打って迷いが吹っ切れる
車内メーク矯めつ眇めつ化けている
バイキング肥満家族の食べつぶり
キャンバスに緑と紅の風の色

東京都 長谷川 康子

ご近所と仲良くしたいお裾分け
ほんのりと酔ってこの世がバラ色に
今日も勝つきつと勝つぞと向かう駅
老け具合比べている同期会
こわいもの見たさが集う事故現場

昭島市 野口 忠

青蛙 紫陽花の葉に恋をする
恥をかき一皮むけて風がふく
生き様を見せたい子等はそっぽ向く
陽と汗と涙と土に球児映え
舞台では涙見せずに肩で泣く

尾張旭市 三浦 きぬ

愛猫と連鎖反応大欠伸
万博で世界一周することに
古里は私の胸の奥に生き
巻き戻し昭和を歩き直せたら
手なずけた猫は私を裏切らず

京都市 清水 英旺

いつまでもちびた鉛筆捨てられず
春を盛るごとく釘煮の鉢一つ
腕組みを解いていざDOMYBEST
感動を呼び覚ますべく五感研ぐ
目を宙にエレベーターは皆寡黙

京都市 榎本 宏子

言うほどに言葉に酔って出る涙
毎日がこれでいいのか米を研ぐ
楚々として言葉少なく謎のひと
やさしさは点数にないお医者さん
墓前では誓いは立てぬ事にする

大阪市 中井 萌

なに想う風のない日のこいのぼり
週刊誌ひとの不幸がよく売れる
気取っても孫の喋りでみんなバレ
四世代つむじの曲がり方も似る
我が事のように子の恋応援す

大阪市 尾崎 黄紅

孫の八人余生にも余白なし
ああ言えばこう言う仲で統いてる
ネクタイも背広も遠くなりにつけり
箸持って祈り箸置いて祈り
斬られ役今日は忙しい五度も死に

大阪市 吉田 富美

堺市 萩野 像山

ふるさとの水で冷やしたトコロテン

一筋の滝一筋の風生る

樹々のかげその下にある車椅子

志曲げずに雨の花菖蒲

言うまじきこと胸に秘め髪洗う

池田市 多田 契子

吹田市 二宮 栄子

事件事故 国崩壊の音がする

行列をファッションとする若い子等

のんびりとしてると用を思い出す

ODA取られっぱなし弱い国

風邪引いて万病とやら想定し

池田市 上嶋 幸雀

スギヒノキにも言い分がある花粉症

木石も春の匂いをかぎつける

万歩計五月の空に励まされ

これ以上何を望もう五月晴れ

五月病開き直れと青嵐

柏原市 伴 洋子

すみれタンポポ咲き競ってる春堤

薫風を腹いっぱいに鯉のぼり

目が合って出かけた欠伸かみころす

プライドと見栄に縛られ動けない

コンビニ弁当たまたまに手抜きをしたい夜

定年をやつと迎えてほつとする

負けて勝つ強い男になりきれぬ

比べることも出来ず生涯妻一人

前世が天敵だったような妻

亡き父の表札掛けたままの門

吹田市 二宮 栄子

鈍行に乗りかえました古稀の坂

一日の感謝夕日に手を合わす

一人寝の窓にやさしい月明かり

九州訛りにすつかりそまり児の電話

これからも主役演じて一人住む

高槻市 佐甲 昭二

父というへそが支えた家族の輪

嘘ひとつついて心に残る疵

難題へ挑む勇気を試される

足踏みをしているだけで策がない

窓際にすわり人間取り戻す

羽曳野市 福田 悦子

一人居の私を守る蚊帳をつり

完歩した十キロ足にある誇り

リサイクル桐のタンスに亡母がいる

土用干し梅も着物も風当てる

流行と聞いてパラソル黒を買い

東大阪市 米田水昇

通り抜け短冊妻のことばかり

花あかり みんな美人で桜人

五 六歳若く化けても十は無理

五月晴 入れた布団にまきこまれ

人を待つ 今宵情ある赤い月

枚方市 二宮紫風

雨上がり寝起きに新緑眩しすぎ

ブレゼント届く幸せ母日和

鯉のぼり元気に泳ぎ孫達者

大笑いできる夫婦に友多し

母の日に送れる幸せかみしめる

藤井寺市 俣野登志子

昼下がり新聞の文字点になる

ときどきは自分で自分誉めてやる

咳一つ新米ママはうるたえる

講演会盲点に居て船を漕ぐ

マンネリに喧嘩売ったり売られたり

藤井寺市 増井ヨシ枝

丸三年もう泣くなよと亡夫の声

死ぬるまで心の奥にある秘密

つつじの香亡母を偲んで散歩道

玄関で靴揃えてる孫の声

大惨事テレビの前で手を合わす

藤井寺市 伊藤アヤ子

連休も関係のない古い夫婦

列車事故他人事とは思えない

母の日に贈る姑さんもう居ない

子供の日の柱の傷にある歴史

幸せは自然の風の中にある

箕面市 寺井柳童

黄金の回しに自信 心技体

甲子園さすがにでかい人を呑み

公園に鳩と向き合いひとり言

父に似ず母にも似ないいい男

退院を家族そろって待つ笑顔

八尾市 脇俊子

記念切手煩惱だけが去る月日

一杯のドラマを抱いて古稀来る

近道をして人の心の塵に遭う

やさしさの琴線にふれ座り込む

不況風よろめいているトップの座

八尾市 赤木妙子

桜待つさくらが連れてくる人も

日だまりを見つけてははずむ毬になる

にこやかに薬一本の救世主

五階には五階の朝日のつと出る

湿っぽい話はよして新茶汲む

八尾市 笹倉ひろし

パソコンの画面食み出す孫の顔
パステルで描いたような中之島
おばさんの内緒話が暴れだす
点数を見せあい帰るランドセル
強硬論ぶって民の目外に向け

八尾市 西川義明

居ながらテレビで名所花巡り
真ん中で正論吐いている拳
絶世の美女にうっとり乗り過ごす
酒二合葉でいまだ医者いらず
逃げ足がやたらと早い泡銭

大阪府 神野千恵子

綿帽子どこか寂しい華やかさ
動きたい時に手足はそっぽ向く
バラも好きタンポポも好き花が好き
鍵穴に合わない鍵をたと持ち
自然体空気ゆつたり流れ行く

神戸市 田中章子

切り替えが上手笑って生きている
失敗に学ぶまだまだ生きそうだ
才能の芽生え引き出すのは自分
透明の空気汚れている怖さ
側面を突かれもろさを露呈する

神戸市 木村忠義

性格は亀と兎という夫婦
物干しの夫婦は風に戯れて
心にも部屋にも花を絶やすまい
時々は遺影の顔を拭いてあげ
ブレイキの利かない人と飲まぬ主義

相生市 村木信子

聞香のしじまへ座る茶三昧
薫風へドレミをハモる鯉のぼり
糸吐いて吐いてまあるく繭の自負
終焉へじつくりと脱ぐ炎の鎧
美辞麗句本音ラップをしたまんま

伊丹市 延寿庵野鶴

次の策練って構える仁王像
花花花 花にころろが溶けて行く
友情を味方に生きる絆の輪
散る覚悟秘めてポピーは凜と咲く
よい友の器に学ぶ処世術

三田市 堀正和

トーストに紅茶 みそ汁さようなら
グルメだなウール選んで虫がつく
五ツ玉 老舗の暖簾守り抜く
時々は謀反を起こす影法師
ほんとうの自分に戻る廻路明け

三田市 石原 歳子

奈良市 矢野 良一

小包を開けるとときめき子に勝る
評判の葱を育てた太い指

新緑の野でいっぱいの風を吸う

諦めていた旅だけに心炎え

人間が杉の花粉にからかわれ

三田市 阪本 藤朗

手土産のケーキに孫ら畏まり

極楽と体沈める夜の床

病院も番号で呼ぶ四月から

葬式の重さ家まで持ち帰り

杞憂だと笑って居れぬことばかり

西宮市 片山 忠

なあなあで済めば無性に腹が立つ

孫一途思考停止の罫に落ち

犬だけが僕に嫉妬をしてくれる

階段で手を貸す愛は残しとく

求愛の下手な僕にもあった恋

兵庫県 安達 厚

井の中が丁度住みよい喜寿の春

坂道も目当てがあれば登れます

八十路にもこれからですとまず一步

コレクションみたいに溜る診察券

木の芽あえ春の行事を一つ終え

湯の街に風情を添えるこぬか雨
きみまろの風刺が冴える七五調

ケータイで遠隔操作してる妻

一大事地震少子化大阪市

雨あがりみどりの風が堪らない

和歌山市 寒川 武

外人が支えてくれている国技

お得意の分野で声がかくなる

妻の電話向こうも暇な人らしい

思いやり欠いた言葉を悔いている

遠慮がちに明るい記事も載っている

和歌山市 根田 よしこ

呑気な娘へそくり忘れ嫁に行く

片言をママが通訳みな笑顔

そろそろと道草し出す新入児

一年生はち切れているリズム感

鉄棒ができたと孫の声弾む

和歌山県 木村 徑子

ギブアップしたらやさしい風にあう

友は魔女ドロロンも言わず雲に乗る

筍も山椒も威張る木の芽和え

露茹でた香りは亡母にたどりつく

スローライフどっぶり花と句に漬かる

和歌山県 森 下 順 子

駅の階段登れた自負で行く句会

初物の値打ちを買った道の駅

仏にも鬼にもなつて寿命まで

近所づきあいほどほどというむつかしさ

親の自立うながすように子は巣立ち

鳥取市 岡 田 信 恵

我が家にも親しく庭に小鳥くる

足腰に負担がかかるダイエット

小包を開けて広げる母の愛

里帰り孫の臭いを置いて行く

知恵ついて泣いて甘える孫に負け

倉吉市 酒 井 美 美 子

大空にはばたけ孫の新時代

恋破れ泣き出しそうな空模様

入道雲戦の地球にらんでる

めがね越し心の内をのぞかれる

無人駅 主の帰りを待つ野菊

米子市 小 塩 智 加 恵

老いた胸わくわくさせる罪な人

時どきはブレーキかける子に感謝

へそくりはもしもの時の命綱

手と足は動くが口は達者過ぎ

よく見える眼になつた夫愚痴ふえる

出雲市 荒 木 英 子

晴天に心行くまで脳洗う

ガーデニング見事に咲いた芝桜

中国の反日騒ぎ驚いて(4/1北京旅行)

魅せられて余生旅する老いの坂

春うらら今の幸せ胸に秘め

出雲市 加 藤 スズコ

補聴器にすんなり入るドッコイシヨ

残り火を神に預けて軽くする

起立礼 恩師を偲ぶ校舎跡

火も水も暮しの音に溶ける朝

日々平和今日も元気に箸の位置

雲南市 福 間 博 利

民営化手づなの端は闇の中

あつさりと逝く話など落椿

ちぐはぐな空気をとかず朝のお茶

日の丸を迷彩色にするでない

若人にきれいな日の丸継がせたい

倉敷市 撰 喜 子

バーゲンの皿割る音がうつを吸う

職ひいてこたつが根城 本が友

テレビ見てうたた寝が好きワンルーム

子も猫も実らぬ恋へひた走る

夕焼けの浜辺詩人になれる彩

府中市 藤岡ヒデコ

身の回りシンブルにして初夏の候
GW若葉シャワーを浴びに行く
にぎり飯若葉も味をそえてくれ
分け入れば峠絶景声をのむ
山田では中高年の田植え唄

今治市 渡邊伊津志

共通の話題の枕まずさぐる
蝶蝶となって毛虫は歌になり
保護色を信じ青虫動かない
それからの亀は走らぬ事にする
参加した誇りを胸に前夜祭

今治市 野村清美

藤ゆらりゆらりと風の私語を聞く
団体さん藤をバックにハイチーズ
母恋し藤の乳房のやさしさよ
九分咲のずっしり重い年増藤
つつましく老女がはしゃぐ藤の寺

高知県 百田幸

顔よりは心美人と言える人
駄馬なりに余生は夢のあるくらし
さざ波をうねりに変える人の口
躓いて親の歩んだ道が見え
記念樹は枯れて娘は他家の人

宮崎市 串間安子

満開に人も小鳥もよう謳う
ボチボチとやっていきます好きな道
物忘れまさかまさかとうろたえる
百歳の元氣いつでもいいお顔
川柳があつて介護も苦にならず

シドニー 坂上のり子

気抜けた若者に国託す危惧
日の丸は目立つぞ恥じぬ気配りを
人間ってそんなものもあるんだよ
こだまする杵の音のどか平和なり
夢追うて知らぬ間に歳取るんだよ

シドニー 三谷たん吉

地震事故一時帰国も命がけ
そこらじゅう謝りごっこテレビショー
国連理事 外に媚売の見苦しさ
若者の不気味なほどの無気力さ
東京の空に舞う鯉あえいでる

メルボルン 藤原ポン吉

近頃の東京湾は水族館
母の日が盛大なのは訳がある
飛び乗ってセーフ束の間女子車輻
声援が過ぎてむすこの気を散らす
ユーカリの香りストレス消していく

豊中市 源 田 啓 生

薰風に迦陵頻伽も来て遊ぶ(橋高薫風氏追悼句 2句)

匂玉を磨いて去った風のあり

ほたる鳥賊春愁消して喉に落ち

黄昏れて来たが日本がやはり好き

寝屋川市 北田 ただよし

天の川消えて久しく夢も消え

ひもじさが思い出せないたらふく度

やわらかさ喧嘩の火種炊きご飯

悔しさで齒軋り増える顎が張る

河内長野市 印 藤 智 子

お仕着せの母の日わざと拗ねてみる

自己流に生きて母の日おもはゆい

音読は頭にいいと一葉本

連休は夫と老いをぶらさげて

和歌山市 土 屋 起世子

美しい花に夫婦で立ち止まる

人情にふれて一日春になる

たつぷりの時を浮いてる露天風呂

のんびりと歩き人間らしくなる

横浜市 巖 田 かず枝

肩書きを捨ててゴミ出すいい男

命懸け戦場だけじゃないらしい

口下手の婿と夫が酌み交わす

謝って済まない事を謝られ

富田林市 古 田 千 華

巨星墜ち聞くぞ悲しき無常なる

お目もじのないまま永久のお別れに

もくもくと尾瀬の木道五月晴れ

人は皆心に痛みもち合わせ

秋田県 湊 修 水

一瞬の人災神も仏も肝つぶす

事故現場泣くか花びら降りそそぐ

平和呆け済まぬ済まぬで時稼ぐ

民営一辺倒これでいいのか総理どの

藤井寺市 鈴 木 いさお

還暦を過ぎて澁刺今が旬

ジョギングと腕立て伏せであと十年

飲めぬとは言わせませんよ赤い鼻

三人を成せば多産という時代

境港市 遠 藤 那珂子

愛ちゃんのパワー飛び出るテレビから

包む事一ツや二ツ持ち歩く

亡き母の包むしぐさが眼に残る

初恋のワクワク遠い日の記憶

松江市 松 浦 登志子

花ことは確認しつつ種をまく

好きなこと一番にする鼻歌で

眼鏡屋に知的ですねと褒められる

ほいほいとついでに行ったら丸木橋

河内長野市 大西文次

死に際の下手な男の浪花節

食いぶちが少し残つて死に切れず

出るところへ出たらバツジが物を言い

親父また何かぶつぶつ言うところぞ

京都市 三宅満子

オレと言う息子うちにはおりません

一人では食べるの惜しい春の膳

亡母たちが知らない花を仏前に

待ちわびた夫婦の時間もてあます

草加市 飯土井健翁

春が好き今年も生きる気合いくれ

中味無い本が売れてるから不思議

花が好き愛せば四季に笑顔くれ

体験記読んで己に気合い入れ

横浜市 長島亜希子

昇進も計算に入れローン組む

食べられる野草も摘んでハイキング

晴れは晴れ雨なら雨の予定表

モデルルーム素敵な家具で夢を見せ

高槻市 佐藤茂

精一ばい生きて人生丸味増す

中国の日本に絡む風やまず

山鳩の鳴きごえ過去をくすぶりぬ

同窓会出逢いと別れターミナル

大阪市 中村れんげ

部屋中に花一ばいの母の日よ

孫の目のきびしさに脳若返り

笛吹けど心躍らぬ気の重さ

ころころと心の変わる浅ましさ

静岡市 中西雅

たんぼぼの綿毛の行方風まかせ

九十路長い道のり神まかせ

知恵袋穴からこぼれつくろえず

椿落つ いさざよいさま忘れず

宇部市 高山清子

打ち明けるきつかけさがす月の道

カラオケと旅行生き甲斐老い独り

傘寿の恋切なくゆれるイヤリング

戦中にさかれた恋に老いて燃え

藤井寺市 吉田喜代子

春眠に負けた紳士の開いた口

連休がとつても怖い空財布

もう古希かまだ古希ですとゆれる花

胸襟も開けば明日に通る風

大阪市 伏見雅明

鬼の子も寝ている時は天使の子

食べながら居眠りをする伸び盛り

象さんで引越しせがむ孫娘

叱られた日を思いつつ子を叱る

横浜市 金森徳三

リハビリの妻を待つ間のウォーキング
妻と娘の会話どこかでずれている

六枚目はがし吐息のカレンダー

煙の輪ホームの端で絆生み

横浜市 布山嘉信

大の虫 小を犠牲に生き残る

子供より公園デビューママ疲れ

桜散り出番が来たと花水木

風さえも緑に染めて野山萌え

浜崎市 杉浦えむ

ご一緒につて地獄へですか核の傘

別れ路君は日なたへ歩き去る

子をなじるわたしのふりをした子ども

思い出のすきまに好きな花を挿す

大山市 関本かつ子

ジョーカーを抜いてと孫の丸分かり

プチ家出決行をして映画館

あきらめて戻る灯りは温かく

自治会長夫の違う顔が見え

大山市 吉田幸子

切れ味が冴えて料理のコツが活き

駄々こねて母の懐別天地

寸法はまちまち手作りの温み

極楽トンボ好きな事して光ってる

愛知県 河合ますみ

くず籠に絶好調のストライク
置いて行く温さやっぱり地の絆

馬の目に空と一緒に私いる

叔父と母足して二百のヒストリー

大阪市 中村忠敬

年金の生活どっぷり昼の風呂

失敗は創作料理と名づけとく

スギ様の次はヨン様 次未定

クラス会古傷あばく奴がいる

大阪市 吉川弘泰

処方箋 薬価違いも紙一枚

医療費がまたまた上がり床に伏し

誰がした熊野古道に落書きが

この暑さダイエットには好都合

大阪市 平嶋美智子

ランドセルゆさゆさ揺らせ走り行く

黄色い傘くるくる遊びながら行く

元氣者楽しみたと持ってはる

花一輪葉陰に見つけ元氣出る

大阪市 平井露芳

困ったな水でも太る人もあり

不祥事のお陰で延びた無料パス

合併であなたも市民 山と川

ドラエモン皆声変り若がえり

株少し持つて株式興味持ち

大阪市 寺井弘子

お浄土で私呼ぶ人増えてゆき

この歳までおいでそのとき解るだら

岸和田市 坂口英雄

カロリーが気になる旅の夕餉膳
常備薬詰め込み旅の仕度終え

あちこちに核の匂いのする地球
よく食べて痩せたい汗に使う金
道聞けば子供が逃げるこの時世

大阪市 吉内タカ子

海外に旅立ちふえる国平和

親の歳こえて元気で生きている

あれこれと孫が命じて腹が立ち
豊かゆえ勿体ないが死語となり

岸和田市 森元ふみよ

旬告げる花の節目を覚えとく

銀行のおだてに乗って定期増え
旅の方爽やかに問い去って行く

これからは はんなり色の夢を追う

泉大津市 助川和美

たんぼぼが下校途中の足止める

出る幕がなくて静かに生きている

岸和田市 堤 檜代

へそくりが孫の成長待っている

夫の靴私の家の守り神

還暦の白髪いきいきクラス会

夏が来たチョットとたのしい衣替え
救急車いつもお産と思いたい

車椅子母と語れるチャンスくれ

熱心が過ぎ押し売りと間違われ

岸和田市 中岡香代

門真市 矢阪英雄

定年で梅雨に年賀を考える

他人様のうわさ話に花が咲き

行動を指示した頭脳空洞化

ラブラブが愛という字を軽くする

心臓のリズムはサンバ無理をせず

キリストもアラーム願う平和な世

心臓に手を当て底に欲を知る

別人の顔で出てくる美容室

岸和田市 林 力子

河内長野市 内海綾乃

下書きをしてからメール送ります

ほろほろの封筒恋も期限切れ

不思議です好きになる人父似てる

苦虫も褒めそやされて笑い出す

葉飲んだか籠をのぞいて確認す

満腹になると名案湧いてくる

花粉症でマスクしたまま聞きとれず

堺市 河盛龍三

母からの包みを開ける疎開先
腐ったパン食べた疎開の欠食児
芹を摘む虫も一緒に連れて来る
目に掛けた眼鏡を捜す忘れ物

高槻市 安田忠子

阪神が勝てばやっぱり元気である
若いつて唯それだけで宝物
カラーシャツ五月の空に泳いでる
NHKそれでもやはり見えています

高槻市 大崎侑子

魚好きの夫の味覚に婦随して
暴動に責任なしと言う政府
来世では自由に飛べる鳥になる
薫風に乗って師の君遠い旅

羽曳野市 吉村久仁雄

善行のあと善人の大あくび
子が誘う酒に決意を汲んでやる
全快の膳にうろつく迷い箸
兄弟の喧嘩へ母がつくる鍋

羽曳野市 仲谷真一

薫風に寄り添い歩く影二つ
女性とは深層心理わからない
マークシート鉛筆ふって選んでる
デジカメに孫の成長納めてる

羽曳野市 松本静子

古里は住む人なきが掃除する
古里の田畑雑草生い茂り
いつまでも過去の歴史にとらわれず
戸を開けてさわやかな風深呼吸

羽曳野市 永田章司

反対は雑音ですと片付ける
小心者方便の嘘つききざり
リストラも妻の笑顔に救われる
投書欄世相明暗映しだす

東大阪市 今岡貞人

歴史より課題つきない現代史
春雨に共にぬれ行く人も無く
里山に子供いるらし鯉のぼり
還暦の父はイクサを知らぬ人

枚方市 小川良吉

損もまた反面教師生かされる
八方を丸く演じて二日酔い
ほんやりの刻も老いには癒し刻
消去法はよくに当てたらよく消えそ

藤井寺市 西村栄一

谷川は昔のままに流れてる
一日が無事に終わった茜空
大根の美味胃袋へ味方する
土のある暮らしストレス消えてゆく

放課後に遊ぶ子ら無く桜散る

昼下がりに作句できずにお茶をくむ

悩み酒足だけ酔って二軒目へ

古希からは数えで祝うことにする

八尾市 田邊 浩三

大阪府 高木 道子

悲しみの棘は抜けない人模様
ゆたかなる死の悲しみよ哀れさよ

国産の力士待ってる棧敷席

誕生日たしか昔はあったハズ

大阪府 小栢 こずえ

白無垢の花嫁自我の色かくし

派手好む姉衣がえ歳はべつ

綻びる脳をつくろいながら生き

寂しさも自由のうちよお茶にしよ

八尾市 中島 春江

香焚いて滅多にない日かみしめる

惚けたこと少し道具に使ってる

働いた証朝日にみせている

小さな種蒔いて大きな夢をみる

大阪府 畑中 節子

守備範囲思いもよらぬ妻の留守

平気だと言うてる顔が疼き出す

腹据えた途端に晴れてきた濃霧

場内を包み込むよなソロに酔う

八尾市 寺川 はじむ

花椒淡い香りに深呼吸

愚痴るくせ幸福すぎて何不満

母さんはもつたいないが何時も癖

通り抜け桜花より先に匂が招く

大阪府 西川 冷子

つまずいてやつと解ってきた段差

孫来ると夕餉を囲むコの字形

魂がすっぱりぬけてゆく欠伸

五連休やせた財布で練るプラン

八尾市 田中 トシエ

義経像見おろし居りぬ古戦場

弁慶の最期に立った衣川

千社札 大杉囲む中尊寺

奥入瀬に二輪草咲く春はじめ

尼崎市 小池 幸子

お百度を踏んで入試の祈願する

路地裏の井戸に昔が置いてある

床の間の軸取りかえて春を呼ぶ

侘助の命を咲かす早春譜

大阪府 若月 裕作

母逝きて端午のチマキ届かない

精一杯生きて来たから振り向かぬ

少しだけ見栄も交えて生きる糧
曾孫抱き弾む手足をもてあます

尼崎市 桑原 東園

ホールインワン弾む足どり艶やかに

また海に洗って貰う陽は沈む

新調の服はお出掛け待っている

リハビリに馴染まぬ身体駄々こねる

尼崎市 古川 正子

一年生声弾ませて並び行く

鯉職 校庭泳ぐ五月晴

何故だろう土踏ますない子供たち

公園の砂場に子供遊ばない

篠山市 谷田 多美子

夜桜に浮かれ帰って来ない毬

孝行のくぎ煮が届く花の門

好きな花真ん中にして一人住む

姑の思いしみじみかきつばた

三田市 辻 開子

亡き姉の柳誌覗いて愛も見る

夫留守今夜のテレビちと寂し

漢方に振り回されて六十路生き

目覚ましよ寝かせてほしいあと一分

三田市 福田 好文

駅までを歩けば景色倍に見え

赤ちようちん横目に急ぐ駐車場

税金で凶悪犯をなぜ弁護

終章はまだ先だろう昼寝する

宝塚市 丸山 孔一

聞いてくれと言える悩みはまだ軽い

無言の眼 口数よりも深く突く

残り香につい振り向いて歳を読む

春の苗育て育てと支柱立て

西脇市 七反田 順子

防空壕若き生命を呑みました

ウォーキング山の辺の道歌の道

母乳好きオムツ布好きよく眠る

赤ちゃんは握り拳で味をみる

兵庫県 永井 かほる

畠物植える段取り夢の中

田植時お金降ってるような雨

いい雨だ野菜の顔が目に見え

定年後男子やさしくなつてゆく

兵庫県 黒崎 美紗子

赤ちゃんの並ぶベッドは光り満ち

眼帯をはずす明るい世が開け

よくもまあ同じ病の人で混む

髪をすく看護の人の手のぬくみ

兵庫県 岩本 美緒子

反応の無い手握りて声かける

たった三日信じられない告知です

弟の遺影に吐息凍らせる

大惨事神がまさかの落し穴

過疎の村 山山つなく拡声器

奈良市 田中賢治

草取りを済ませて土手は社交場

老夫婦杖持つ方が仕切ってる

国思う総理の背骨映してよ

生駒市 小西稔

腹の中顔だけ見てもわからない

町中の子供集めてみこし出す

手をつなぎ孫と楽しむ遊園地

事故の後さっぱり乗らぬ一輛目

橿原市 藤永実千代

見舞いなど要らぬ顔だけ見せて欲し

授かった一つの無駄も無い体

退院に備え筋トレ怠らず

幾歳を連れ添い未だ分からない

和歌山市 坂部かずみ

母の日に玉手箱かとラッピング

ヨチヨチの歩み笑いの泡がたつ

水無月の蛙合唱田植すむ

問題のメール短文にて届く

和歌山市 山田侃太

文末の絵文字深読みしてしまう

授業中漫画家志望というノート

文句など言わぬ首まで飛ばされる

印籠を見せて戦が終わるなら

意地を張るから狭くなる選択肢

和歌山市 喜田准一

目を閉じているのにいけず指名する

成り行きに任せて吉と出た勝負

それなりの答出るまでそつと置く

鳥取市 森美智代

連休が終りひとりの絵画展

葉わさびがつんつん今日はよく効いた

告げ口をする人きつと寒かろう

事故してもJ Rしかないのです

鳥取市 山口千代子

宿命か生き残る人死ぬる人

仏壇に嬉しさ憂さを今日も告げ

愚痴話 聞きたくもない耳に栓

出しやばれば嫌な視線が向けられる

鳥取市 近藤秋星

春風とデートそこまで御一緒に

ニセアカシア咲いて砂丘も初夏の色

心臓の鼓動寝た間も動いてる

男には女はいつも危険物

鳥取市 谷岡清子

晴れわたる鯉幟よう泳ぎおる

へそ出しに風邪引かぬかと気をもめる

福袋 透明布で縫うとする

耳遠き愛もとどかぬ夫となり

倉吉市 前田 喜美子

一石を投じて波紋見逃さず
初夏の風 竿までゆらす鯉のぼり
現ナマに心の奥の手がさわぐ
手に肩にみやげ数かず旅終る

境港市 中井 虎尾

目は花に鼻は料理のにおいかく
シナリオのない野球には魔物すむ
平等と言う名の元に上下あり
人間を台本なしに演じ生さ

米子市 池尾 保子

まっすぐに歩ける足がうらやまし
消灯後窓から光さしてきた
やがては一人残る茶碗のさみしさよ
遺したいかやぶき屋根の一軒家

鳥取県 毎田 信雄

古稀傘寿昔のこととなりにけり
運がよく感謝の言葉忘れがち
ぐつとくる痛さも暫し九十肩
怒ることしないと心決めている

鳥取県 橋谷 静江

ご近所に仲良し友がたんといる
近道を行けば危険がついてくる
肥満体もしも痩せたら夢がある
少しづつブレーキかけて余生行く

松江市 柏井 日出子

言いたいをいって貴方は晴れますか
いつの世も頼る確かな広辞苑
長でしよう すこし口をとじられよ
日当りが好きで前向く赤い靴

出雲市 川島 和歌子

合併に親しい名前消えて行く
生真面目で冗談言えぬ人と住む
偶然に苦手な人の横の席
純情な性で時々損をする

雲南市 菅田 かつ子

いい知らせちよつとお化粧しようかな
それなりの言い分もあり茄子カボチャ
手の掛かる夫残して逝かれない
母の日へ娘がくれた赤い服

安来市 原 煩惱尼

蒼天に幾多の罪を洗われる
また一人流れに竿の正義感
誕生日嫁のこころ根有難く
通り抜けに勝るさくらの郷土愛

鳥取県 武島 ちよえ

罪のない話で友と小半日
ユーモアを解する人でウマが合い
どの辺で下げよかランクお付き合い
寄付金へ貢献したと胸を張り

岡山県 矢谷 富士野

青春の足跡が舞う甲子園
よく研げば切れる明治のご根性
酒の味覚えた寡婦のひとりごと
百歳が菩薩のような顔で逝く

府中市 岩本 雅代

初夏の風心の隙間潤わす
缶ビール野良の休みで癒される
青空に自慢の声を張り上げる
夏野菜色々植えて夢ふくれ

東かがわ市 向山 治延

どの子にも親の愛にはかわりない
老農の田植する身に汗光る
栄達のかげに内助の功が有り
父の日に父の亡い子は淋しかる

唐津市 岩崎 實

かけ事はすべて卒業土いじり
退職し失敗の夢ばかり見る
親孝行できたと帰る子供連れ
はちぎれる蛙の声の棚田植

原稿募集

エッセー 七〇〇字（四百字詰原稿用紙三枚半）
ひとこと 三〇〇字（たて十五字・よこ二十行）
エッセーは同人のみ、ひとことは同人・誌友不問。
共にタイトルを別につけて下さい。締切り期限は問いま
せん。ただし、原稿の採否、添削は編集部に一任して下
さい。
本社事務所宛

第36回 奈良新聞川柳大会

日時 7月31日(日) 10時開場
会場 奈良県文化会館小ホール
TEL 0742-23-8921

お話し 鬼師 小林 章男氏

宿題と選者 各題2句 11時30分締切
「近 日」 福 田 秋 雄 選
「あ の 日」 大 村 美 千 選
「押 す」 芳 野 多 佳 選
「鳴 る」 鶴 本 多 佳 選
「め が ね」 杉 森 節 選
「四 角」 西 田 中 國 選
「覚 悟」 黒 川 正 之 選

席 題 「 」
会 費 3000円（昼食・発表誌呈）

出席申し込み 7月20日まで
〒630-8686 奈良市三条町606
奈良新聞社文化事業部川柳係
TEL 0742-26-1335
FAX 0742-27-7810

欠席投句 7月20日締切り 500円
〒630-8261 奈良市北市中町7 1
杉野 睦朗 宛

主 催 奈良新聞社

第89回 大阪川柳の会

——会場がかわります——

会 日 8月5日(金) 17時開場・18時締切り
場 場 大阪市北区梅田駅前第二ビル五階
大阪市立総合生涯学習センター

宿 題 「線」 ふあうすと川柳社 村上 永筆選
「じりじり」 堺 傘 岩田 明子選
「タオル」 川 柳 塔 社 川上 大輪選
「途 中」 番傘川柳本社 磯野いさむ選

欠席投句

8月4日必着(会員のみ・会員募集中)

〒532-0025 大阪市淀川区新北野一―三―四―七〇六

電話〇六―六三〇三―七二九七
本田 智彦宛



橘高薫風名誉主幹を偲ぶ

(順不同)

平成十七年四月二十四日没

戒名 愛染院文誉薫風居士

享年七十九歳

悼・薫風先生

田 辺 聖 子

「川柳という

まことつらぬき

君逝きぬ」

薫風先生のご風格をひとくちに申しあげると、(私にとつては)

〈清爽〉

という言葉が思い浮ぶ。すがすがしい、無私の、純なあなたかみが、周りを薫染するところがあった。お作品そのものも同じ感覚であって、先生の句集をひもとき、お作に接するたび、目も心も洗われる思いがあった。

丈たかく、しかも川柳の本道である、人肌ぬくい、なつかしい感触、ほのほのとしたユイモアを失わず……。

立話 長うて犬も坐り換え

秋風に傷なきものはなかりけり

夜の長さ 襖をあける猫がいて

緩急自在の句境がたのしい。

先生は時に、「すし萬」の小鯛すしをお土産に、拙宅へも、お越し下さった。一いつときの閑談、これが何とも楽しく、座に笑いが絶えないのであるが、さて、何を話してあのようになり笑っていたのやら、おぼえていないのが残念である。それこそ、清談というか、

颯々たる風に吹かれるような、先生のお人柄そのものの風趣であった。

先生は余香を、塵の世のわれわれにとどめられて、仙界へ去られた。残り惜しいが、珠玉のお作品が残ったのは、私のような巷の川柳愛好者にとり、せめてもの慰めである。

(作 家)

男の哀愁

木津川

計

電話が鳴ったから受話器を取ると薫風さんからだった。「あなたが私の句を紹介してくれていると知って、うれしく、ひとことお礼を言いたくて」。人生とは何か、この句に

言い尽されている、と大教室で僕は、
人の世や 嗚呼に始まる広辞苑

を黒板に書いては学生たちに説明することが
よくあった。まさかご本人に伝わりうとは。

年譜を見ると昭和四十八年刊の句集『肉眼』
にこの句は収められているから、四十五、六
歳の頃、作句されたと推察するのだが、処女
句集『有情』に溢れた優等生の才気煥発は影
を潜め、麻生路郎亡き後の人生の寂寥がにじ
む句集であった。

思い起して中島生々庵、西尾菜の主幹から
男の哀愁は窺えなかったが、薫風さんには、
あった。そういうお人柄でもあったらう。

恋人がいま肉眼に入り来る

のではあるが、人の世の波瀾がこの頃、薫風
さんを次々見舞っていたことが『肉眼』から
読みとれる。

陶枕に睡蓮恋し 女人より

睡蓮は万丈光の光源よ

寂しかった薫風さんと初めて会ったのがそ
の頃だった。藤沢桓夫邸で開かれた文人たち
の宴に、僕は芸能評論家・吉田留三郎氏に連
れられて待った。田辺聖子さんが司馬遼太郎
さんに僕を紹介してくださったのもその席で
あった。

薫風さんは二十人ほどの集まりの末席で、

身をすくめるようにしてかしまっておられ
た。出席者に句集を配って回られたのだが、
遠慮され、恐縮されながらの姿に僕は薫風さ
んの慎しみを知り、そのお人柄に惹かれた。

それから茫茫三十年。僕は芸能誌を発行し
ながら今年古稀を迎えた。僕なりの人生の有
為転変であった。

生きてることが運だと思っ古稀

と詠んだ薫風さんの心境はそっくりまた僕の
思いでもある。生きていくのがつらい日は川
柳を僕はよく読んだ。そこにいつも薫風さん
の句があった。

（立命館大学教授・「土方莚」誌代表



平成1年11月 高野山

思 い 出

吉 岡 龍 城

薫風先生といっ頃から親交を得たのか、は
つきりと思い出せないが、中島生々庵先生が
日川協の理事長に就任された頃からだと思っ
生々庵先生とは、同じロータリアンの柳友
として親しんでいた。

昭和五十年頃からは、薫風先生とは、日川
協の役員として交流が深まっていた。

親交が増すにつれて、薫風先生を見直すこ
とが多くなった。

一見、温和な紳士然とした薫風先生が情熱
的な強い信念の持ち主であり、川柳の拡大や
発展のためなら千里の道も遠しとせず、川柳
のためには万障繰合せ人、時間を忘れて語
り合う人、出費も惜しまない人、交友を大事に
する人、本当に敬服することばかりであった。
平成十三年春の叙勲では、川柳の育成発展
に尽された功績は、勲功褒章よりも木杯一組
台付がふさわしいと、遠山文部科学大臣より
直接に賜杯を手渡され、拝謁の榮譽を受けら
れて本当に喜ばれた。

また、その年は麻生路郎、葭乃両先生の比翼句碑が路郎先生の郷里、尾道に建立されて、念願達成の二重の喜びだと嬉しがられた童顔が今も思い出される。

薫風先生とは平成十一年より瀬戸内しまなみ文学ルート川柳大会の二次選者として、毎年六月に尾道市でお会いしていたが、いつも路郎先生の比翼句碑に献酒に出掛けられていた。

最後に薫風先生と親しくビールを酌み交して語り合ったのも昨年六月二十五日の尾道であった。

日川協の常務理事として最後まで御尽力戴き、個人的にも御厚情、御教訓を戴き感謝するばかりである。

薫風先生のご冥福を祈ると共に、川柳塔社の更なる御発展を祈念致します。

(社 全日本川柳協会会長)

兄と呼び

妹と呼ばれて

時実 新子

薫風さんは寡作の人で、一句をとでも大事にするお方でした。

四面楚歌 故郷は豆の花の頃
人の世や 嗚呼にはじまる広辞苑
われに過ぎたり 絢爛と死ねる歳

など、あまたの名句を残されましたが、私の忘れ得ない句に、

草の芽が出たぞ おしっこさせながら
があります。たしか、三人目に男児充さん
を得られた折の歎びのお作と覚えております。

母上を敬い、妻子を愛し、友情にも篤かった薫風さんの、これは珍しく素直な自祝の発露だと思っております。「男の子や、男の子や」と、手放しの若いおとうさんが今も目に浮かびます。

薫風さんと俊平さんと私は、いわゆる同期の桜で、妹分の私は二人の兄から何かにつけて助けてもらい、甘えてまいりました。

川柳塔社のお祝いに参会した翌朝、大阪空港までタクシーをとばそうとして二人の兄にこつぱどく叱られたことも思い出です。リムジンバスの乗り場まで送ってくれた薫風兄は「空港で美味しいもん食べて」と、お小遣いをくださった。私は実兄を持ちませんが、兄のぬくもりをしみじみと感じたことでした。

俊平兄亡きあとの薫風兄の嘆きぶりはたいへんなものでした。「こんなとき俊平がいてくれたらなあ」と何度聞かされたかしれません

ん。妹分の私では満たされない男同士の友情がどれほど深いものであったか。

このたび薫風さんも旅立たれて、私はひとりぼっちになりましたが、天国で握手のお二方を思うと、少しは心が和みます。

訃報の翌日、山陽新聞社の依頼で追悼文を書きました。そこに記しましたように、薫風兄からいただいた有形無形の宝物を大切にしておきたいと存じております。しかしながら、今はたださびしく、ただなつかしく、ご風交の五十年を思うてほうと過ごしていますことをおゆるしくください。

(月刊「川柳太字」主宰)

人生後半の知己

尾藤 三柳

橘高薫風さんと初めてご挨拶したのは、日本川柳協会の第一回総会がカンボール京都で開催された席上だったから、それからちょうど三十年、何かにつけて警咳に接してきたことになる。人生後半の知己である。

江戸川柳の影響とは全く離れた地点から出発した関西の近代川柳をそのまま体現してい

るような新鮮さと爽やかさを感じさせていた
薫風さんが、あるとき「私は久良伎を知らない。
久良伎を知りたい。参考資料があったら
拝見したい」という親書を寄越されたときに
は、オヤと思ったことを憶えている。

とりあえず『阪井久良伎全集』教冊を送つ
たが、薫風さんのお師匠さんの路郎氏などが
「楊柳」や「新短歌」時代、攻撃対象にした
のが、久良伎であったことを思うと、いささ
か奇異の感がしたものだ。

青森の「風のまち」ではほとんど毎年お目
にかかっていたし、一緒に観光もした。パネ
ルでもよくお仲間になったし、緑書房の「川
柳年鑑」では、新子さんを交えた鼎談が巻頭
を飾ることができた。華やかな喜寿記念にも
お招きいただいた。

愚息一泉のささやかな句集に寄せられた当
人宛の書信に「あなたの父上には、何かと川
柳の知識の足りないところをご教示頂いてい
ますが、句はあなたの方が良いです。父上の
は、柳界を意識して袴を付けておられる」と
あり、いつか抗議をしなくてはと考えている
うちに、亡くなられてしまった。

「平安」の二〇周年大会で選を、一緒にした
時から昭和生まれと思っていたが、大正との
境だったことを後で知った。それにしても、

七十代は若すぎる。残念である。
川柳はまた、大きな損失を被った。
花のあと大きな闇が墜ちてくる

〔川柳公論〕主宰

三柳



平成15年8月四万十川川柳大会

おしゃれな

生き方に学ぶ

大野 風 柳

四月二十四日の夜、十一時少し前だった。
けたたましい電話の音で薫風さんの死去を知
らされた。日川協事務局長本田さんの声も元
気がなかった。

実は川柳マガジン五月号の川柳時評で「選
者の自覚」と題して、麻生路郎、橘高薫風の

師弟関係のすばらしさを書いた。そして選者
のあるべき姿勢を、この路郎・薫風の「志」
の共有の中で考えるべきだと結んだ。

その原稿はあの風々とした薫風さんを脳裡
いっぱいに入れて書いたのだ。そしてこれを
読む薫風さんの顔を想像していた。奇しくも
川柳マガジンが翌二十五日の朝私の手許に到
着したのである。

薫風さんはいつも「路郎」「路郎」と呼ん
で私に師の話をしてくれた。それが何か誇り
のように聞こえた。数えてみればいたるところ
で私は薫風さんに逢っている。いつも「ヤ
ア」と片手を挙げての挨拶だった。その何気
ない素振りに最高の親しさを感じた。

いつも小さくて軽なお土産をいただいた。
実におしゃれの行為をする薫風さんだった。
交す言葉が少なくともその思いは暖かかった。
私の叙勲の祝賀会に「欠席お詫び」と言っ
て、赤いバラ百本を送ってくれた。

平成元年私は二度の手術、その後妻の急死、
その十日後に柳都の大会を開いた。まさにカ
マキリのような姿で壇上で挨拶をした。主賓
選者の西尾葉さんと出席された薫風さんは、
パーティーの席上私にこう言って慰めてくれた。

「ボク、風柳さんよりも体重がないよ」

とにかく薫風さんの死は日本の川柳界にと

って大きな損失である。そして私にとつて師弟の鑑を失ったことは慚愧に耐えない。

「いのちある句を創れ」を私も大切にしていきたい。薫風さんありがとう。合掌。

(柳都川柳社主幹)

本当の恩人

斎藤 大雄

四月二十四日、日川協の本田事務局長から薫風先生の逝去の電話が入った。そしてご葬儀の日程等のFAXが入った。家内は当然葬儀に行くものと思っていた。そして喪服の用意までしたのであるが、絶対に穴をあけることの出来ないテレビ出演の仕事が待っていた。どうすることも出来ない口惜しさと哀しさが込み上げてきた。ただただご冥福を祈るしか仕方がなかった。

思えば先生とのお付き合い、いやお教ををいただいた時間は長い。私の川柳人生の中で薫風先生ほどお世話になった川柳人はいない。いわば関西川柳界と私とを結びつけてくださった恩人である。そのきっかけとなったのは私が三十代の前半であったと思う。そう

すると四十年前の話になる。先生が奥様をお連れして札幌に遊びにいらつしやつたことがあった。その折に札幌川柳社の同人である桑野晶子と札幌のメインストリートであった狸小路のビヤホールへご案内した。そして関西柳壇のこと、時実新子さんのこと、森中恵美子さんのこと、寺尾俊平さんのことなど関西の川柳人の活躍について、いろいろと教えていただいた。

それから私が四十代のときに全日本川柳協会の総会が大阪で催された。そのとき独り乗り込んでいったことがあった。総会が終わつて、これからどうしようかと思案にくれているところへ、薫風先生が声をかけ誘つてくれた。そして西尾菜さん、森中恵美子さん、墨作二郎さんなどと大阪の繁華街の飲み屋さんを案内してくれた。このときに関西の息吹をいやというほど知らされ、私の川柳観が大きく変わったことをいまでも鮮明に覚えている。

それから先生と会うたびに私を可愛がってくださり、不案内な関西でお世話くださったことを記すと枚挙に暇がない。それだけ薫風先生を兄の如く慕い、師の如く仰いでいた。

そのご恩をまだお返ししないうちに幽冥境を異にしなければならぬ。こんな口惜しいことはないし、淋しいことはない。しかし、

今はただただご冥福を祈るばかりである。先生、ほんとうにありがとう御座いました。

(札幌川柳社主幹)



平成11年7月 佐渡

義理堅い大人

竹本 瓢太郎

薫風さんの訃報が届き一瞬目が眩みました。薫風さんは大阪人であるのに、東京の洒落を理解され、お会いするといつも東京の洒落でもてなしてくださいました。

大会や日川協会の役員会で一緒にするといつも私の隣に座られ、瓢太郎さんの隣だと痩せているのが目立たないからと、本心だとも

とれる冗談をよくいっておられました。

古希だったか、お祝いをなさった時、電話を掛けてこられて、どうしても出てくれと言われ、予定表も見ずに即座に大阪へ行く約束をしてしまいました。旅先では何度か相部屋になり、ヘビースモーカーの私は遠慮するのが辛かったのと、ボンベの音に悩まされたことが昨日のような気がします。

じゃじゃ馬の播本充子を薫風さんに押しつけて一人前の川柳人に育ててもらいました。その充子から一か月前、薫風先生は快方に向かいお元氣のご様子だと手紙が来たので、まさかの訃報でありました。

亡くなられる二か月前に送ってくださった京名物、祇園十六五の甘納豆と五色豆を、いま美味しながら薫風さんを偲んでいます。

東京にいらっしゃったときタクシーに乗ると私は東京の四大タクシーの券を利用しているの、それで払うと言うと、ワシは全国通用の回数券を持っていると言って、日本銀行券で支払われる。戦中、関東の学校に通われていたからでしょう、江戸ッ子の粋も見栄も知り尽くし、義理をたいせつにされた大人であられた。麻雀を一度やろうやと、お会いする度に言われていたが、それも適わず黄泉に旅立たれてしまいました。

「薫さん、タバコと酒は控えんとアカンで」その言葉が鼓膜に張り付いています。私には本心に心強い素晴らしい先輩でありました。心よりご冥福を祈ります。

(川柳きやり吟社主幹)

わが書齋の薫風

磯野 いさむ

「こんな本を出しましたご清鑑の程を」と書き添え署名入りの『なにわ川柳・この一句』朝日カルチャーセンター刊を薫風氏より頂いたのは昭和五十八年秋、私の句「新劇に酔って肥後橋桜ばし」他一句が採りあげられ嬉しかった。元・朝日会館で演劇を見て梅田へ帰る心情が詠まれていると解説つきだった。

六十年七月・大阪保育社から出版の「川柳にみる大阪」は作家・藤沢桓夫との共著でカラーブックシリーズの文庫版を頂いた。私の句の色紙版が大きく紹介されていて、

文豪の旧居すげない人が住み いさむ
「作家はどこで詠まれたか想像の外にあるが、先ずは奈良高畑の志賀直哉旧邸ではなからうか、案内を乞うて愛想のない態度に鼻白む思

いがしたのだ」と解説してくれている。五百円の文庫本なので私は書店で数十冊を買って、大阪の名所風土史を川柳文化を説く楽しい本だと知友、柳友に配り喜ばれた思い出がある。

さわやかやこんなに小さい仏さま 薫風

藤沢桓夫氏を偲ぶ句だ。大阪住吉神社東の藤沢邸での告別式につらなつた席で私は薫風氏と語りあった。川柳に理解あり水府、路郎作品を多く覚えてくれる藤沢氏だったなあと。帰り道、駅近くの麻雀店に入り片岡つとむ、松本波郎らを加えて雀卓を囲んだ。薫風氏がよく藤沢氏と雀牌を競った頃、どちらも役満を狙う品ある競牌ぶりだったよと話してくれた。

平成七年、句集「古稀薫風」を頂いたのは川柳塔主幹に就任された翌年だった。「視野無限この言葉に尽く」が麻生路郎氏の序文だったのが今も印象に残る。平成十一年刊行の句集「師弟」は師・路郎の旅人作品、弟・薫風の古稀薫風とその後の句で綴られているが、常に路郎師を昨今の柳人たちに認識させようとする人間愛が深く感動的である。大阪川柳人クラブ、全日本川柳協会の役員として私たちは協力、接してきたので思い出は尽きない。

(番傘川柳本社主幹)

薫風さんを悼む

小松原 爽 介

橋高薫風さんは第十二回東洋樹川柳賞を受賞されている。その推薦文の中で、三條東洋樹は「関西柳界の中心である大阪においても二大勢力の渦に巻かれて、旗色の鮮明を強いられ、柳界の和とか交流とかが途絶えた時代があった。単なる党籍、派閥に重点をおいた対峙の無益を覚り、心ある人々の間には川柳の名のもとに衆知を集め交流の和を広めようとする考えが芽生えてきた。ありがたい事である。私は橋高薫風氏が早くからそんな考えを持ち、それを実行している人だと思つている」と述べている。

たしかに薫風さんはその温厚な風貌に加え、大阪弁を交えての言葉遣いは、川柳という文芸がそのまま体質となつていような温か味を覚える。

東洋樹賞受賞の対象となつたものは、当時「構造社」から出版された薫風さんの編纂による『麻生路郎』が日本図書選定協会の推薦図書となるその貢献度によるものであるが、

やはり「座」の文芸とも言われる川柳には、不可欠のリーダーの人柄もその対象になつたと思われるのである。

四月二十七日、加納会館で行なわれた告別式に列席したが、霊前に飾られた多くの花輪の中に、田辺聖子・織田正吉氏など著名人の名を見られたのも、薫風さんの生前の交流の幅の広さを今更のように知ることが出来た。これもまた薫風さんの人柄によるものだろう。

西尾菜氏から主幹の座を受け継いで、天笑さんにバトンタッチするまで、サンソ瓶を持ち運びしながら瘦躯に鞭打つての川柳活動は、よほど強靱な精神力がなければ、成し得ることではないだろう。私も主幹である立場から身につまされるものがあつた。

昨年の弓削川柳大会の選句室でお会いしたのが最後になつてしまった。現在、この追悼文を書きながら薫風句集『古稀薫風』をひもとして、冒頭の

恋人の膝は檸檬のまるさかな

労働歌 蟻が歌えば凄からう

この二句をなつかしく口誦している。

ご冥福をお祈りする。

(時の川柳社主幹)

薫風さんを想う

泉 比呂史

あのとつとつと話す薫風さんを思うと「ほぼつやけどなんぼでも生きられる」と言っているようで、いつまでもお逢い出来るように思いました。最初にお逢いしたのは姫路の句会だつたように思います。何回も来られたという訳ではありませんが「ふあうすと姫路支部」のあとの「川柳ひめじの会」の頃です。よく覚えてるのは、来られていた皆さんが、のちに名前を変えられているということですから。薫風子さんがのちに薫風さんに、寺尾一斉さんがのちに俊平さんに、そして定金白柳子さんがのちに冬二さんと改名されています。ひめじの会は全国の著名な達人達が応援して下さいました。中尾深介さんも姫路勤務でしたし私も姫路勤務でした。時実新子さんも入会されました。全国川柳家の皆さんが注目して下さいました。

薫風さんで思うのは「たいしようの会」のことです。大正生まれの人達で作つた柳派を越えてのグループ、ふあうすととの室田千尋編

集長もメンバーでした。漢介さんをはじめ薫風さん、俊平さん、三窓さん、夷一郎さん、鬼遊さん、良さん、泰さんも居られました。現代の川柳を多いに斬られたようです。

そんなたくさんの縁で私達の「ふあうすと」をご支援していただきました。田中好啓さんも川柳塔との交流は深く、今もうれしい交流が続いていることは、やはり薫風さんのおかげだと喜んでます。犬山の佐藤一粒さんと薫風さんのおつき合いも深く、数年前の犬山での川柳大会の際は、酸素ボンベ同伴での選者の役割を心から尊敬したことでした。

人の世や 嗚呼にはじまる広辞苑 薫風
この句に感じ入ってからも長いのですが、たくさんのことを川柳の世界に残して下さったなと思うばかりです。

神戸刑務所の、私と同じ篤志面接委員である中松正昭さんは、薫風さんと同級生だそうで、川柳の話をするとう薫風さんの話が出てきて、「昔から細い人だけどしっかりした男や」と言っていたのを思い出します。ほんとうに大切なひとを亡くしたと心から思います。ありがとうございました。やすらかにやすみください。

(ふあうすと川柳社主幹)



平成14年6月 徳島

ぐい飲み

岩井三窓

薫風さん、とは白々しく言えない。いつも通り、薫風と呼ぼう。なんや三窓、と即座に返事が戻ってくるころだが、薫風はもういない。俊平、漢介、鬼遊、泰、良、大正の

飲み友達はみな姿を消した。注いだぐい飲みを何処へ持ってゆけと言うのだろう。

平成十七年は昭和八十年、大正は九十四年。たいしようの会の、主役の薫風、漢介、俊平がおらんようでは、残念ながら、たいしようの会は消滅と言ったところか。

川柳が好きと言っただけで、柳派と言っ煩わしい垣根を取り払って、大正生まれが、存分に飲み、大いに語る。今更ながら、その談論風発を記録に留めなかつたのは、返す返すも心残りである。

瘦身瘦躯の薫風が病床にいて、三十数キロになつたと言っ話を聞き、とてもお見舞いには行けなかつた。彼も三窓は来んでもええ、来んでもええ、と言っていたに違いない。

川柳六大家と言われた、麻生路郎氏、岸本水府氏、逝いて四十年。路郎氏、水府氏の警咳に接した人も数少なくなつた。薫風は十数年路郎師邸へ通い続けた。言わば路郎氏を知る生き証人と言っべき存在だつた。

路郎氏、水府氏、ともに過去の人となり、薫風も過去の人となつてしまつた。

歳月の厳しさをしみじみと思つた。ぐい飲みに酒を満たして、薫風の、まつたりしたなつかしい大阪弁を反芻するが。

(番傘川柳本社参互)

薫風さん

黒川紫香

薫風さんとの出会いは、昭和三十年頃に近鉄阿倍野百貨店地下中二階、地下鉄天王寺駅を上ったところにある飲食店です。そこは、松江梅里さん経営する「大万」の outlet で、スタンドでずしを食べていました。

その時、隣へ来た書生風で生真面目そうな青年が薫風さんでした。梅里さんが私を紹介すると、

「ボク薫風子です。このたび麻生路郎先生の教えを受けることになりました。よろしくお願ひします」

と自己紹介をされました。

その後、病後浪人中の若柳潮花君と共に、鞆持ちをしてあちこちお伴しておられました。弓削駅前之路郎先生の句碑が建立された時も、同行されたと聞いています。

つねに表に出ず、控え目な行動で不朽洞理事会を心齋橋の中島生々庵先生宅の二階で開いていた当時、いつも隅っこで控えておられたのが心に残っています。

西尾菜先生が理事長になられてから、片腕として補佐され、あらゆる面で力を尽くしておられたのを思い出します。

私は小さい頃堂島の伯母の家に厄介になっていたことがあり、薫風さんのかつてのお宅と近かつたことから、堂島のことになると話が弾んだこともなつかしい思い出です。また、私が阪急で小林一三さんのそばに仕えていたことから、その人となりについて何かの役に立つようお話ししたこともあります。

薫風さんにはまだいろいろ教えてもらった、相談に乗ってもらいたかったので、本当に残念でなりません。亡くなった時私は入院中でしたので、お葬式にも参列できず申し訳なく思っています。

心安らかに眠られるよう、切にお祈り致します。
(川柳塔社相談役)

橘高薫風氏を偲んで

宮口笛生

川柳塔社の名誉主幹の、橘高薫風氏がお亡くなりになりました。前たもつさんより一報いただきびつくりした次第です。川柳界とし

て惜しい大物の死であり、正に巨星墜つである。薫風氏は麻生路郎氏に師事、川柳發展に大いにつくして参られた。薫風氏との思い出は色々ある。昭和三十二年奈良高校で、高校生ばかりの川柳会、川維奈良支部を結成した時も、麻生路郎先生と毎月奈良高校へ来ていたかったです。奈良の社寺巡り吟行をした時も、高校生と元気で楽しく十軒余の道のりを同行いただいた。薫風氏が川柳塔社主幹となられ、私も副主幹として、おんぶにだつこの形で色々協力させていただきました。

一番の思い出は何と言つても、中国と台湾の旅でした。田中正坊氏の企画により最初、上海・蘇州・桂林八日間の旅でした。西尾菜先生、東野大八先生も一しよで楽しい旅でした。寒山寺、桂林の漓江の舟下りは最高でした。もう一度行きたい位です。

続いて二回目は北京・万里の長城方面でした。万里に伸びる長城を二軒位歩きました。薫風氏も元気でした。続いて洛陽・西安の旅でした。中国は一応終り次は台湾一周の旅、これも実に楽しかったです。お年寄りにはほとんど日本語を喋られ、終戦まで私たちは日本人でしたと言われ懐かしかったです。

薫風氏はひ弱い体で西尾菜先生亡きあと川柳塔社主幹として、他柳社に負けず頑張つて

こられました。体を壊されて河内天笑氏に主幹を譲られ、名誉主幹として大いに頑張つてこられました。私の句集『でこいち』発刊の折も、序文を心安く書いていただきました。今になって思えば、むつかしい処もあったが良いお方でした。私と同じ歳、もう少し頑張つていただきたかったと思つています。今ただご冥福をお祈りするのみです。 合掌

〔川柳塔社相談役〕

思い出を辿る

小林 由多香

いつごろからお会いしていないだろうか、薫風先生の訃報を聞いてあわてた。

体調のあまり良くないらしいことは、昨年の川柳塔まつりの欠席で知らされていたが、こんなに早いお別れとは全く思いもしていなかった。

一つだけ兄貴であった先生とは、気軽にしゃべれた仲でもあり、鳥取県にはずいぶん足を運んでもらったものである。同じ部屋で枕を並べることもしばしばであった。

川柳の全国大会、近府県での大会には私も

できるだけ出掛けていったが、必ず先生の姿もあった。何度か酸素ボンベを持ってあげたことも思い出される。

どこで会つても紺のスーツ、それがまたピッタリと合い、貴公子とも言われた川柳塔の顔にふさわしい姿は忘れられない。

記憶力もすばらしく川柳もよく勉強された先生であり、麻生路郎師の話などよく聞いたものであるが、そんな古い話などもう聞けなくなつたのは誠にさびしく、路郎師との縁が切れたような感じがしてならない。

薫風先生との思い出はいろいろとあるが特に忘れられないものの一つに句碑の建立がある。理事長であった平成五年八月、葉主幹とお二人の句碑が、同時に香川県の白鳥町で除幕されてその式に出席をした。瀬戸内海の高大小の島々が見渡せる小高い丘に、高さ二メートルもあるうか美に見事な句碑である。

鳥一つ買うて暮らせば涼しかろ

この句碑の前に立った先生のさわやかな顔がはつきりと思ひ出される。

数多い薫風作品の中で一番好きな句であり思い出深い句である。

さよならも言わず貴公子旅へ発ち 由多香先生ありがとうございました。安らかにお眠り下さい。

〔川柳塔社相談役〕



平成14年7月 弘前

青森県との

かわり

波多野 五楽庵

薫風さんと青森県との接点は昭和37年、42年前に遡る。北東北三県で一番大きな川柳大会は東奥日報社主催の青森県川柳大会で、特別選者に全国一流の作家が招聘されている。その第16回大会に「川柳雑誌」の主筆者、麻生路郎先生が特別選者でおいでになられた。

先生に随行されたのが当時「薫風子」と号された薫風さんであった。しかも、当日の席題の選もされている。路郎先生と薫風さんは工藤甲吉の案内で十和田湖清遊をする。一種独特の甲吉の方言には路郎先生も薫風さんもお手上げで「通訳がいるな」と言う逸話も残っている。

時を経て、葉先生が特別選者として来県された時も随行は薫風さんである。もう既に同人になっていた私や田中叶君など七、八名が大会終了後に葉先生と薫風さんを囲んで、地酒を楽しんだのが、川柳塔みちのく創立の第一歩であった。

川柳塔みちのくには甲吉の句碑建立や、五周年、十周年大会等々事ある毎に御来県になり、それが契機で青森県の柳人との交際が生まれてゆく。特にかもしか川柳社とは深い繋がりが出来「乙賞」や、風の町川柳選者等毎年のように来県され、少しぐらいの津軽弁にはびくともしくなかってゆく。

弘前城の桜祭りが来れば思い出す。ある日ひよっこりと甲吉を尋ねた薫風さんが桜祭りにおいてになった事がある。しかし、その年は春が遅く、蕾が少しほころびかける程度で開会はそのものの淋しい人出であった。

公園になっている城内を御案内し、仮設の

食堂で津軽のおでんを肴に飲みかわした事がある。花の咲かない祭りの会場で飲んだ薫風さん。会場のサーカスの呼び声がむなしく聞こえる春の一夜であった。城の桜を見るたびに薫風さんを思い出す事だろう。

(川柳塔社相談役)

薫風先生

ありがとうございます

奥田みつ子

一九八一年四月、朝日カルチャーセンター川柳教室で、川柳のことを何も知らない私から先生から川柳の面白さ、深さを教えて頂き、NHKカルチャーセンター・産経学園・ローズカレッジ西宮と教室は替わっても、川柳に惹かれ、先生の講義に魅了されました。その間、川柳だけでなく教え切れないほど多くのことを教えて頂きまして、人生が豊かになり、有り難くただ感謝あるのみです。

何事にも几帳面な先生は、大阪市立図書館へ足しげく通われて、麻生路郎先生の遺しておかれた『川柳雑誌』などを調べていらつしやいました。度々、私もお供して、句は勿論過去の出来事など正確に記することの大切さ

厳しさを学ばせて頂きました。

また、先生はお話の中で、須崎豆秋さんのように、雨の題が出たら雨の日の街に出て作句するような真実の出会いを求める作者になりたいとおっしゃると共に、常に何にでも好奇心を抱いて、触角をひらひら動かせるようにとも教えられました。よく展覧会にもお供したのですが、ある展覧会で軍鶏の絵の前でしばらく立ち止まっておられ、その夜の本社句会の「流転」という題に

軍鶏抱いて男の流転限りなし

と作句されていました。御自分の感性に触れたものを、すぐ句に生かされるのを目の当たりにした一事でした。

寝められた思い出がなし師を葬送る

この句は路郎先生が逝去された時の薫風先生の句ですが、私も先生に寝められた記憶がありません。いつまで経っても下手な句だと叱られるばかりでした。でも、人一倍細やかなお気遣いをされる先生は、誰方にも無言で温かい目を注がれていたように思います。

四月初めのある日、水分制限をされておられた先生は喉が乾くから「みぞれ」をカップ半分だけ食べさせて欲しいと言われて、スプーンでお口へお入れしたのですが、半分すぎても「もう一口おまけ、もう少しおまけ」と

おっしゃったお声とお顔が脳裏から離れません。先生、本当に有り難うございました。

(川柳塔社副主幹)



平成12年9月 大阪川柳人クラブ吟行

励まして

いただいた唐津

仁部 四郎

橋高薫風先生には、本当によく唐津へ来ていただいた。昭和では、六十、六十一、六十二、平成では、六六、六九、十四年と六回になり月例会誌「川柳からつ」二百五十号記念の平成十六年五月には見事なバラを戴いた。

昭和六十年十月十三日は、川柳塔唐津の結

成三周年記念句会で、薫風先生には「茶碗」大坂形水先生には「熟れる」、高杉鬼遊先生には「桂」、岩本雀踊子先生には、「遠征」の選をしていただいた。二十年の時間が過ぎ去ろうとしているとはいいながら、このたびの悲しみに寂しさが更に募る。

薫風先生には、「さまざまれ」(昭六十一)「布団」(平十)「雑詠」(平九)と選をしていただき、平成十四年には柳話をお願いして、二十周年記念句会の来賓として招いていた唐津市教育長も、多大の感銘を受けたと、後で教育長から聞いた。

選をするということはこういうことかと、今なお唐津で話題になる薫風先生の選評を大会誌から紹介しておきたい。

一、茶碗蒸し容器一流味一流 出端 九一
茶碗と茶碗蒸しとは違うのですが、この句に惚れて茶碗蒸しの句も入選しました。感覚的に私と合致するものがあります。

二、茶碗だけおいて父さんでかけます 西崎(真島) 久美子
ジュニアの作品ですが、父の把握に鋭いものがあります。

三、「雑詠」を無記名のまま選することに問題はあろうが、作者が分かってみれば個

性がしつかり出ている。中略。雑詠は個性がにじみ出てほしい。

私個人のいちばん嬉しい思い出は、平成九年の第三回川柳塔まつりで、「この国の行方と父の遺書にあり」を月間賞に採っていたことであつた。私の個性を探していただいた思いがして嬉しかった。

(川柳塔社副主幹)

薫風先生のことなど

八木 千代

川柳塔は大正十三年の創刊で、そして私も同じ年に生まれ、当然、八十を越えました。若しもあとの齢が与えられますならば、この後もいつも川柳さんと暮らし川柳の思い出に包まれて、穏やかに過ごそうと思えます。

路郎先生とすれ違つるように塔に入りまして中島生々庵、清水白柳、川村好郎、西尾菜、橋高薫風の先生方が輝いていらつしやうって、まるで神々のように思えました。

中でも薫風先生は清新な感覚で、新人達を慈しんで下さいました。

先生は旅がお好きで米子には数え切れないほど度々のお越しで、奥様と同伴の時もあり、岳人さん鬼遊さんとも俊平さん大破さんとも、番傘の惠美子さんとはコンビで毎年かならずときに二度、三度と縁があり、会が終れば少年のような先生の素顔を見せられました。

追憶の中でも『樁守』と刊行を同じくされました『師弟』との発刊記念お祝い会をと、きやらはくの皆様が計らいて五月の風の匂う大山上の原での一日が甦ってきます。

まだ石垣花子さんも林荒介さんもご存命でしたから、なお懐かしいのです。裾野を回り藤の花房の美しい住雲寺での楽しい時間。

「天にひとり地にひとりありて師弟」とたまもや路郎先生を追慕される先生の熱いお話。

「きやらはくは私の弟子と思っているか」と勿体ないだしめけの仰せに、感激で拙いながら「弟はあまた師はひとりのみ藤の寺」を即吟でお答えしたりしたのも忘れられません。

大きな打撃を受けた四月二十四日の訃報。今年、藤も菖蒲も都忘れも紫という花々のすべてが四月に咲いてみせた異常気象です。一つの時代が終わったという感懐がしてなりません。先生。同じ時代によくぞまあ生きて下さいました。有難いとしみじみ思います。

生まれし時灯ありき

死に行く時灯あらん 薫風

せめて栞先生のご法名と共に朝夕にみ名を唱え、灯をともし続けて、ご供養をするのがこれからの語らいとなりましょうか。合掌

(川柳塔社参り)

薫風名誉主幹を悼む

濱野奇童

橋高薫風名誉主幹の訃を知ったのは、四月二十五日早朝の山陽新聞でした。目を疑いました。病状が進んでおられるとはお聞きしていましたが、まさかと言う思いに駆られたのです。

薫風さんは、麻生路郎師一筋の方だった。弓削では、川柳町のシンボルにもなっている路郎句碑を囲んで五年毎に献酒式を行っているが、必ずお顔を見せてくださっていた。五十周年には、ご遺族西村梨里さんをこ一緒して下さった。尾道に先生の句碑をと関係の方々もお連れ下さった。

昨年は五十五周年の節を迎える年であった。ご案内すれば嫌とは言われまい。ご健康を考えるととても無理なように思われる。か

と言って黙っているのもどうか。結局お声だけはと言うことになった。電話を入れると即座にどんなにしても参りますの一言。路郎師に対するご心情的深さにただただ敬服申し上げるよりなかった。その年八月二十二日刀根山病院へお見舞い上がったのが最後になった。酸素吸入のための機器を通しながら作品に目を通しておられた。柳界のことなど色々話が弾んだ。きつと復帰されると確信してお別れしたのである。

平成十三年、弓削川柳社にお寄せいただいた御恩にお報いしたいと、公園に句碑を頂きたいことをお話した。先輩西尾栞さんの句碑も是非一緒にとのお言葉も有って、川柳塔歴代の主幹の句碑が並ぶことになったのである。寺尾俊平の句碑と対面させてほしい。俊平が母の句だから、私も母の句をとこだわられるあたり、どこまでも先輩に対する畏敬のお心、友に対する誠意厚い方だった。

鱗雲一枚こぼれ亡母の窓

薫風

あの窓から、母を路郎師を囲み俊平と肩を組んだ薫風さんが、日本の柳界を眺めて下さって居ることだろう。安らかにお休み下さい。

合掌

(川柳塔社参り)



昭和61年9月 北京

斃れて後己む

田中正坊

晩年よりも若い頃のことを思い出す。若いと言っても私が六十歳、薫風さんは五十代だった。今は亡き学友の白石文衛と共に自宅を訪ねたのが最初だが、歩いて五分ほどの所に住んでいたのです。その後、しばしばお邪魔することになった。句集『檸檬』と『肉眼』を借り受け、全句を筆写したのが『薫風川柳』との出会いで、やがて私が同人となり、『川

柳塔』の校正を手伝う中で、いろいろと川柳について教えていただいた。

一方、お互いに戦中派という親近感から、古い堂島時代の思い出に話が及ぶこともあったが、二人だけで会った折は雅号ではなく、「田中さん」と呼んで上座をすすめ、年長の私を立てられるという律儀な一面も見られた。カルチャーの講師と受講生という形で学んだ訳ではないが、折にふれて教えを受けたという点では、尊敬すべき師であり、また、何でもざくばらんに話し合うということでは、信頼できる友であったと言える。

初めから薫風さんが選ばれる愛染帖欄や『朝日新聞』のなにわ柳壇には欠かさず投句し、誘われて青森や鳥取など各地の大会に同行し、中国吟行にも共に参加した。その後、常任理事として、また日川協役員として同席し、その後を継いで編集長になってから公私共に接触することが多く、柳社のあり方などについて話し合い、ときに意見が違うことがあっても、「あなたと私は一心同体……」で納まるのが常であった。

二人が相次いで現役を退いてからは、やや疎遠となったが、お洒落な人がスツク靴をはき、酸素ボンベを提げてカルチャーなどに出掛けるのは、見る目も痛々しかった。し

かし、その姿に路郎の後継者に徹する使命感をかいま見、「斃れて後己む」（「礼記」）感慨に打たれ、黙って見守るしかなかった。私の二十余年の川柳生活は、正に薫風さんと共にあった訳で、その死によって胸にあいた穴を風が吹き抜ける思いがしてならない。

（川柳塔社参互）

燃え尽きた顔

藤村 亜成

川柳塔誌の発送を手伝っていた昭和四十二年優しく話かけられたのが、先生との出会いだった。その後、寝屋川の小集句会に亡父亜鈍の要請で、選者として招き以来長年に亘り親身になってご指導頂いてきた。句会の後、麻雀の好きな先生と何時しか卓を囲むことが恒例となり、麻雀を通して遊びに興じながら的確な観察と洞察による判断力を教えられた。亡父亜鈍の追悼句会では、亜鈍の作品と人物像に迫る講演をして頂き、その録音テープと、私の結婚記念に贈られた先生揮毫の「惜しみなく愛は奪えと 曼珠沙華」は、私の宝として大切に保存している。

いま私は十八年前先生から贈られた第四句集『愛染』を前にし、そのあとがきで還暦を迎え三十余年の川柳生活を纏める決意をされた事、この年に最愛の思慕する母親を亡くした事を知った。川柳を通して薫風作品を形成し築かれた先生とは裏腹に今年六十歳を迎えた私は、その違いのあまりの大きさに愕然とした。その後の業績は最終出版となった『喜寿薫風』の略歴で明らかだが、川柳の社会的普及と、後進の育成にも幅広く力を注がれた。また作家藤沢桓夫や田辺聖子の著名人とも親交がありこのことから、先生の存在の大きさが測れる。ここまでの活躍の影に目に見えぬ家族の犠牲と支えがあったと想像されるが、その揺るぎない家族の絆に、人一倍氣遣われた先生のお人柄が偲ばれる。

先生の後半生は正に川柳一筋、片肺のあの瘦身のどこから凄まじいエネルギーがほとばしり出るのか、自身の寿命を悟られたのであろう。仕事を次々と後進に譲り、自己の全集を完結された。

告別式の最後の別れで先生の御尊顔を拝したが、生前の面影はなく別人に見え衝撃だった。燃え尽きていたからである。

(川柳塔社理事)



平成15年6月 白鳥町

いつぱいの思い出

川上 大輪

旅人も 月も やがては去る砂丘 薫風

凄いと思った。平山郁夫画伯のシルクロー
ドの絵画を見ているようだ、いやそれよりも

凄い、絵画は無言であるが、川柳は作者が直接語りかけてくる。人生を達観したこの句に出会った私は暫く呆然としていた。川柳を離れていた私に先生が贈ってくださった川柳句集『愛染』に所蔵されている句だ。

薫風先生との出会いは昭和四十六年、南御堂会館で行われた麻生路郎七回忌の本社句会だった。以後、先生との思い出はあまりにも多く、何を書いてもいいの、書いても書いても書き尽くせないほどである。

平成八年、久しぶりに本社句会に出席させていただいた時も、先生は「久司さんよう来てくれはりましたなあ、私は久司さんの方が呼び慣れたるけど、大輪さんやったなあ、一日も早く富子さんと一緒に同人に戻ってや」と温かく私たちを迎えて下さった。

先生は筆まめな方で、折にふれ長い長いお手紙をいただいていた。最近では富湖が亡くなった時、オール川柳で大賞を戴いた時、句集を出した時、その文面はいつも私を励まして下さる優しいお心遣いが溢れていた。そしてその末尾には必ず、富湖さんの分も一緒に川柳塔の将来をよろしくお願いします。と結ばれていた。

晩年、酸素ボンベをお供に各地の句会や大会を精力的に回っておられた先生のお姿、そ

して優しい先生の笑顔が、思い出と共にいつまでも私の心につかりと刻まれている。

わかやま吟社の緑良主幹から、携帯電話にメールで先生の訃報が届けられた時は一瞬目を疑った。もうお会い出来ない寂しさ、どうにもならない悔しさだけが込み上げてくる。いい思い出をたくさんありますがとうございまして。先生に会いたくなったら句集を開きま

す、どうか安らかにお休みください。

思い出というオアシスがある砂漠 大輪
〔川柳塔社理事〕

あこがれの人

乗原道夫

昭和50年11月、初めて川柳塔本社句会に出席したときのこと。席題「とほける」墨作「二郎選で、「とほけると素直に去っていく女」が入選して呼名したところ、前に座っておられた氏が振り返り、「うん」と軽く頷いて下さった。それだけでうれしかった。

昭和51年2月、大萬川柳大会で「男を売り出す朝は大きな欠伸する」の句が天に抜け、少し得意な気になっていたときのこと。「思

わぬときにビエロの笛が鳴る、という句。君の句やと思つてたら、川口弘生さんの句やっとなあ。あんな句、作らなあかん」

平成4年12月、野村太茂津主幹勇退記念句会のと、懇親会の席のこと。「何年も句会から遠ざかっていて、お誘いを受けて久しぶりに出席しました」と申し上げたところ、「忘れずに声をかけてくれるというところは、ありがたいことやなあ」

平成8年6月、第1回オール川柳作家賞準賞を受賞したときのこと。「もつと輝いてる句。檸檬みたいな句を見せてほしいなあ」

平成9年5月、第2回オール川柳発表句会で、迂闊にも著名作家の句とほとんど変わらぬ句を氏の選に出して、入選してしまった。神平狂虎氏が指摘して下さったので、氏にお願いして句を取り消してもらったが、少なからず落ちこんでいたときのこと。「睡蓮は万丈光の光源よ、という句。万丈光は自分の造語やと自信を持ってたんやけど、藤澤桓夫先生が、漢詩にあると教えて下さってなあ」氏は、折に触れ、さりげなく指針を示して下さるやさしい人だった。

先月号「川柳塔」の目次下の原稿を編集部に送ったのが、4月21日（木）。そして、24日（日）夜、板尾岳人氏から訃報が届く。6

月号の目次下で、「鎮魂の松杉桜桜よし」の句について書いたので読んで下さい、との葉書を書こうと思つていたところだった。

橘高薫風は、私にとってあこがれの川柳作家であり、それは今後も変わらないだろう。

〔川柳塔社理事〕

鎮魂

板尾岳人

四月二十四日夕、訃を聞く、言葉にならず空しく嗟嘆するばかり。

青葉の太木が幹太く根を張りながら折り挫かれたように逝かれた。先生のしずかな足音はもう聞こえません。錯覚のように思われてならない。あまりにも早く来たよさで淋しい、そして悲しい。先生の細やかな気配りがあつて、人間として温かく痛みのなかに身体をおける人でした。幕がすると下りて来るのを上眼で眺めながら、ささようなら、心からの涙を灌がねばなりません。

先生との出会いは近鉄八尾駅へ向かう途中の道で「岳人くんか、今日の君の句は良かったぞ」と。走馬灯のように頭の中でぐるぐ

ると想い出し、思いにふけつて三十五年ほど前のことです。その出会いによって僕は川柳塔に入れて頂き山へ登りながら、そして本社句会へ三十数年全出席を続けられたのです。ありがとうございます。

先生のお姿はその一つ一つの作品に永久に消えることなく、日と共にその輝きを増して行くに違いありません。

乱れ髪式部の世より恋は憂き

牛小屋に月光 美しき浪費

惜しみなく愛は奪えと 曼珠沙華

わが影のくの字に折れて長い塀

木杯へ男の月の花菖蒲（叙勲）

五十年花径遙かに香爐峰

長い間導かれた私達のこれまでの仕事も、これからの川柳も、先生の永遠の御影を荘厳する中に加わるには、力を合わせて川柳塔社としての道を守り、新しい時代が来てこの白道を踏む日へ前進したいと思えます。

これからの私達は、自信に満ちて自分の好きな川柳を掘り下げ、掘り下げして行かれた文学的態度を、いつまでも模範として、先生のとから進んでいくことを誓います。安らかにお眠りください。

（川柳塔社理事長）

橘高薫風略歴

（本名）

橘高 薫

（生年月日）

大正十五年七月十一日

（川柳歴）

川柳作句を始める

昭和30年 麻生路郎に師事

昭和32年 『川柳雑誌』編集に従事

昭和33年 『川柳雑誌』編集に従事

昭和34年 『川柳雑誌』編集に従事

昭和40年 川柳塔社創立・『川柳塔』発行委員

昭和45年 川柳塔社副主幹・副理事長に就任

平成2年 川柳塔社理事長に就任

平成6年 川柳塔社主幹に就任

平成12年 川柳塔社名誉主幹に就任

（選者歴）

昭和50年 キリスト教月刊誌『声』川柳

昭和55年 朝日新聞なにわ柳壇

昭和56年 山陽新聞柳壇

昭和56年 NHKラジオ川柳

昭和56年 西日本文字放送川柳教室

昭和60年 大阪都市協賛月刊誌『大阪人』川柳

平成6年 大阪府警察本部月刊誌『なにわ』川柳

平成6年 南濃鉄情報誌『サウスウエーブ』川柳

（講師歴）

昭和55年 朝日カルチャーセンター

昭和56年 NHK文化センター大阪

昭和56年 NHK学園川柳入門

昭和56年 毎日文化センター

昭和56年 産経学園梅田第一

平成元年 豊中身障者福祉センターひまわり

平成9年 NHKりんくう文化教室

平成12年 よみうり松坂屋大阪文化センター

（賞）

昭和55年5月 第十二回三條東洋樹賞受賞

平成13年4月 春の叙勲木杯一組台付賜与さる

（川柳関係著作）

昭和37年9月 句集「有情」発刊

昭和40年7月 「檸檬」発刊

昭和48年11月 「肉眼」発刊

昭和60年8月 「愛染」発刊

平成7年11月 「古稀薫風」発刊

昭和54年7月 著書「麻生路郎」発刊

昭和58年7月 「なにわ川柳の一句」発刊

昭和60年7月 「川柳に見る大阪」発刊

平成11年3月 「師弟」発刊

平成13年9月 「橘高薫風川柳句集」発刊

平成14年3月 「橘高薫風川柳文集」発刊

平成15年7月 句集「喜寿薫風」発刊

橘高 薰風 50句

乱れ髮式部の世より恋は憂き
靴履いた頃から旅は墮落せり
労働歌 蟻が歌えば凄かろう
都会の夜 セロリは母の香に似たり
四面楚歌 故郷は豆の花の頃
湯槽出る男 海より出ることし
旅人も 月も やがては去る砂丘
檻の鶴 又 眼を閉ずるほかはなし
惜しみなく愛は奪えと 曼珠沙華
鳥一つ買うて暮らせば 涼しかろ
紫の椅子の愁いはわが愁い
霊柩車 辻を曲ってから 速し
妻よ子よ水の深さが臍を越す
灯を消せば彌勒女菩薩毛糸編む
栄光の日も一日は二十四時
恋人の膝は樽様のまるさかな
银杏散る風の祭りを見るごとし
生まれし時灯ありき死に行く時灯あらん
膝に手を置いて井上八千代かな
遠き人を北斗の杓で掬わんか
進む時計遅れる時計夫婦かな
降る雪に貧しきものが先ず隠れ
おとといと昨日と今日の虫の声
弱肉強食鱈皮の鞆持ち
勲章の欲しい七才七十才

恩師の死 その夜眠しとも眠し
草の芽が出たぞ おしっこさせながら
建国祭 寒の卵に血がまじり
一日の重さ軽さよ 日記帖
汝が祈りふかからしむと雪を給う
てんとう虫 ここにも小さい輪島塗
秋風に傷なきものはなかりけり
人の世や 嗚呼にはじまる広辞苑
胃半分 肺半分の湯呑かな
路郎の忌 立膝癖も師父ゆずり
少年の幾人いても毬一つ
恋人がいま肉眼に入り来る
睡蓮は万丈光の光源よ
こおろぎのように泣けたら涅槃かな
亡母の闇この世は雨が降っています
桐一葉猫も座禅の向うむき
生きているうちは明かせぬ吾亦紅
お元日老醜枯淡紙一重
北国になお北のあり流水よ
富士山の藍に一礼してしまふ
鱗雲一枚こぼれ亡母の窓
秋ふたりまるで果物静物画
しみじみと妻の長所がわが短所
木杯へ男の月の花菖蒲
五十年花径遙かに香爐峰

弔吟——薰風名誉主幹に捧げる——

(順不同)

一生を気ままに暮し徳な人

うそまことさる御方の御曹司

瘦身のあの日を偲ぶ風みどり

薫風や俊平やとて春霞

わたくしを終始叱つてくれました

従いてゆくわけにはいかぬ影法師

青葉風貴公子然と若かりし

巨星地に川柳界に衝撃が

お土産と津軽小巾を賜わりぬ

風薫る塔の偉丈夫安らかに

百花繚乱恩師黄泉へお供して

柄杓では届かぬ旅に出で給う

慈愛なる星となられて眼差しを

教室の檸檬の風を忘れない

香しい風いつまでも塔の上

鮮やかに生き死してなお風薫る

やわらかなお声の披講耳にあり

お浄土で笛と太鼓はもの語り

北の窓開けて浪花の空へ散り

忘れ得ぬ師の選胸に道目指す

直原 玉青

岩井 三窓

中田 たつお

辻 晩穂

河内 天笑

板尾 岳人

青戸 田鶴

赤川 菊野

秋元 てる

浅田 隆樹

浅沼 正雄

浅野 房子

安食 友子

安達 忠央

安土 理恵

穴吹 尚士

有沢 せつ子

安藤 寿美子

安平 次弘道

井伊 東吉

足跡を辿ればいつも風薫る

ご主人さんでつかの言葉忘れない

巨星墜つ教えは長く尾を曳いて

句の品位常に高めと教えられ

面影を偲べば遠い北斗星

ありし日のお姿いまもまなうらに

二つ星未来を繋ぐ雲の峯

尊師逝けり五月の風を待たずして

永しえに川柳の神なり給う

童心へアイスキャンデー食べる師よ

風薫る春の名残りを散り急ぎ

遺された句集煌煌たる書棚

川柳と出あい楽しみ師に感謝

辞書も繰り襟も正して師の句集

薫る風川柳界に名を残す

椎かおる師のやさしさときびしさと

句にいのち心おだやか風薫る

脱兎の如く去かれては哀しけり

雲間より照らし続ける塔の燈

杖はしら頼む薫風今やなし

池 森子

池内 かおり

池上 清治

池田 善守

石倉 美佐子

石谷 美恵子

石田 清泉

石堂 潤子

石原 淑子

石森 利昭

伊勢 八重子

居谷 真理子

板山 まみ子

市丸 晴翠

伊藤 あや子

伊藤 玲子

稲川 恵勇

稲葉 冬葉

井上 勝規

井上 桂作

ご薫陶受けし果報を嘔み締め
 大樹の実授け賜うて師は逝かれ
 病床のやさしい笑顔胸を突く
 選評の温もりとても嬉しくて
 極楽に憩うお姿風に聞く
 橋の高き枝から薫る風
 師の旅路つづき咲く道なみだ雨
 風薫る優しい先生ありがとう
 路郎師の話になれば優しい目
 蓮花咲く午後の極楽師の慈顔
 唐津までよう見えられたありがとう
 路郎師と川柳談義今ごろは
 ひょうひょうと師の優しさよ雲の峰
 憧れの恩師旅立無念です
 星光り召された主幹空仰ぐ
 薫風につつまれ永遠にうたう君
 句ごろを熱く語った師を偲ぶ
 塔の火がまた一つ消え星となる
 風ひかる塔の薫りを伴って
 急がれて黄泉路の桜見に行かれ
 羅生門古希の笑顔と酌み交す
 大偉なる師を喪いし川柳塔
 広辞苑「ん」できつちり終らせる
 薫風師の足跡仰ぐ初夏の空
 ベッドでの握手しつかり覚えてる

井上 松煙
 井上 照子
 井上 信子
 井上 森生
 指宿千枝子
 井丸 昌紀
 猪森スミエ
 岩切 康子
 岩佐ダン吉
 岩崎 公誠
 岩崎 實
 巖田かず枝
 岩本 笑子
 岩本 雅代
 岩本 美智子
 岩本美智子
 岩屋 美明
 上田 俊路
 上田 宣子
 植村 喜代
 牛尾 緑良
 白井 信子
 江口 度
 榎本 吐来
 榎本日の出

偉大なる師さくらと共に御浄土に
 寂寥を埋めようもなし竹の秋
 春嵐この世へ偈めく句を給い
 曾根駅で今日も笑顔の師を偲ぶ
 風薫る大先生の微笑偲ぶ
 若き日の群馬をたずね翁は逝く
 十七字抱いてゆきませ蓮の句座
 師を偲ぶ檸檬の花の真つ盛り
 教室に今も漂う師の薫り
 川柳の真髓伝え師の召さる
 温顔に触れた三歳の有難し
 木杯の酌む主も逝き風薫る
 師の話し新茶の急須入れ替える
 やまいだれきつぱり別れ北斗星
 立て膝の影残しまま師は浄土
 帰命信士母の背中に戻りませ
 温厚な師の面影を偲ぶ日日
 巨星墜つなにわの空に尾を曳いて
 旅立ちに爽やかな風置き給う
 柳壇の中興の祖逝くや風薫る
 酸素引ききたる師の面影はなれない
 みちおしえ笑顔おおらか薫る風
 金字塔打ち立て恩師逝かれけり
 別れても来世で会える望み持ち
 ご尊顔拝すことなく巨星墜つ

榎本 舞夢
 榎原 公子
 海老池 洋
 江見 見清
 撰 喜子
 遠藤しげる
 大石あすなろ
 大内 朝子
 大川 桃花
 大久保伸子
 大崎 侑子
 太田 昭
 太田とし子
 太田扶美代
 大谷 篤子
 大峠 可動
 大橋 鐘造
 大橋 政良
 岡 あきら
 岡井やすお
 緒方美津子
 岡本 花匠
 岡本 久峰
 小栢こずえ
 小川てるみ

薫風師五月待たず星になり

小川 良吉

巨星落ち師を恋う塔に雨がふる

奥谷 彩子

うすむらさきの薫り遺して逝き給う

奥田みつ子

添削の恩師天国安らかに

奥村 五月

身に余る雅号報恩出来ぬまま

小倉 藍

夢語る一灯があり窓がある

小野 克枝

無念です大阪の風遠くなる

小野句多留

飄飄と青嵐に乗り旅立ちぬ

柿花 和夫

レモン買う度に師の句を思い出す

籠島 恵子

若葉揺れ瘦身の師の甦る

加島 由一

ルート選二次選ビタリ嬉しくて

柏井日出子

散り急ぐ花にさそわれ弥陀の国

鍛原 千里

天国で仏にさせる膝枕

片山 忠

薫風を惜しむ柳の露しとど

加藤 基

きみ逝きて檸檬の黄さえなつかしき

門谷たず子

紫の風師と共に藤の花

門脇 晶子

銀河仰ぐ師は紺色のスーツなり

神夏磯典子

薫る風あの温もりを追うひよこ

亀井 円女

薫風師も一度教えを乞いたくて

亀井 皎月

師の恵み想い出尽さぬ碧い壺

亀岡 哲子

貰いて師は睡蓮と水の旅

鴨谷留美子

師が母をいたわる隠岐の波しぶき

河合 茂雄

天上に遊び給うか北斗の人と

河合ますみ

温顔を思い浮かべて読む檸檬

河井 庸佑

思い出がみんな涙になる訃報

川上 大輪

一生涯師の手の温さ忘れない

川崎ひかり

名吟を残し浄土へ逝き給う

川島諷云児

母上とはなしが弾む雲の峰

河内 月子

師の遺徳今日もまたたく北斗星

河津 正治

弥陀の膝弥生の花を供にして

川原 章久

塔の星落ちて寂しく天仰ぐ

神原 文

檸檬の膝のロマンを抱き旅立たれ

川本 畔

先達の偉業を永遠に語り継ぐ

菊地 政勝

年一のスクーリングに急ぐ地下

岸田知香子

おん母子は浄土の国で会います

岸野あやめ

師へ恩を返せぬうちに旅立たれ

岸本 宏章

胸にしむ披講の声がもう聞けぬ

岸本 孝子

その内にお逢い出来ませす

北田 一笑

師 薫風高野の塔碑初句会

北野 哲男

天高く恩師掬いし北斗星

北村 賢子

早すぎたなど髭の禪師に迎えられ

吉川 寿美

白鳥に句碑も残して極楽へ

木村あきら

いつの日も和顔愛語の師でありし

木村貴代子

たちばなの薫り残して師は去られ

木村 初子

薫風に誘われ恩師お浄土へ

木村 春枝

風薫る卯月の天に師は召され

木村富美子

檸檬有情師のまなざしの深ければ

木本 朱夏

花の季に師のご逝去を聞くとは

清川 玲子

薫風師の話が今も耳底に

楠 昭子

雲上へ檸檬をもって逝かれてか

楠見 章子

惜しまれる花を散らして無情風
柳界に孤高の師の灯ともし継ぐ
橘の如く薫れよ永遠に
春四月三途の川を渡る薫風
目を閉じて師の来翰を胸に抱く
素晴らしい恩師の自慢限りなく
トルコ桔梗手向けて風に師を偲ぶ
春の雲一人の詩人道連れに
花追うて浄土の星となり給う
格調の高い詩残し遠き人
功德は永遠に輝く柳壇に
一筆の添削とわの道導
肉眼で檸檬を見つめ続けます
尽きる春北斗の星に誘われて
彼の世でも路郎先師と柳談義
風薫る悲しく繰ってる師の句集
川柳を駆け抜けられた師の魂
花吹雪不意に届いた一つの計
慈しみの笑顔のこして永久の旅
珠玉の句残しポトリと逝きたまう
霊柩車ゆっくり進め風薫る
淋しい夜は句集檸檬と眠ります
来雲の亡師囲んだ美崎の灯
いつまでも見守って欲し川柳塔
風薫る五月の天へ逝きし人

久谷まこと
國見 蘭香
国森 武子
久保 正剣
久保田千代
熊代 菜月
栗田 久子
黒川 紫香
黒田 茂代
黒田 能子
桑田ゆきの
桑名知華子
柴原 道夫
源田 啓生
源田八千代
小泉ひさ乃
小糸 昭子
小枝ふさゑ
国米きくゑ
古今堂蕉子
小島 笑司
小島 蘭幸
小白金房子
児玉 蛙
小玉 満江

津軽路に黄泉晴れて風薫る
追憶へ魂が泣き雨止まず
五百号見届け恩師雲の上
恋人のひざの枕で安らかに
生きていく心説かれる師の恩句
路郎師によりしく薫風さんも逝く
仰ぎ見る色鮮やかな流れ星
ペンおきてやすらひたまふ春の雲
師を悼むほろほろとなく山鳩よ
天国で川柳のはなししておられ
先生の句から教わる人間味
先生の句から御遺徳偲びます
いただいた月と砂丘に師の笑顔
後やさきなせに先生さきに逝く
早過ぎた計報に前後とり乱し
師を迎え天上塔杜意気揚がる
一昨年が最後ご一緒した写真
そよ風を舞わして黄泉の道すがら
み仏の句座にたちばな風薫る
ご功績偲び御冥福を祈る
柳界の巨星仰ぎて精進す
祭壇の遺影がほほえむありし日を
師の君も森で薫っていられよう
先生のひとことで出合った友あまた
句集文集並べ薫風師を偲ぶ

小寺 花峯
小西 雄々
小林 妻子
今 愁女
後藤志津香
近藤 秋星
近藤 正
近藤 豊子
近藤 佳子
齋藤さくら
齋藤 荔
佐伯 光枝
佐伯 やえ
酒井 一壺
坂上 高栄
坂上 淳司
榊原 秀子
坂本 晴美
桜井 千秀
櫻庭 順風
佐々木満作
佐野木みえ
澤田 千春
執行 稲子
軸丸 勝巳

追いすがる迷える羊を置き去りに
 師逝きて哀しくうける初夏の風
 葉桜の下で無常な風にのる
 天国へ召され給いし薫風さん
 巨星落つ大地に花をひらかせて
 彼の地へも川柳塔がきつと建つ
 新緑の大山で笑った偉大な師
 もしかして今より近い師となられ
 とき折りは開けてください雲の窓
 青森の空が恋しく雲が舞う
 面影がまだ其処此処に残ってる
 今はただ静かに黙祷捧げます
 川柳の小径孤高の風薫る
 諧謔の格調薫る北斗星
 天国で和気あいあいの名披露
 さよならのハンカチ濡れる北の蟻
 山峡の駅で別れてそれっきり
 風薫る温顔今もまなうらに
 薫風師仰ぎつづけた嶺だった
 八重ざくら絢爛の下逝き給う
 お浄土の句座賑やかに五月鯉
 先生の優しさだけが手に残り
 結跏趺坐ありし日のまま雲はるか
 星おちて暗夜の旅の一步ずつ
 花の季を何故に急かれる黄泉の旅

志田 千代
 篠原いつふみ
 島 ひかる
 清水 利武
 城 多喜
 正畑 半覚
 白根 ふみ
 神野千恵子
 杉澤 汀
 須郷 井蛙
 鈴木いさお
 須磨 活恵
 銭山 昌枝
 宗 水笑
 相馬 一花
 相馬 銀波
 蘭田 猿香
 園山多賀子
 田岡 九好
 高島 啓子
 高杉 千歩
 高瀬 霜石
 高田美代子
 高野 不二
 高橋 岳水

古稀喜寿薫風永遠の我が愛読書
 初投句薫る風から拾われる
 旅立ちへ香る檸檬の雫して
 春嵐 川柳の炬火ひとつ消し
 緑成す風に抱かれ巨匠逝く
 面影を胸に刻んで生きた日々
 春の駅酸素ボンベは置いたまま
 薫風師西への早い雲に乗り
 風薫る詩情悲しい北斗星
 永久に光る足跡残されて
 師の教え胸に刻んで歩みます
 ひたすらに温顔偲ぶ観世音
 酸素ボンベ連れて穿ちを説きたまう
 教室も思い出となり寂しかり
 昇りゆく風と柳絮の視野無限
 願わくは隈無くほしい薫風を
 師の影と檸檬のまるさ生きつづけ
 伝統の句格は永く揺るぎない
 立て膝の柳談枯れて唐津焼
 風薫る丘に師の影永遠の句碑
 哲学のころも脱ぎ捨て雲の峰
 温厚な師へ散り急ぐ花嵐
 木杯も初めは恋の一句から
 忘れまじ私の中の師の声を
 道極む旅立ち惜しむ人の波

高橋 宏臣
 瀧本きよし
 武本 碧
 田中 正坊
 田中 みね
 田辺 鹿太
 谷口 義
 玉井 豊太
 玉置 重人
 玉置 英子
 玉置 当代
 丹下美津子
 丹後屋 肇
 辻川 慶子
 土橋 房枝
 堤 楯代
 恒松 町紅
 坪井 孝一
 妻谷 重風
 津村志華子
 津守なぎさ
 津守 柳伸
 鶴田 遠野
 出口セツ子
 寺井 弘子

天高く聳える塔や風薫る	寺井 柳童	詩聖逝き給い万緑が雨に泣く	永田 俊子
先生の檸檬は永久に萎れない	寺川 弘一	博識の師を敬いつ涙そうそう	仲谷 弘子
薫風句集みやげに路郎のそばへ行き	天正 千梢	旅立ちの喜寿薫風へ花吹雪	中塚 礎石
ほろほろとただホロホロと啼くばかり	藤解 静風	逢えぬ師の人柄悲し虹と消え	中西 雅
熱血の一灯消えるまさかまさか	遠山 可住	仰ぎ見る北斗の星は冴え渡る	永浜加津子
陽の沈む彼方ただただ掌を合わす	時広 一路	今は亡き姿を偲ぶ桔梗寺	長浜 美籠
私淑する師は遠ざかり檸檬の実	徳田ひろこ	薫風師まだ客膳に春まつり	中原 汲香
天界へ北斗の杓で水進上	都倉 求芽	さくら咲き薫風の季に偲ぶひと	中原 諷人
本練れば笈となつて師のお声	徳山みつこ	三日月の勇氣ほめてた師を偲ぶ	中原みさ子
薫風を白磁の壺に詰めておく	土橋 螢	薫風を待たず瘦身花と逝く	中村 叡子
追憶の風は静かに弥陀になる	土橋 睦子	先生の握手は僕の糧でした	中山 雅城
大声で叫べば振り向く師の笑顔	富坂 志重	薫風さんしのび碑酒を撒く	成重 放任
宇宙詠み師の選受けし宝の句	富田 汎美	今頃は檸檬の君と逢つてはる	西内 朋月
還らない思い出むなし師をおくる	富田 蘭水	みか月の想いは尽きぬ声と笑み	西川 和子
添削の一字一句を糧として	富永 敏子	一際に輝やく星を師と仰ぐ	西口いわゑ
般若湯吞んで柳師は弥陀の膝	富山檳榔樹	花の径ぷつんと切れて以来闇	西出 楓楽
大いなる足跡いまもなつかしむ	富山ルイ子	国土無双お師匠様が浄土から	西村 哲夫
師の影を求め続けている正座	中井 アキ	巨星逝き柳界長く涙雨	西村 益子
やさしさとロマン残して天空へ	中井 ゆき	広辞苑傘寿待たずに閉じられる	西村りつえ
定めとはいえ無情なり初夏のこと	中居 善信	「あんさん」と手を振り風の奥へ消え	仁部 四郎
ゆるぎなき塔を刻んで逝き給う	中後 清史	智恩院 訪ねる旅も春かすみ	根岸 方子
古い傷話せる友の一人逝き	中上 敏和	薫る風残して去つた鶴一羽	野口 節子
再会の日を奪われし春の暮れ	中川 楓	師の御霊光となりて塔照らす	野口 忠
朗々と気高く橋桜と散る	中川 恵香	風薫る浄土はいつも花盛り	野坂 なみ
師の計報思い出尽きぬ走馬灯	中島 志洋	声消えても夢幻の世界へいざなわれ	野田 栄

もう見れぬ蘇州夜曲を踊る師よ

紫陽花の彩うつむいて師悼む

檸檬の師風薫るとき逝き給う

師の声を心に刻む花の闇

塔の上流れる雲へ薫る風

風薫る慟哭の塔花しきり

浄土から川柳講座聞こえ来る

薫風のやめばわが思惟やむ部分

盃を置いて北斗の師を憶い

卯月末なげにと早い流れ星

優しさの師の恩永久に消えぬまま

来迎の紫雲に座して師の笑顔

風薫る夕に貴高の巨星墜つ

塔の里薫風に詩萌えあがる

生かされてずっと一列目の桜

見守って下さい加速する「のぞみ」

詩人の星を見上ぐる涙拭い得ず

墨痕哀し砂丘を越えて浄土まで

合掌をすれば師の声師の笑顔

写真手に一人で偲ぶ通夜の酒

切ったかと言うて笑ったその昔

見上げてた師の面影が去来する

風薫る季節を待たず巨星墜つ

花散って師は西方へ旅立たる

八十の恋の噂を待ってたに

長谷川会美

長谷川春蘭

長谷川呂万

波多野五楽庵

羽田野洋介

羽津川公乃

馬場 利子

早川 棲世

早川 盛夫

林 昭三

林 瑞枝

林 力子

林 露枝

原 賢

原 章峰

播本 充子

春城 年代

春城武庫坊

板東 倫子

伴 洋子

平井 露芳

平尾 菜美

平田 実男

平野あずま

平松かすみ

咲き満ちてこぼるる花を掌に拝す

風薫る中鯉のほりとなり給う

薫風につつまれ密と散る桜

雪月花愛し薫風師永久の旅

星ひとつ遥かな天に輝ける

ああさすが跡を濁さず旅立たれ

木も草も花も盛りを逝き給う

ネクタイをきりりと締めた蒲柳の師

師は雲へ北斗の星へ桜散る

御浄土で永遠の眠りを安らかに

師を偲ぶ眼裏消えぬ北斗星

笛太鼓向かい合つてる天の窓

黄泉の旅惜しむさくらも散り急ぐ

仕合せな檸檬が香る部屋残る

み魂いま宙の句座へと赴かれ

会者定離銀河に還られ安らかに

薫風師の鬘魂昇る紺碧へ

遺影まで斜にかまえてる我が恩師

慈しみよ今ひと度の指定席

薫風に誘われていく師の旅路

頂いた色紙掲げてさようなら

師を思う橘の香の風に立ち

薫風師 句集で偲ぶ誌友吾

塔の風橘薫る永久に

叱られてかわいがられた果報者

備後三代子

福井 桂香

福士 慕情

福嶋智恵子

福田 登美

福田 満州

福本 英子

藤井 則彦

藤井 正雄

藤岡ヒデコ

藤田 泰子

船越 洋行

不破 仁緑

古川 奮水

古久保和子

古田 千華

古谷 節夫

坊農 柳弘

星野きらり

堀 正和

堀端 三男

堀畑 靖子

本田 律子

本間満津子

前 たもつ

賜りし色紙にしのお師の心
 目刺し焼くお姿浮かぶ黄泉の酒
 嗚呼恩師薫風に乗り天国へ
 薫風る季に木枯らしの中にいる
 黙禱へ師は飄飄と句座に在り
 美しい指の望みはアベマリア
 緑陰に師を偲びつつ北陸路
 名のごとく薫風る季に身罷る師
 御目文字が叶わぬままに薫風師
 あちらの旅まだまだ先生早かつた
 むなし世の桜と共に流星と
 安らかに菜の花道をありがとう
 斃而後已薫風さんが星になる
 切つてもきれぬえにしは深い海の彩
 瘦身の気品さながら天の星
 檸檬の香天に届けと東風を呼ぶ
 楽土でも主幹であれと折るのみ
 動脈が切れたる思い雨しとど
 通り抜け終えて御霊は極楽へ
 人の世の「ん」に頻伽の鳥唄う
 薫風先生のご冥福を只々祈る
 安らかな師の旅祈り合掌す
 光彩をひときわ放つ師の星よ
 長いお付き合い有難うさん薫風さん
 ただひとつ薫風選の句あたたためる

前田 昭子
 前田 ゆい
 牧野 秀香
 牧野 芳光
 牧野 富喜子
 増井ヨシ枝
 増田 紗弓
 榎本 宏子
 俣野登志子
 町田 達子
 松尾柳右子
 松尾 和香
 松下比ろ志
 松原 寿子
 松本よしえ
 丸山 孔一
 三浦 きぬ
 三浦千津子
 水谷 正子
 水野 黒兎
 光井 玲子
 南原 正和
 宮尾みのり
 宮口 笛生
 三宅 満子

せめてもは安らげくあれ俱会一処
 レモンの膝残したままのお旅立ち
 薫風師追つて静かに桜散る
 温顔で北斗の杓へ旅立たれ
 川柳の舟にゆられて光る星
 そよ風に花散るごとし散るごとし
 人の世は嗚呼儂きや師は逝けり
 ゆつたりと雲は流れて師は彼方
 宝鐸草ゆれて薫風師を偲ぶ
 柳界の巨星墜つとやああ無常
 人柄に惚れて私も句を作る
 貴公子の笑顔を胸に貼っておく
 みまかりし師の黄泉路旅一灯を奉ぐ
 浪華の地風さわやかに柳道
 路郎師に北斗の杓で掬われる
 一筋のみち従容と逝き給う
 風かおる日本にでかい穴が空く
 風薫るま白き花の香を残し
 胸のバラ落ちて惜しみてレモン嘔む
 五月晴れ薫風さんの吟が舞う
 悲しさにレモンの膝も泣きました
 散る花のあと追うごとく師は逝かれ
 柳広め昭和の巨匠そつと逝く
 稜線を歪めて涙雨が降る
 花橘の香りの中に逝き給う

三宅 保州
 宮崎シマ子
 宮崎ヒサ子
 宮本かりん
 宮脇 道子
 三好 専平
 村上 玄也
 村上 直樹
 村木 信子
 村中 悦男
 毛利 幸
 最上 和枝
 持田多輝子
 本吉 宗光
 初山 隆盛
 森 茜
 森 茂美
 森 美智代
 森下 愛論
 盛田 夢路
 森本 弘風
 森本 節子
 森元ふみよ
 森山 盛桜
 八木 千代

ああ不滅膝は檸檬のまるさかな
 病床の強い握手が手に残り
 西行と同じ四月の花の下
 その道の主幹霊に掌を合わす
 薫風師あの世で閻魔と初句会
 満目百里師との歌声夢となる
 句を読めば師の人柄が偲ばれる
 深みどり惜しいお方が還られる
 木杯の遥かな旅へ毅然たり
 極楽で川柳大師薫風さん
 檸檬の香はあてなる風となりて逝く
 柳緑花紅師は永遠の旅に立つ
 御台場に恩師と二人朧月
 思いきり吸ってください青葉風
 あんさんと呼んで下さいもう一度
 名を残し五月の風になって逝く
 飽かず見る朱をいただきし句のはがき
 道しるべ句にちりばめて旅立たれ
 風薫る浄土の句座は賑やかに
 黄泉の国 名声博す師の穿ち
 いっしんに道遂げ飄とゆかれけり
 急かるるや路郎師の待つ雲の峰
 巨星落つ嗚呼薫風師はもう居ない
 あの世から見てる恩師へ一行詩

矢倉 五月
 安田 忠子
 安永 春
 安本 晃授
 矢谷富士野
 八田 敏
 矢野 良一
 山内 房子
 山岡富美子
 山川日出子
 やまぐち珠美
 山口三千子
 山口 光久
 山口 美穂
 山崎 君子
 山下 節子
 山田 耕治
 山田 葉子
 山門 タミ
 山中 康子
 山本 蛙城
 山本 希久子
 山本 三郎
 山本 半銭

師は遠く風薫る中逝かれたり
 柔和さの先生お顔永久拝む
 木霊してまだ花どきと風慕う
 薫風師一番星に逝き給う
 自分史に師の温顔が永久となり
 風師凜然 葉桜の下発ち給う
 ほろくそに叱られたのを忘れません
 やさしさを残し旅路を逝き給う
 嗚呼柳師夫婦で悼む在りし日々
 花畑八十の恋なさいませ
 薫風を受けて拙い芽も育つ
 午前二時と師からの便にときめいて
 風薫り雲悠悠うと天をいく
 遠くから師の恩偲ぶ風緑
 吟社超え黄泉で薫風名をはせる
 目をつむればやさしい師が笑み給う
 大御所を亡くしてからの風寒い
 アカシヤの雨ふと止んで師は旅立ちぬ
 天国へ薫風さんが拉致をされ
 永遠に塔の真上に在る巨星
 佳句数多遺し給いし師を悼む
 薫風に乗って天女と笑み給う
 むらさきの情熱抱いて逝き給う
 風薫る恩師は白い鳩になる

山本 宏至
 山本 益子
 山本 玲子
 山本 義子
 山本 珠子
 横山 巖
 吉岡 修
 吉岡 きみえ
 吉川 涉
 吉田 あずき
 吉田喜代子
 吉田孔美子
 吉村 一風
 吉村 幸
 吉村 雅文
 米澤 俣子
 米田 幸子
 米田 恭昌
 両川 洋々
 録沢 風花
 若松 雅枝
 渡辺 富子
 渡部さと美
 和田つづや

愛染帖

波多野五楽庵選

弘前市 齊藤 劬

兄の忌よ兄の匂いの木の芽和え

いたわつてあげよう さくら散るのです

和歌山市 木本 朱夏

噴水は壊れたままに春が逝く

無人駅から乗ってきたのは風だった

鳥取市 録沢 風花

おしゃべりの雲雀に通訳がほしい

トンネルに入って鬱がなおらない

尼崎市 小池 幸子

年齢重ね恥も重ねて生きてます

表裏ないのも何かもの足りぬ

弘前市 高橋 岳水

どの石も祈り崩さぬ恐山

人並みという物差しが見当らぬ

弘前市 相馬 銀波

花冷えの野宴に義理の靴を脱ぐ

後悔を綴ると狭くなる紙幅

富田林市 池 森子

鳩尾に響いた真つ新なりズム

明日からは自然へ還る旅支度

尼崎市 春城武庫坊

様々な過去を抱いてる座り肝臓

久し振り謹啓と書く使りする

尼崎市 長浜 美籠

逢うて別れてアブサンと揺れている

傷痕にしむ三線のもの哀し

西宮市 牧淵富喜子

古里を身の深層へしまいこむ

ゆつくりと頷き合つて黄昏る

大阪市 神夏磯典子

標的にされても蟹は横へ逃げ

裏面分かつてからは転はない

海南市 谷口 義男

実印の重さと比較して決める

筒抜けのように忘れる老いの耳

今治市 塩路よしみ

時間よ止まれ魁夷の森で眠りたい

ぬめりつつ他人を切り落とす母乳

東京都 やまぐち珠美

難しい話輪ゴムで留めてある

連れ添った夢うたかたの五十年

吹田市 岩屋 美明

来ぬひとのために沸いているポットの湯

まつり馬鹿言われ得意になるネプタ

唐津市 坂本 蜂朗

不甲斐なや磁石にすがりつく砂鉄

生きるためちよつびり欲は残しごと

岡山市 井上柳五郎

ふりむけば思い乱れる修羅の坂

群れを出て見ると無力な影法師

大阪府 初山 隆盛

だまされてあげよう霧が深くなる

夕闇の長さ楽しむまわり道

大阪府 小谷 集一

花畑死ぬのはずつとずつと先

モナリザの絵の正面はどこだろう

鳥取市 岸本 宏章

呑まされた煮え湯で自分取り戻す

過去形でばかり話していませんか

和歌山県 桜井 千秀

本家の蔵はレトロの風の吹き溜り

惜別の余韻が残る筆のあと

和歌山市 米田 恭昌

逢うてきた十指にひとつ水たまり

地球儀をクルクル核を考える

富田林市 古田 千華

モノクロの桜咲くころ七回忌

豊中市 水野 黒兎

大阪府 板東 倫子

豊中市 櫻谷 郁子
いつか来た道 亡夫の遺影と歩きます
寝屋川市 森 茜

告白にほどよくドアが開いている
竹原市 正畑 半覚

今日もまた目次通りに生きている
松江市 三島 崧丘

だいこんの白さに邪念などはない
和泉市 西岡 洛酔

足踏みの喜寿人並みという苦楽
大阪市 川原 章久

薄墨の便り次第に増えてきた
砂川市 大橋 政良

冷えきった手で返信を書いている
三田市 堀 正和

本音など素面で言える訳がない
八王子市 播本 充子

各々に哲学があり句詠点
大和郡山市 坊農 柳弘

生きたくて虚飾の地図を塗り替える
西宮市 西口いわゑ

ばら開く予感が当りますように
美作市 山本 玉恵

沸点で今仕残しの二つ三つ
鳥取県 竹信 照彦

自分史を書いて誇れることもなし
和歌山市 柏原 夕胡

話しかけないで下さい思案中
大阪市 小泉ひさ乃

たそがれの森で明日の色とがす

唐津市 井上 勝視
陶酔に雑音すでに消えている
熊本県 高野 宵草

駅の前見て来ただけの旅話
鳥取県 石谷美恵子

裁かれています尻尾を振り過ぎて
弘前市 宮崎ヒサ子

風邪は意地悪春の唇を狂わせる
大阪市 前 たもつ

七十年ポーズはいつも前を向き
富田林市 片岡智恵子

メルヘンを詰めて風船空の隅
枚方市 丹後屋 肇

面白い夢に毛布がしがみつくと
黒石市 相馬 一花

最後には夫が折れてつつがなし
鳥取市 美田 旋風

ひよっとした出会いで人生決めていた
羽曳野市 森下 一知

喉元の小さな棘の仲違い
藤井寺市 若松 雅枝

夏帽子人の心が透けて見え
羽曳野市 徳山みつこ

いつも突然にこの世の落とし穴
西宮市 坪井 孝一

助けばかり呼んでる僕の歩数計
唐津市 樋口 輝夫

年一度弱音を吐きに里帰り
唐津市 仁部 四郎

学校に刺股を置く法ができ

八尾市 生嶋ますみ
炊飯器 主婦より先に起きている
尼崎市 春城 年代

豆殻を干せば田舎の空恋し
和歌山市 福本 英子

洋花の名を覚えても覚えても
河内長野市 坂上 淳司

配色は決まった余白のカンパス
米子市 白根 ふみ

耐えること赦すことから立ち上る
姫路市 古川 奮水

弓一本弦ひびかせる自負がある
滋賀県 中 宗明

拝謁に亡妻の写真を胸に秘め
箕面市 出口セツ子

悲しみも苦勞も生きる糧にする
藤井寺市 高田美代子

生涯の伴侶と思うからもある
羽曳野市 吉川 寿美

とても優しい言葉外濠埋めに来る
堺市 奥 時雄

言い切つてしまひ自ら退路断つ
西宮市 井上 松煙

リストラをされて晩節諦める
出雲市 園山多賀子

行間の呪文が解けず二兎を追う
池田市 北出 北朗

十年の神戸へ未だ石を噛む
堺市 矢倉 五月

真っ白いハンカチ持って泣きに行く

八尾市 井尻 民
その代りわたしに拍手くださいな

藤井寺市 鴨谷瑞美子
真つ白に咲けば譲ってくれますか

大洲市 中居 善信
逢いにゆく時は口笛など吹いて

倉敷市 撰 喜子
足跡が遠ざかる過疎また一人

八尾市 吉村 一風
ときめきのほしくて今日も桜狩り

生駒市 飛水ふりこ
冷え冷えと言葉尻から凍ります

堺市 志田 千代
真つ白い紙には森の精がいる

藤井寺市 中島 志洋
台本のない人生のメロドラマ

高槻市 瀧本まよし
隠し球いっぱい持って待機中

鳥取市 福田 登美
老春の背伸び静かに石を積む

鳥取市 夏目 一粹
ふと妙なことが気になり夜が明ける

東かがわ市 木村あきら
月給をみんなさらってゆく内助

米子市 光井 玲子
この道をひたすら生きただけのこと

鳥取市 田村 邦昭
遅れてもいい晩成の夢がある

鳥取市 徳田ひろこ
頂上はもうすぐなのに動けない

倉吉市 米田 幸子
親切な話に乗ったおとし穴

真屋川市 籠島 恵子
四季いろいろこころ模様があるように

米子市 青戸 田鶴
さわやかな顔してこわい事を言う

八尾市 村上ミツ子
試してるつもりしつかり試される

美祿市 安平次弘道
言論の自由 修正液が減り

枚方市 海老池 洋
雄弁でないが心を打つ祝辞

大阪市 松尾柳右子
たつぷりと朝食とつた軽い足

和泉市 横山 捷也
たんぽぽと軽いうわさが風にのる

鳥取市 土橋 睦子
変らないサイズで同じ服ばかり

和歌山市 楠見 章子
ちっぽけな痲りとかした一通話

大洲市 花岡 順子
優しさを無くし茶碗を割りました

泉佐野市 備後三代子
母の日もいつもと同じ厨事

大和高田市 鍛原 千里
繕うて労りおうて我が余生

富田林市 大橋 鐘造
親しみを込めた電話に騙される

倉敷市 小野 克枝
平凡でよし風の日は風に向く

兵庫県 中上千代子
充電の旅でショートをしてしまふ

八尾市 西川 義明
向き合つて話せばすぐに解けるのに

岸和田市 雪本 珠子
へそくりも同居しているキーケース

高知市 小川てるみ
相槌が欲しくて置いた一呼吸

奈良市 乾 春雄
説教より正座の痺れ効いてくる

橿原市 安土 理恵
別天地と遊ぶ母です合歡の花

池田市 栗田 久子
けつきよくは元の二人となる一人

松原市 玉置 重人
疑うてかかる哀しくなる世相

大阪市 伏見 雅明
雑巾の絞り方にも亡母の癖

鳥取市 近藤 秋星
仕事着に着替え仕事の顔になる

東大阪市 中岡 妙
夕間暮れいつか私も子に還る

香芝市 大内 朝子
不死鳥のごときを生きて来てた師よ

奈良県 渡辺 富子
スタートの横一線にあるやる気

武蔵野市 亀井 円女
ワンクツション置いて嫁とはまるい仲

東京都 岸野あやめ
車椅子 押す手も老いる介護です

誹風柳多留二四篇研究 80

山田昭夫・伊吹和男
大野秀二・小栗清吾
橋本秀信・粕谷長生

清 博美・佐藤要人

630 名月の御たづねものほうつくしひ 如雀

清 この句よく分ならず。故事ありや。

「名月の御たづねもの」は、月の紋日の遊女ではなからうか。名月の紋日に訪ねて行く女は美しい遊女との意。

もつて廻った言い方をした句としておく。
小栗 小督の句と思う。八月十五日、仲秋の名月の夜に、源仲国がたずねていくのは、美しい小督局。

橋本 同右。「平家物語」巻六、高倉院の命を受けた仲国は、「仲国、寮の御馬賜つて、名月に鞭をあげ、そことも知らずあこがれ行く」と嵯峨をめざす。以下名文のところ。

大野 同、謡曲「小督」による句。

佐藤 同。

清 いやはや、それだけの句でした。

631 じたらくにどやくにげる都落 帰潮

清 「じたらく」は自堕落でだらしないうこと
或いは規律が厳しくない、という程の意。

句は平家の都落ち。奢る平家二十年後の結末。栄華を極めた平家も都落ちの時は、あたふたとだらしないう状態で遁走したというのであろう。

佐藤 賛。

632 からかさの内て庄屋ハ拝見し 百菊

清 町人能・町人能については、既に周知の

ことなので詳細は省略する。

この町人能では、午前中に「道成寺」が演じられる。この演題との因果関係はともかくとして、午前中は晴れていても、午後には必ず雨が降るといふ。そこで唐傘を一本宛与えられる奇風が生まれた。

句は、雨が降って来たので、庄屋が傘を差してお能を拝見しているというのだが、「からかさの内」は実際の情景ではなく、傘を与えられることに対する比喩と考えればよいのではないかと思ふ。

人もさすなら我もさす有かたさ 二〇二
雨に傘さす結構な切落し 八七〇

佐藤 賛。

633 大白月をつらぬいて二度おこり 雨譚

清 「大白」について、「川柳辞彙」は①金星の異称。太陽の次に位する星で、他の諸星よりは赤く輝くので明星の名がある」と説明して、主題句を引用しているが、これでは大白をなぜ八月とするのか、意不明である。

本句での「大白」は、「④白いこと、白いものをさすという」（日国）の意で、大白月は八朔に白無垢を着る風習に掛けて大白月と洒落たのではなからうか。

一句は、八月の八朔と十五夜の二つの紋目に登楼し大散財を繰返した、というのである。

「月をつらぬいて」は文句取とも考えられるが、それにしても雨譚の句は嫌らしい。

橋本 賛。大白は秋の季語である。

佐藤 賛。

634 嶋原ハ名哥のはつとしれる所

和国

清 京都の嶋原遊廓は場所柄公家がよく遊びに来る。従つてその話題も和歌などの事が多く、名歌が詠まれたりするとたちまち評判になるというのであろう。

嶋原の君ハならわぬ哥をよみ

宝九満

佐藤 賛。

635 三会目とんとおやまのごとく也

文集

清 「おやまのごとく」は、その仕草が大仰なことをいうのであろう。

三会目は、客が本来の目的を遂げる夜、遊女も心得ていて、身振り仕草の演出効果で、客の気持ちこそそののである。

三会めから人からがくつとおち 二〇〇
三会目どつちを向いていんしやうね

天五亀?

小栗 「おやま」は「遊女、娼妓の異称。上方で用いる」(「日国」)の意ではなからうか。

江戸(就中、吉原)の遊女が、意地と張りを通すのに、上方の「おやま」は唯唯諾諾と客の意にそつてしまふ存在であると、江戸っ子は誇つていたのだらうと思う。そこで、そんな江戸の遊女も三会目になつて、大サーピスするのを、「とんとおやまのごとく」と表現したのだと思う。例句もそんなニュアンスだらう。

薄雲ハとんとおやまの如く也 二二乙
橋本 同右。薄雲は、意地を張り通した高尾に対し、靡いたので評判悪し。次の例句でも判る。

薄雲は義理にもなびく所コ無し 三三三
残念と薄雲張りへ疵を付け 三三三
小栗・橋本説に賛。

佐藤 小栗・橋本説に賛。

636 帆柱の木やりを殿ハはがゆがり

窓梅

清 船の帆柱に登つての木遣、恐る恐る唄うから一つ迫方に欠け、それを聞いている殿様がはがゆがつているというのである。しかし、これではどうも面白くない。ここは一つ、破礼句とつて、殿様お好みの茶臼に及んだが、上になつた奥様やお妾が、馴れぬこと

とて気遣りがいまいち、殿様下で齒がゆい思い、というのでは如何。

山田 「狸の木遣り」で、床下手を齒がゆがつているのではないか。

伊吹 破礼句と思うが状況わからず。

帆柱で一本つきの木遣り声

七五七

佐藤 賛。

637 蚊にくわれくほたるでよんで居る 帰潮

清 「よんで居る」は、呼んで居る・読んで居るのどちらか。

読んで居るとすれば、車胤螢雪の故事となり、呼んで居るとすれば、こちらはぐつと色つぱく、若い男が螢で合図して娘を招いている情景となる。

小栗 「螢雪」の方をとりたい。ガチガチのまじめ人間が「蚊にくわれく」する卑俗化が眼目の句。

橋本 同。螢雪の功もさぞかし蚊にくわれただらうとの穿ち。

山田 柳多留四七篇では、

蚊に喰われながら螢で読んで居る 四七七
として「読」を当てている。当然、螢雪の句となる。

佐藤 同。

首香のむ

政岡日枝子選

師を偲ぶ五月の西日溶けて行く
さらさらと言葉の往き来する初夏に
下り坂肩の張るものから捨てて
花疲れ家の牡丹に癒される
秒針にさらえないと悟るなり
体調に合わせ予約のない旅路
薫風にふわり命をさらわれる
サンローラン初夏のおしゃれを着て遊ぶ
どの仮面にしよう午後のコンパクト
群れの目立たぬように呼吸する
木洩れ陽のやさしさ父も母もいた
何かの時は大風呂敷にみな包む
木登りができたら鳥と話したい
ここだけのはなしは花が散るように
もの憂げなポプリと秘密わけ合つて
春の森行けるとこまで行ってみる
桜吹雪に誘われて師は天国へ
花吹雪あれは亡母さんかも知れぬ
少々の悪事霞をかけておく

西宮市	牧測富喜子
鳥取市	徳田ひろこ
寝屋川市	籠島 恵子
米子市	白根 ふみ
西宮市	西口いわゑ
富田林市	片岡智恵子
香芝市	大内 朝子
米子市	野坂 なみ
富田林市	中井 アキ
米子市	中井 ゆき
西宮市	門谷たす子
米子市	青戸 田鶴
和歌山市	古久保和子
尼崎市	春城 年代
尼崎市	長浜 美籠
藤井寺市	太田扶美代
豊中市	櫻谷 郁子
大阪府	米澤 俣子
鳥取市	吉田 弘子

ロマンスのひとつ二つは欲しかった
胸底に鳴らぬ土鈴を抱いている
マンネリの帽子に埃降りつもる
私からわたしに送るゆうパック
反対をするひとがいてうまくいく
トリビアの泉へへえーを連発し
A型と知ってA型らしく生き
妻の座が何度も揺れて共白髪
神様をバトロンにして立ち上がる
空念仏聞いている耳も馬耳東風
締切日近づくまではのんびりと
無理をさせられていたのだ時刻表
五月晴れ歎呼して咲く花水木
ひきだしに子等の名札が眠つてる
柔らかい刺が未だに抜けきらず
一両目の電車 恐わごわ五月晴れ
るす電でよかつた迷つていた電話
子を産まぬ男が寄つて育児論
頷いてやがて陽気に散る桜
粗大ゴミ今更どこへ行きましょう
孫の運転初めてのつた安堵感
かぐや姫が住んでいそうな竹の子だ
振り向けばだーれもない日暮れ道
楽な方 楽な方へと行くリズム
売り言葉買おう 一口水を飲み

東京都	岸野あやめ
羽曳野市	吉川 寿美
米子市	林 瑞枝
鳥取市	福西 茶子
八尾市	村上ミツ子
八尾市	高杉 千歩
橿原市	居谷真理子
大阪市	三浦千津子
八尾市	宮崎シマ子
大阪市	古今堂蕉子
和歌山市	福本 英子
羽曳野市	徳山みつこ
富田林市	古田 千華
鳥取県	石谷美恵子
八尾市	生嶋ますみ
寝屋川市	太田とし子
大和高田市	鍛原 千里
東かがわ市	川崎ひかり
和歌山市	武本 碧
東京都	清原 悦子
鳥取県	佐伯 やえ
和歌山市	岩本美智子
和歌山市	桜井 千秀
神戸市	田中 章子
豊中市	安藤寿美子

ちくはくな会話通じる二人膳

生きてゆくアクセントです花巡り

鉄板で踊り最後を飾るエビ

六道の辻から道を間違えた

いつまでも輝く夢をてんこもり

笑顔の人に握手だけでもありがたう

ごほうびデー決めていち日ゴロ寝する

身構えた朝には風が軟らかい

冗談が上手になって嫌われる

逢うたびに眺め変わっていく怖さ

スランプに私の知恵も間の中

川の藻は夏には夏の顔で揺れ

本読まぬ青春だった口惜しいね

行列の目玉は知らぬとほほのほ

ストレスか私のハート後向き

川柳は私の知的好奇心

柏餅むかしの味にゆきつかず

太陽を布団にふわり閉じこめる

曲り角此処で暫く待つことに

座っているだけでは知恵は浮かばない

成る程と肩が下がった軽い背な

突然のまさかの翼にはめられる

珊瑚婚やつと来た道またも坂

気紛れなバスの時間が振り回す

母のように唄ってみた腕まくり

東大阪市 笠井 欣子

奈良県 渡辺 富子

大阪市 神夏磯典子

倉吉市 米田 幸子

大阪市 小泉ひさ乃

米子市 門脇 晶子

堺市 矢倉 五月

弘前市 宮崎ヒサ子

藤井寺市 鴨谷瑞美子

和歌山市 楠見 章子

鳥取市 土橋 睦子

米子市 木村 春枝

堺市 山本 半銭

出雲市 園山多賀子

寝屋川市 平松かすみ

岸和田市 土橋 房枝

兵庫県 中上千代子

境港市 遠藤那珂子

藤井寺市 若松 雅枝

堺市 志田 千代

倉敷市 井上 富子

神戸市 山田婦美子

三田市 辻 開子

大阪市 大川 桃花

東京都 やまぐち珠美

あら電話 雑巾置き去りにされる

苦勞した甲斐あり親を思う子等

老いた母いろはにほへと書いている

コンビニを探索して雨宿り

まだ塗るか言うほど塗って悪びれず

ふく水盆にかえらず情け仇にされ

生ヌルイわたしが受けるバツシング

風の私語 聴く日なかが抜けてゆく

こだわりの一品手抜きなどしない

美しい死を考えて偏頭痛

娘には娘の生き方それもいいだろう

酔うほどに吐息いくつも駆け出る

喜びで悲しみて花 花清し

ねほりはほり穴のあくまで聞くお人

老いなりにゴミにはならぬ心して

やつとやつと花粉の時期も過ぎました

西予市 黒田 茂代

今治市 野村 清美

米子市 池尾 保子

寝屋川市 森 茜

東大阪市 北村 賢子

和歌山市 山口三千子

生駒市 飛水ふりこ

三田市 久保田千代

東かがわ市 池内かおり

橿原市 安土 理恵

横浜市 長島亜希子

和歌山市 柏原 夕胡

シドニー 坂上のり子

八尾市 井尻 民

大阪市 吉内タカ子

大洲市 花岡 順子

富喜子さんの句―薫風先生をお偲ぶする皆の気持そのままの句でしよう。今日は西の峯のどのあたりと陽が沈む方を眺めては思い出される先生の句です。ひろこさんの句―何といってもリズム感のよい初夏らしき明るさが句をいさよきとさせている。さらさらという言葉に読み込まれている人々の動きにもうまい句作りがみえる作品である。恵子さんの句―的確で軽妙な表現に思わず頷いてしまうところが面白い。捨てようとして決心するまでには、色々な思惑が流れたにちがいない。人柄・生き方まで伝わって来る作品である。ふみさんの句―篠郁と香る牡丹園の女王のような花より、庭の一隅で地味に光っている花から目を放さず、無言で語り合う一刻を大切にしている風情がうまく描けている句である。

蠅

森本 弘風選



追えば逃げおわねば戻る蠅を追う
 スパイスが利いたか蠅が寄りつかぬ
 蠅乱舞血圧までが上がりそつ
 いい話だけ聞いて聴い蠅
 好奇心だけが蠅より強い妻
 外交の下手な日本にたかる蠅
 蠅一匹寄らぬ無菌質な女
 もう蠅も棲めなくなつた都市砂漠
 居酒屋のハエ一匹と飲んで
 一瞬の技あり老いの蠅叩き
 飢えた子が地球の隅で蠅と居る
 豪華船蠅もネズミも乗せている
 友達のない蠅一匹が部屋に来る
 蠅いないくらしヒト科が病んでいる
 夫婦して蠅一匹きに踊らされ
 通夜場に蠅一匹がまぎれ込み
 ぼくよりも先にまんじゅう蠅が食べ
 蠅さえもたたけぬおとこ夫に持ち
 年金の匂いに蠅が寄ってくる
 甘い汁寄つてたかつて蠅の群れ
 叩かれる蠅は二三度舞つて逃げ
 青蠅がわたしについて来たらしい

悦男 雅枝 浴醉 彩子 柳弘 蜂朗 保州 一風 可住 和枝 重人 正雄 みつこ たず子 あやめ ミツ子 霜石 愁女 一知 敏子

お手盛りの甘い汁吸う黒い蠅
 押入の隅で見つけた蠅叩き
 スーパーの蠅一匹がよく肥り
 目障りな蠅一匹を視野におく
 ストレスと一緒に叩く蠅たたき
 蠅叩き蠅と遊んだころがある
 蠅も蚊も家族であつた少年期
 井戸水も蠅も迎えてくれる故郷
 飽食にさすがの蠅も悪い箸
 仏壇へ合わす両手で蠅叩く
 寝たきりに蠅の見舞いがこうるさい
 嘆きわけて人より先に蠅が来る
 蠅地獄今日の獲物は美女と決め
 平成の蠅は知らない蠅リボン
 子を打つた思いもある蠅叩き

三代子 倫子 愛論 慕情 朝子 志洋 七ツ子 幸雀 志洋 花匠 高栄 勝巳 俣子 恭昌 好文 修 天 地 人 此の家はうまいものなし蠅もバス

蠅も蚊も仲間と育ち古稀元気
 昼寝するコギヤルに蠅がキスをする
 軸 相馬一花
 里帰り帳かぶせ母の味
 理恵
 この家はうまいものなし蠅もバス
 修
 蠅も蚊も消えて昭和が遠くなる
 蠅帳に芋のおやつが待つていた
 蠅一匹悶絶していた化粧室
 友の訃へ蠅一匹を逃がしやる
 顔の蠅追う気力なし飢餓の子等
 好文
 カビに病みカビの薬に救われる
 かび生えてやつと互いを認め合う
 かびくさい祖母の小言が今光る
 父さんのジョークはかびが生えている
 いつまでもかびの生えない青春歌
 待ち侘びてハートにかびが生えそうだ
 かび生えた誓詞を妻は武器にする
 踏ん切りが悪く切り札かび生える
 捨てられるところやつたとテルーチーズ
 未知の夢広がるかびの小宇宙
 ひとり旅脳を虫干しして帰る
 嫌われも救命主ともなるかびよ
 昔はとまた徴生えた武勇伝
 甘酒は麴に限る母の味
 シャーレーのかびに医療の目が光る
 コンビニを食べて組板かびが生え
 気持までかび生えそうな長い雨
 梅干にかび生え不安つのでりだす
 かび培養時々する冷蔵庫
 かびはえた性善説を捨てられず
 かびに似て日裏好みの人もいる
 かび生えた鏡餅切る小正月

勝視 理恵 美津子 強一 美明 次男 晴翠 像山 深雪 可住 徳三 松煙 冷子 あずま 美義 修 千里 藤朗 悦男 倫子

カビ

古今堂蕉子選



氣を抜いた途端にかびが生えてきた
華美よりもアイロンかけたシャツが好き
かび臭い話の中にある情け
石室にとっこいカビが生きていた
糸を引く納豆ほどの夫婦仲
青空にこころのかびを干しに出る
ジョギングで脳味噌のカビ振り落す
倦怠期ダブルベッドがかび臭い
泣く笑う心にかびが生えぬよう
音無しの構えでかびが繁茂する
ほろ家なかびと一緒に住んでいる
健かな女にかびが生えてくる
円やかな味が出てきた趣味噌
かび少し拭って鍾馗金太郎

美代子
こずえ
遠野
淳司

たず子
シマ子
柳弘
保州

和枝
一粋
螢

善信
尚士

花順子
正和
北朗
四郎

たもつ

正雄

霜石

箱入りの飛鳥美人にかびが惚れ
備後三代子

かびはえた話何度も聞く余裕

軸

銀 河

渡辺 富子選



師を偲ぶ銀河にひとつ光る星
宙を舞い銀河に溶けていく螢
999運んだ夢が電池切れ
天の川背負って帰る塾カバン
銀河鉄道少年はまだ夢途中
少年の夢を銀河は見捨てない
父と子が銀河仰いでする妥協
銀河までのちを笹の葉に吊す
街灯を逸れて銀河とせせらぎと
銀河列車乗せたい絆ばかりです
素っぴんで銀河から来る風を受け
思い出が銀河の中に溶けこんだ
足ることを悟れば銀河流れだす
夢銀河へちよはよとコールする
銀河から時々メール来る噂
銀河鉄道愛する人をみな乗せて
流れ星ひとつ銀河を零れ落ち
逢いたくて銀河渡ったことがある
あの時はあのひとと見た夏銀河
恋散った数と銀河の星の数
父の山銀河と話をしてねむる
いずれこの身も銀河に還る俱会一処

朝子
喜子
宇乃子
正雄

理恵
権悟
ゆきの

隆盛
茂代
花匠
花匠

雄々
螢

ヒサ子
一花

たず子
尚士

圭一郎
ミツ子
棲世
彩子
寿美

向こう岸の遠き銀河に橋が無い

師を乗せた馬車は銀河へ辿り着く

軸

金米糖酔ってこぼれた天の川
冬銀河あの子の星ほどの辺り
満天の銀河あしたのヒントくれ
宇宙船銀河で星を釣っている
故郷は銀河の駅があるところ
大宇宙銀河の果てに父母おわす
君に会う約束で待つ天の川
涼み台銀河がきれいだった頃
不景気の底で銀河が光らない
ピルの灯に銀河消される六本木
都会では暗渠にされたのか銀河
果てしない溜息銀河まで敵う
銀河系のひとつの星がきな臭い
花ことばを降らして消えた天の川
人生は五十歩百歩見る銀河

黒兔
北朗
美紗子
徳三

遠野
恭昌
柳弘
あずき

章久
あやめ
淳司
宏修

美代子
公誠

妻千代
重人
彌生

保州

霜石

花岡順子

天

地

人

初歩教室

題 — ほしい

三宅 保州

オノマトペ（声喩）の活用

今回の題の「ほしい」は、比喩の一つの「オノマトペ（声喩）」に属するものです。

オノマトペとは、音声的なイメージを表現することにより、そのものをより鮮明に印象づける効果をもたらすと言われています。

例えば、カタカタ、トントン、バタン、ごくり、よちよち、すたすた、つるつるなど枚挙にいとまがありませんが、音声等の模写の擬声語と、動作や状態等の模写の擬態語等があります。例えば擬態語で、

降りる客いとんのんと続くなり 須崎豆秋
「のんのん」に降りる客が続く様子がより効果的に窺えます。これが「降りる客長蛇の如く続くなり」だったからおそらく凡作でしょう。

薫風の如く卒然と逝かれた橘高薫風先生の、オノマトペの見事な句を抜粋します。

へらへらと泳ぐ魚に似た汚職

ギター抱きぼろぼろんとこぼす俣

産声のはっしはっしと聞えける

あの女はたまた炎落し行く

皆様も先人の名句も参考にされて、効果的なオノマトペを使った佳句を作ってください。

【同想句】

巧妙にほしいい乗せる詐欺電話

ほしいと押ししたハンコが命取り

ほしいやおれおれ詐欺に騙されぬ

オレオレにほしい乗って泣き寝入り

ほしいと振り込み後の祭かな

ほしいと赴くままのお人好し

吟味せずほしいと乗る素直かな

ほしいと相槌打ったのが誤算

只酒を飲んだ昨日が高く付き

夕夕酒と分かったとたんほしいと

同想句には説明・報告調の句が多く、「重の欠点になります。そこを超えたいものです。

【添削・批評句】

ほしいと仕事を替えるフリーター 満子

ほしいと育てた子ども親になり こそえ

ほしいと孫に誘われ遊園地 稔

三句とも説明。作者の思いを詠みましょう。

ほしいと気楽な後家の一人旅 俊子

「後家」は現代では不適切な用語です。

野良猫を追い立てるけど外方向く みね代

「ほしい」という題とは言い難いのでは。

ほしいと駆け登る若い脚

ほしいとパーゲン飛びつき無駄を買う 道子

ほしいとついでに来ましたこの人生 水昇

ほしいと乗った仕事荷が重い 真一

四句とも字余り・字足らずでリズムが悪い。

原 ほしいと行けば混浴露天風呂 冷子

「く」は不可。「行きたり」の文語体も不可

添 ほしいと行けば混浴露天風呂

原 電話口はほしい程よい生返事 政子

中・下が相反する表現になっています。

添 電話口はほしい話し合わせとく

原 ほしいがほしいになり冥土ゆき ただよし

添 ほしいと招く冥土はお断り

原 貴女に弱音はほしいとそつと吐くミヨノ

「ほしい」と「そつと」がそぐわない。

添 あなたにはほしい本音喋れます

原 ほしいと孕み猫追う猫の恋 節子

「猫」が重複しています。

原 ほしいと金くれる人一人いる 那珂子

「二人」を具体的に。「人」「二人」重複。

添 ほしいと気前すぎる親がいる

原 ほしいとされて管庁の天下り 婦美子

「天下り」があるから「官庁」は不要

添 ちやほやとされてほしい天下り

原二次会に彼もほいほい付いて来る 秋星
彼の位置が分かり難い。「部下」とかに
原ほいほいとやつて重宝されている 夕胡
何を「やつて」か。「動き」「爆き」とか。
原ほいほいの指切り嘘になりました 徑子
添ほいほいと指切りをして嘘重ね
原甘い口ほいほい女にだまされる 信子
添鼻の下ほいほい伸ばし騙される
原朝ほいほい夜がくつりのバス旅行 益子
添ほいほい発ちくつたり帰るバス旅行
原ゴキブリがほいほい見抜き迂回する 好文
添ゴキブリにほいほい体をかかわされる
原ほいほいとほずみをつけて動く母 寿々女
添ほいほいとほずみをつけて母元氣
原ほいほいとついて来る奴頼りない 章司
「奴」は句品に欠けます。部下とかに
原ほいほいと受けて責任問われてる のり子
添ほいほいと受けて責任負う羽目に
原ほいほいと過保護が意志を弱くする 智加恵
添ほいほいと親に縋っている過保護
原ほいほいと花に浮かれる春財布 タカ子
添ほいほいと花に浮かれています 財布
原行きたくもほいほい行けぬ余生だね 清
添ほいほいと生きていきたいけど余生
原戸をあけたほいほい犬が先に来る アヤ子
添帰つたらほいほい犬が飛んでくる

原ほいほいにだまされまいぞ老人一人れんげ
添ほいほいと騙されまいぞ老い独り
原気がつけば空白のない予定表 正和
添ほいほいと請けてぎつしりスケジュール
原ほいほいと仲間にまじり行く湯宿 雅代
添ほいほいと友に誘われ旅の宿
原声かけばほいほい早くくる返事 美紗子
添誘つたらほいほい乗つてくる仲間
原娘が口を利けばほいほい聞く夫 象山
添娘にはほいほい口を利く夫
原ほいほいと大安売りに吸いこまれ 順子
添ほいほいと大安売りに乗せられる
原ほいほいと気前よすぎる大阪市 典子
添身内にはほいほい甘すぎる役所
原車ねだられほいほいと買う悪い親 綾乃
添車までほいほいと買う甘い親
【少し工夫すれば佳くなる句】
原魔法かけられてほいほいと行って行く イセ
誰にとか、どんなとかを詠んでほしい。
原ほいほいと請けた祝辞で汗をかき 藤朗
結論が常識的なのが惜しい。
原ほいほいと広げた傘をたたみかね 千代子
添ほいほいと広げた傘が量めない
原ほいほいと誘い上手な仕掛人 宏子
添ほいほいと誘い上手な仕掛人

原ほいほいとその気にさせるほめ上手 英旺
原 水溜まりほいほい言われやつと翔ぶ 利子
原ほいほいと出かけたくなる陽が昇る 美恵子
原ねだられて買ってはママに叱られる 亜希子
原ほいほいと買って使わず期限切れ 洋子
原ほいほいと財布の紐の緩む音 昇
原ほいほいとパブルに乗って今地獄 北朗
【佳句】
ほいほいと買えぬ財布を握り締め 賢治
ごきぶり取りうちの旦那もかかりそう 喜子
番犬がほいほい尻尾振っている 起世子
その時が来たらほいほい逝くつもり 萌
ほいほいと調子をとれば荷も軽い 信雄
ほいほいと引き受けてから思案する 雅明
ほいほいと乗った梯子を外される はじむ
お誘いがあればほいほい出掛けます 忠子
ほいほいとついて行くのも処世術 武
ほいほいとついて行くなと子に教え 弘泰
【今月の推せん句】
ほいほいと受けて離せぬ湿布薬 吉村 幸
思案や苦勞の疲れが「湿布薬」に凝縮。
手の届く椅子へほいほいぐら下がりが 喜田准一
「手の届く椅子」の比喩が味わい深い。
【私の句】
有頂天になりすぎボタン掛け違え

秀句鑑賞

同人吟山本蛙城

— 6月号から

言葉・文字という数の限られた道具で表現する文学は、大脳の中の莫大な量の細胞によつて形成される情報を完全にアウトプットするには、ながながと書ける散文でさえもむづかしい。まして省略の文学である短詩では、なおさらのこと。従つて鑑賞にあたっては作者の用語とその組み合わせ方の工夫の努力に注意をして拝見した。難解句がなかつたのは幸いであつた。

省みれば昭和二十九年堺番傘の同人会で、本格川柳派岡田鹿の子会長と詩性派墨作二郎君の論争についてはいけず、萩の茶屋の水府師に他の同人達とばやきに行つたものだった。墨君二十八、小生三十四と若かつた。

今、課題吟が常態のようになっていて、句想の広がりが少なく暗合同想が現われるばかりか、旧態依然使い古しの月並み頻出。「人の肺腑を衝く十七音字中心の人間陶冶の詩」〔新川柳講座〕「創作は斯くあるべしと一般に固定すべきものでない」〔国文学の解釈と鑑賞〕の先師の教示を胸に鑑賞した。

正解が鼻もちならぬこともある

吉田 あずき

答はいつも一つとは限らない。問題の種類や性格で変わり得る。人によつては他人の知識を理解もせず受け売りして言いふらしたり迷惑この上ない。

大中小んな器を持ち歩く

池 森 子

大中小の措辞は大きさだけでなく形の違ひも暗示する。作者は水になっている。方円の器に従うのだ。美しい諦観の極み。

順調に老いて居ります物忘れ

笠 井 欣 子

あの有名な「老人は死んで下さい」の句が底にある。ちよつとした物忘れは誰にもあるが、お偉い方々よ、がたがた言いなさんなという居直りの心情が隠れている。介護予防など企む徒輩にこの強さは詠めまい。

迷い迷つていつも同じアメリカン

籠 島 恵 子

迷つていないが、迷つたふりもお付き合ひ。

出てこない名前コーヒーかき回す

都 倉 求 芽

ゆつくりゆつくり時間稼ぎをする。決して焦らないのが肝心。作者は体験上熟知している。リラックスしていれば脳の中では言語担当の左脳のシナプスがイメージ担当の右脳のシナプスから応援をうけて、名前の引き出しをあげてくれるのである。

熱帯の雨は縦横斜めから

西 出 楓 楽

南西諸島紀行の前書がある。作者は紀行の囁目吟を多作されている。俳人鷹羽狩行のようだ。句語の中に人がないが広重の浮世絵の景のように走る人間が浮かぶ妙味がある。

歳ですなたただそれだけの初診料

小 泉 ひさ乃

句に一言も高い、説明不足、やぶ医者など言っていない。読者には解らせている。歳のせいにして、ちゃっかり取られる初診料。

虹ばかり見ている妻の小物入れ

岩 屋 美 明

虹は天空にかかる物理現象が本意。しかし言葉を単なる標識のように使わない。希望、人生という意味として使う。遠くにある虹は叶えられない理想であり、不満である。小物入れはその数の多さを暗示する。

お隣と軋む歴史という重荷

乙 倉 武 史

お隣と置いた丁寧語の皮肉。仲良し助け合いの近隣ではない。インドにバキスタン。ドイツにイタリア。そして日本に中・韓という隣国の常任理事国入り反対。そして日本には反日愛国、教科書、靖国。戦後六十年というのに、歴史歴史と何とかの一つ覚え。あきればかり荷が重い。

ライバルに勝ったと思う皺の数

中 井 ア キ

女性にとつて皺は大敵。しかし皺は苦勞の代名詞で年功の意味でもある。苦勞を重ねた経験は、何の苦勞もなく生きたライバルに対するひそかな勝利宣言。そのうち老いてからせいぜい苦しまれよと胸の中で。

ラーメンを音も立てずに召上がり

谷 口 義

下句の表現のうまいこと。まるで貴婦人と思わせる。そして大衆食のラーメンを上句に対照的に置いた。大衆は何の遠慮もなく高い音を立ててこそ美味。音を立てるのが定法。全然音のしないようにスープでも掬うかのような仕種を思い浮かべさせる。原因と結果を並べる因果句になり易い短詩を避けながら読者に理解させストレス解消の笑いを誘う。

本人を信じぬ身分証明書

海老池 洋

記憶喪失のピアノマンと呼ばれる若者のニュースを聞きながらこの鑑賞文を書いている。本人が所持していて、私が本人だと説得しながら提示する身分証明書という物質も本人と一身同体ではない。まして度々、偽造のパスポートや保険証やキャッシュカードが横行する時代。困ったものだ。だからと言って目立つ所に放置もできぬ。掌紋、指紋、瞳孔で本人確認するのが当たり前になりそう。その次は携帯用DNA採取器の未来か。

すりきれた手紙心に灯をともし

出 口 セツ子

すりきれるほど年を経た手紙。若い日の手紙である。何度も撫でながら読んだ手紙。肌身はなさず持ち歩いてきた手紙。雨の日に風の日に哀しい暗い日にそっと出して癒される。

笑顔播く癖に困ったお葬式

大 内 朝 子

いつも笑い袋が満タン。自然な笑顔。笑顔は笑いではないから案ずることはない。お葬式であっても「儲かりまっか」などと軽率に喋ってるのではない。そして、下品で低級な「お笑い」とは断じて違う。哀しく暗い時ほど笑顔が人を救う。恐れ入ることはない。

戦争を懐かしそうに話す人

本 本 朱 夏

この人は戦争が楽しかったのか。戦争は死を強要する最悪の犯罪のはず。こんな人に語り部の資格はない。

見えそうで見えぬ賽銭箱の中

三 宅 保 州

贖札で初詣した不届き者の出現した年である。投げ入れたお金が、果して神様に迎えられるのか覗きたくもなる。しかし、底は結果なのか見とげられない。

笑っても泣いても明日の岸に着く

上 地 登美代

朝の来ない夜はない。笑ってか泣いてか、笑って暮らす方がよい。

女湯をちらりと覗くこととはある

新 家 完 司

命は卵から。卵は女性のもの。だから神代の昔から女性が偉いのだ。覗くのは、他意なし。ただ今いかがおわすかと敬意の現れと思し召せ。

蟬時雨じつと聞いている蟬の殻

正 畑 半 覚

蟬時雨は人間社会の喧騒、聞いているのは悟り切った仏に近いほどの人。七欲を払って静寂無限の心境。

—水煙抄

秀句鑑賞

—6月号から

太田 昭

繰返し息子の歳を訊く卒寿

鈴木 いさお

同じことを何度も繰返し訊ねる親の恍惚さを感じるが、一方、何度も繰返し我が子の歳を訊ねることで、子の成長を確認し安堵しようとしている親の温かみをも感ずる。

やり直す人生ならばやめておく

大西 文次

人生のやり直しには余りにも時間がかかり過ぎる。作者は過去をふり返らず、前向きに取り組もうとしているに違いない。心からなる応援歌を贈りたい。

親の歳越ししてうれしい春の宵

山田 婦美子

亡くなった親の年齢を越えたとき、何もしてやれなかった親へ、孝行が出来たように思えて来るに違いない。娘としての僅かな満足感なのかも知れないが……。

仲間だと勝手に思う日の誤算

塩路 よしみ

仲間だと信じていたのは、自分だけだったと気が付いた時、裏切った相手を憎むより、己の誤算を反省すべきなのかも知れない。

父の役務めた母の苦勞皺

升成 好

老いた母の皺一本一本は、父親と母親両方の役割を果たして来た母の勲章である。母の強さと、愛の深さを感じさせられる。

肩書きを脱いだら風邪を引きそうだ

脇 俊子

肩書きが取れると、誰でもがほっとすると。肩書きが取れると、誰でもがほっとすると。作者は、風邪を引きそうだと詠っている。人間の本音を見たような気がする。

悪いのが一人も居ないから揉める

三浦 強一

大なり小なり、組織に過失を生ずると必ず犯人探しをする。「俺が悪かった」と悪者が見つかるまでは、揉め事は収まらない。

強がりはまだストロウの先にある

両川 無眼

コップの中の水を吸ってやろうとするが、氷はストロウの先で強がりを見せ、吸いこまれないとする。周囲の環境にはそう簡単に溶けまいとする強がりの人生に万歳。

追伸の手書きに見えた意外性

坂上 のり子

ワープロの手紙に書かれた手書きの追伸の文字の美しさ。加えて、機械打ちからは味わえない温かさ、そんな意外性を発見した。

尽くされて尽くし返せぬ不甲斐無さ

藤永 実千代

尽くされた恩をいつかはお返ししなければと思いつつも、それが思うように行かないじれったさ、自分の不甲斐なさを痛感する。

胸底に開けてはならぬ窓がある

二宮 栄子

胸襟を開き、何でも話し合える友は、貴重な財産である。しかし、相手の心の中にも、自分の心の中にも、他人に開けて欲しくない窓があるはずである。

明日を語る少年の目が美しい

矢野 良一

現代の少年に夢はあるのだろうか、汚れきった大人達の社会にあっても、明日の夢を語る少年達の美しい瞳を見たいものである。

便利さに人の心が悔られ

徳江 波正純

文化を追い求め、より便利さを追求する。そんな中で、失ってはならない人間の心が軽んじられ悔られているのではないだろうか。

橘高薫風名譽主幹を偲ぶ会

日時 七月七日（木） 午後一時から午後三時まで
会場 アウィーナ大阪 三階 葛城

06・6772・1441

会費 四〇〇〇円（幕の内）当日いただきます

—— 締め切りました ——

路郎忌・薫風名譽主幹追悼川柳大会

日時 七月七日（木） 偲ぶ会と同じ会場
午後五時開場・六時締め切り

（社）日川協 本田 智彦氏

挨拶 川柳塔社 板尾 岳人

おはなし 川柳塔社 波多野五楽庵

兼題 各題二句・読み込み可・席題なし

「薫」川柳塔社 八木 千代選

「風」時の川柳社 小松原爽介選

「島」ふあうすと川柳社 泉 比呂史選

「路」番傘川柳本社 牧浦 完次選

「似」番傘川柳本社 磯野いさむ選

「子」川柳塔社 河内 天笑選

会費 一〇〇〇円（粗供養呈）

偲ぶ会・川柳大会ともにお供え拝辞

川柳塔社

路郎賞・川柳塔賞の応募は

八月号の刷込み用紙で——

①川柳塔欄・水煙抄欄に6か月以上、出句した人に応募資格を認める。

②平成16年9月号から平成17年8月号までの入選句（自分の句を出句する）

③8月号刷込み用紙に5句を楷書で書き8月10日必着のこと。

昨年九月から今年八月の間に

誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか月数の多い方を選択して応募して下さい。

ただし、「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川柳塔賞」には水煙抄欄作品からの応募となりますので、間違いないようお願いいたします。

インド再訪

新家 完司

性格が粗雑なせいなのか、ゴチャゴチャとした猥雑な場所が好きだ。美しい景色などは「ふーん、こんなものか」と、それなりに感心はするが、すぐに飽きてしまう。世界遺産のような名所旧跡には多少興味があるが、「何度も訪れたい」とは思わない。

名所などより、人間がウジャウジャいる市場や、屋台が並んでいる裏通りが楽しい。走り回る子供や、客と店員のやりとりなど、言葉が分からなくても、生き生きした表情、珍しい食材や雑貨を見て回るだけで飽きない。

しかし、インドでは、一人でぶらぶら散歩するだけのが至難。ホテルの門から一歩外へ出ると、すぐに物売りや物乞いにつきまといわれる。「ノー」と断つても、どこまでも追って来る。根負けして一人から買うと、たちまち取り囲まれて身動き出来なくなる。

そのような状況は、小さな田舎町のことだではない。首都デリーのホテルは閑静な一

角にあったので、「ここならゆっくり散歩出来るだろう」と出かけたが、すぐに三輪タクシーの運転手が寄ってきて「乗れ」という。これも「ノー」と断るのだが、しつこく「マーケットまで1ドル」とか言っついてくる。その声を聞きつけたのか、遠くから子供が絵葉書や数珠を持ってばらばらと駆けて来る。百メートルも歩けず、ホテルへUターン。

それでは、なぜ懲りもせずにそんな所へ行くのか？ 事情を話せば長くなるが、端的に言えば「成り行き」だ。ずっと「成り行き」で生きて来たので、旅行まで成り行き次第。

二度の訪問で幾つかの観光地を回ったが、タージ・マハールやアジャンタの石窟寺院などは一度だけで充分。「何度も来たい」「もっとゆつくり滞在したい」と思ったのは、ガンジス河のほとり、ベナレスの沐浴場。ガートと呼ばれる簡易宿泊所の間を縦横に結ぶ路地。薄汚い迷路のような裏道を、フラフラと、どこまでも歩いてみたい。と切に思う。

インドの夕景

黒い塊の上に男四、五人
がしがしん ハンマーを振っている

鯨の解体か と見れば
トラックの残骸

夕闇迫るゴミ捨て場
ゴミの山のとっぺん 少年ひとり
灰色の大きな袋をひきずり
何か拾っている

サリー姿でツルハシを振る女
ぬかるみの工事現場の横
汚れた野良牛 呆然と雨に濡れている
牛の上に黒い鳥

原っぱの真ん中 畦道沿い
そして 川のほとり
手洗いの缶を前に
排泄する影

何を売っているのか
畳半畳ほどの屋台
薄暗いランプの下
瞑想する仏陀の末裔

わたしはきのう
インドという

大きな象の尻尾を
少し 触らせてもらった

第29回 全日本川柳二〇〇五年広島大会

表記川柳大会は、6月12日広島市広島郵便貯金大ホールで開催され、事前投句227名、ジュニア3102名、当日出席737名の中から同人の川上大輪氏が昨年の国民文化祭に引続き文部科学大臣賞を受賞した。ジュニアの部の広島県知事賞の坂本由佳さんの鳥取県鹿野中は、本社理事中原諷人氏が指導に当たっている。

〈一般の部〉

文部科学大臣奨励賞

六十年まだ広島はヒロシマで

和歌山 川上 大輪

参議院議長賞

口開かぬ貝の一つよ逝つた子よ

広島 桑田 宏子

川柳 大賞

君がいる親しい友の真ん中に

山口 藤井 幸子

大会賞

二世帯の廊下をつなぐ孫の風

青森 生田 泰川

魔法だと思ふこの世に生きている

大阪 赤松 ますみ

人許す強さを事件から学ぶ

愛媛 井原 みつ子

ドームも女も六十年というかたち

大阪 森中 恵美子

キーボード叩いて顔のない世界

新潟 玉井 たけし

母さんの魔法どの子も皆笑顔

長崎 平井 翔子

一粒の種に魔法が詰めてある

長崎 平井 義雄

人間のどこか毀れている事件

青森 豊巻 つくし

生牡蛎を一つつると口に春

兵庫 長川 哲夫

おんなです母です坂がある廊下

新潟 若林 柳一

普段着のことはが温い無二の友

神奈川 近藤 道子

〈ジュニアの部〉

広島県知事賞

生きてゆく長い廊下を一步ずつ

鳥取 鹿野中二 坂本 由佳

広島市長賞

がらくたを芸術にする魔法の手

栃木 作新中二 富塚 崇史

広島県教育委員会賞

ありがとう廊下にそっと言ってみる

愛媛 小野中一 谷口 ゆい

川柳の群像〜大八文庫による川柳展〜

期間 6月25日(土)〜7月31日(日)

岐阜県博物館

(TEL 0575-28-3111)

マイミュージアムギャラリー(入場無料)

川柳塔はいうに及ばず、川柳界に大きな足跡を残された東野大八先生の川柳関係の資料が大八文庫として古藤邦夫・愛子氏のご尽力で公開されることになりました。川柳愛好者として見逃がせない展示物が多数あり、この機会にぜひ訪れて下さい。

講演会へ川柳と東野大八

7月18日 13時30分〜15時

岐阜県博物館ハイビジョンホール

講師 黒野こうき氏

— 大八先生晩年のよき理解者で

「大八文庫」設立、今回の川

柳展に尽力。

東野大八句集『あしんど』出版記念会

7月18日 18時〜20時

シテイホテル

美濃加茂

3階・若竹の間

詳しくは岐阜県

博物館まで



(故)東野 大八氏

諍いを避けて気持を畳み込む
 取つときの絹のバジヤマは畳めない
 自我すこし畳めばきつと来る平和
 思い出し笑いで傘を畳んでる
 洗濯物畳むところが現在地
 畳みこんだ鏡が騒ぐので困る
 留袖を畳み静かに茶を入れる
 作業服畳むと苦勞話出る
 真相は胸にたたんで逝くつもり
 シヤツパンツ畳んだ妻のクラス会
 畳んだら終点好きな傘になる
 たとう紙を母の匂いそのまま畳む
 日記帖に今日の私を折りたたむ
 待ち合わせ日傘何べん畳むやら
 畳んでは広げ見直す娘の晴れ着
 もう泣かぬと決めて喪服の帯畳む
 まだ夢のなかばでいのち畳めない
 千の思慕胸に畳んで独り住む
 好きですと言えずハンカチ畳んでる
 母の言葉胸に畳んで娘は嫁ぐ
 あのひとを畳むもう少し強くなる
 畳み掛ける家事に追われた頃の幸
 ゆつくりと畳んでいます果たし状
 嬉しくて今日をまだまだたためない

光久 瑞美子 直樹 シマ子 義 義子 欣子 弘風 修 朋月 つづや 集一 保州 ますみ ますみ 玄也 弥生 鐘造 賢子 一風 夕花 桃花 正坊 月子 重人 千代 恭昌 セツ子

好奇心地図は死ぬまで畳まない
 人に 子に差した傘をゆつくり折りたたむ
 地 過去帖にいつか私も畳まれる
 天 父が店たたんでからの放浪記
 軸 花火見て浴衣畳んで具になる
 兼題「相手」 吉川 寿美選

扶美代 昭 茜 志千代 満州 雅明 はじめ 保州 幸雀 集一 桃花 重人 義 ひさ乃 千代 寿子 夕胡 義子 いわゑ 恭昌 集一

そのままの私でいいと言う相手
 妻不在猫を相手のカブメン
 馬鹿にした相手に握手求められ
 相手にもエール送ってやる余裕
 相手次第玉虫色の嘘もつく
 夕映えはちよつと苦手な相手です
 相槌を打った相手は敵だった
 老いの愚痴猫も相手にしてくれず
 意識する相手じゃないと切り捨てる
 風見鶏相手に合わず風の向き
 変幻自在相手次第の変化球
 揺れながら同じ相手と今も居る
 安らぎをくれる相手をホスピスで
 力接近相手大きく見えてくる

能子 恭昌 舞夢 洋 萬的 扶美代 文 倫子 みつ子 遠野 光久 賢子 千里 たもつ 尚士 みつ子 いわゑ 弥生 五月 月子 アキ 能子

兼題「ひかる」

宮崎シマ子選

ひとことのひかることはに救われる
幸せの絶頂だから風ひかる
生涯に一度は光る時がある

花植えて明日あさつてを光らせる

裸足の子学ぶその目が光つてる

ライバルが靴ひからせてきた闘志

光るものあつたとコーチ育てあげ

ひかつてる悪戯たんとしてきた目

いつまでも光あせない妻といふ

総代でライトを浴びる車椅子

この銀河何年前の光だろう

ひかるもの外しわたしを丸洗い

拳骨を貫つた顔にひかるもの

木洩れ日に五百羅漢の泣き笑い

死の床で静かにひかるアリガトウ

よくひかる妻にこのごろ腹が立ち

嬉しい日庭の石までひかり出し

年輪を重ねた数はよく光る

明日は明日頑張りぬいた今日ひかる

子の心読めずひからすのに夢中

歛に汗光らせ土に生きる祖父

このごろは夫が鍋を磨いてる

母だから子供のキラリ見逃さず

普段着でひかるワタシで暮したい

ピカピカの包丁何を切るうかな

光り過ぎ矢が次つきと飛んで来る

つまるとこ女が男光らせる

修雀

満州

螢

雅明

楓楽

ダン吉

冬葉

遠野

茜

耕治

則彦

つづや

はじめ

公誠

潤子

深雪

瑠美子

文

光久

一風

ひさ乃

正雄

泰子

(矢)五月

俣子

かすみ

修雀

幸

修

介護終え妻の勲章光つてる (志)千代

隠し抜いた底に光つているまこと 弘一

僕が光ると妻が大きな拍手する 深雪

言葉遣いがとつてもひかる人でした 一步

光らない夫婦が小金溜めている

佳

いい街だ子どもはみんな光つてる たもつ

課長よりひかつてますいことになり 月子

遊び駒そろそろ光りだす頃だ 修

私が光り出すまで拭く涙 アキ

自らの光る場欲しい身障者 東吉

人

ひと言がひかる無口の一言言 寿美

地

愛妻家なのね指輪が光つてる 賢子

天

転がつてみようどこかがひかるはず 見清

軸

三年目石もわたしもひかりだす

課題「女」 奥田 みつ子選

一歩ひく女も粘る子のために 照子

立女形いよいよ出番目が女 千恵子

午後のお茶女のはしゃぐちさい嘘 一風

好き嫌い花びら千切る女です 弘泰

母子手帳もらつて止めたフラメンコ 見清

魔女だって涙をぬぐう時もある 萬的

妻になり母になれよと育てしに (志)千代

力説を女笑つて難き倒す 公誠

税申告女だからは通らない

ひとすじの愛引ききつて女とや

撫で肩は耐えた女の美しさ

へソ出しは駄目と嫉妬の女子ゴルフ

気転きく熟女が話題かえてくれ

虐待のニュース乳房が疼きだす

純愛とサラダの好きな女です

女から生まれ女に取られる

やんわりとアキレス腱を女つぎ

命を産むやはり一目二目置く

女三人防音装置作らねば

神様も解けぬ女の深いなぞ

少子化へ女性に頼む大仕事

女ころは便箋に喋らせる

看病の妻が天女に見えた夜

平静を装うおんな対女

しがらみを断つた女は夕陽見ぬ

子供生む特権捨てて女です

大声で笑う女房となりけり

魔女才女悪女淑女もみんな好き

夫より先に死ぬぬと思つてる

姑と嫁強く優しい車間距離

音声多重そんな女になりました

年上の女に貰う団扇風

佳

女は好きだから来世も男です

女みる夫の顔は隙だらけ

絶世の美女でないから睦まじい

倫子

アキ

集一

弘風

萬的

泰子

希久子

直樹

義子

ダン吉

いわず

かすみ

希久子

尚士

雅文

和夫

弘風

和夫

修

(矢)五月

和香

義

正雄

一步

瑠美子

則彦

修

修

修

修

修

修

修

修

修

修

修

修

修

修

修

修

修

とし取った女と猫はむつかしい
女でも女のみる目は持つている
楓 楽

産声におんな菩薩になつてゆく
能 子

負け犬といわれそうかと気にもせず
見 清

今が旬の女バキバキセロリ嘔む
朱 夏

女の味方やはり女と悟り切る
天 笑選

電話よりハガキが欲しいおばあちゃん
高 栄

死者からの便り届いた事故の後
雅 明

ガセネタの便りで終るミンダナオ
求 芽

外遊の孫の絵はがき溜めている
日 出子

いつも子を氣遣う愛のある便り
セツ子

メールより一筆箋の武骨な字
淳 司

誕生の時間を書いた母の文
富 美

自分への便りのように日記かく
い わゑ

ユーカーと海を渡ってきたはがき
文

手紙から葉書になつて恋終る
返信のキリトリ線にある打算
孝 一

抽せん日いつも忘れるかもめーる
祭り囃子は風の便りも連れてくる
求 芽

リハビリの進み便りがリズムカル
行間を読めと言つてる便り来る
弘 一

父からの便り大きな字で叱る
平仮名のきついお叱り母の文
利 昭

あつさりの父の便りが温かい
お袋がギユッと詰まつた宅急便
正 雄

一人旅わたくし宛に書く便り
梅干になつても好きとくる便り
見 清

お便りはしますと別れそれつきり
追伸に濃縮されている本音
か す み

やわらかい花の便りに口説かれる
佳 瑠 美 子

とつときの絵葉書で出す好い便り
名前見ただけで読む気がせぬ便り
遠 野

仏壇にお供えをして読む手紙
風の便りそれから眠れなくなつた
集 一

再婚をしまったなんて旅便り
人 泰 子

旧友が泊りに来いと花便り
地 朋 月

あじさいの絵手紙忘れられてない
天 恵 子

親展の中にあるのは起爆剤
軸 雅 文

第57回 西日本川柳大会

とき 9月3日(土)・4日(日)
ところ 岡山県久米郡久米南町下弓削

久米南町文化センター
日程 9月3日(土)18:00・20:30 川柳まつり
9月4日(日)9:00 開場

第一部 7月15日 投句締切り(当日消印有効)
「友」 多田あや子(岡山市)
「仰ぐ」 土居 哲秋(津山市)

「山脈」 岡田 千茶(岡山市)
○応募方法 各題ごとに、ハガキ大の用紙に
2句以内を明記、氏名・雅号をそれぞれに
記入のこと。会費千円(郵便小為替) 同封

○投句先 〒709 3614
岡山県久米郡久米南町下弓削295-2
弓削川柳社 西日本川柳大会係宛

第二部 大会当日 午前11時締切り
「城」 恒弘 衛山(久米南町)
「花」 赤井 花城(神戸市)

「走る」 小林由多香(鳥取市)
「バズル」 西出 楓楽(大阪市)
「点」 平山 繁夫(神戸市)

特別課題 当日発表 長谷川紫光(久米南町)
○参加費 二千元(昼食・発表誌呈)

○宿泊 津山市駅前
「ホテル・アルファー・ワン」
(申込み7月15日まで)

○主催 弓削川柳社

老心ゆめ

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

川柳ねやがわ (前月分) 森

もう一度咲いて散りたや姥さくら
さくらさくはじけた孫の電話口
象さんの背中に散っているさくら
焼肉の煙にさくららむせている
男はんと笑いながらの口喧嘩
ユーモアを団扇に書いて喧嘩止め
喧嘩なら負けた記憶は無いと嘘
意味深の寝言も今は喧嘩せず
老いてきて夫婦喧嘩も尻すほみ
喧嘩ばかりしてる夫婦の子沢山
子沢山けんかしながら生きる知恵
喧嘩した奴が今では娘の親父
青汁だ酢だとテレビに飲まされる
ドリンクを飲んで男の四股を踏む
茶飲み仲間と言う恋人が居るホーム
時々は一気飲みする善と悪
逃がさぬぞこの幸せにしがみつく
初対面もう掴まれていたハート
ポイントを掴み話が面白い

茜報

亜也子 惠子 ルイ子 一笑 日出子 勇太朗 れい子 一炊 仁清 かすみ 弘風 修 朝子 利昭 弘一 高栄 あやめ さち子

掴む手が泳ぐ吊り革までの距離
負け犬を仰天させた玉の輿
掴んだら掴み返してくる命
風の日は風を掴んでいる詩人
孫の絵をピカソばりやと褒めてやり
充電の範囲であそぶ皮財布
逆風が傷口なめて吹き抜ける
言い訳の矛盾突かれて慌てない
夫唱婦随花粉症までおつき合
この町の花に詳しい万歩計
胃の中で善人のうそ乾かない

川柳塔みぞくち

小西

雄々報

リフォームで余生を暮らす温い家
家柄も遠い昔の鬼瓦
吉報へ我が家仏壇灯をともす
小さくても雨露しのぐ家を持つ
一代を農に捧げた太い指
温もりが浸みた柱の古い家
指先を動かしつづけ元気です
旅帰りが落ちつくわが家朝の飯
家ごと日に丸揚げる夢を見た
寝るだけの家で仕事にまっしぐら

川柳塔おっぱい吟社

木村あきら報

荷物にはならぬ笑顔を提げてゆく
少しずつ角取れて来た人間味
本棚で眠りこけてる知恵袋
春風に誘われ弾むスニーカー

亜成 柳弘 忠央 とし子 朋月 庸佑 たもつ 一度 和代 公美枝 鈴枝 信雄 久子 智恵子 弘子 静江 正光 雄々

川柳塔のぞみ

播本

充子報

迷惑を掛けず生きれば良しとする
顔色を賞めて見舞の人帰る
ソツとして置こう風の過ぎるまで
早咲きの押花添えて春便り
まだ飛べるそんな気がする春の朝
七十億いて地球一つが守られず
どうぞお先に追い風もいらん
拡大鏡女の顔を見てならぬ
湯治場の湯気から貰う生命かな
リストラは無いかせつせと蟻の群れ

よしみ 治延 賢 寿々女 いさむ 輝夫 貞月 ひかり 初恵 放任 花王子 かめ女 いわゑ あきのこ 三喜夫 千恵子 方子 久峰 典子 重人 吟一 リッ 那珂子 順風 やすお 勝 瘦児

歩が一つ姿を消した将棋盤

錯覚から醒めたブランコから落ちた

ブランコの相乗り僕の青春譜

パッサリとどうぞわたくしのすべてを

風の子がブランコを漕ぐ夢をこぐ

ブランコも忘れ去られて塾時代

遮断機がたまには休みたいたいと言う

この夏は北海道を召し上げられ

ペンキぬりたてブランコはシャイである

どうぞ先に行つて下さいウサギさん

ブランコが三寒四温の彩になる

哲子

扶美代

良一

美代子

権悟

恭昌

保州

嬰兒

充子

和香

千里

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

合併でリフォームあまた風当り

合併で取引きせかす水面下

合併で笑った人と泣いた人

合併に右往左往の群鴉

ころころと変る言葉へ湧く不信

合併はしましたそれでも一軒屋

永田町アメリカと合併する気かな

胃カメラはストレスですと片付ける

かつ子

聖子

恵美子

好栄

伸子

はるみ

博利

清泉

高槻川柳サークルの花 瀧本きよし報

Eメール釘一つで縁が切れ

老々介護夫もおぼえた釘付け

喜寿からの釘を少しはずす

とりあえず絡んで生きる葛かずら

究極は絡んだ糸を母が解く

からまった糸をほどいてにくまれて

美義

スミ子

晴美

としり

かおり

佳一

虹色の風と絡んだ五月鯉

日曜日今日は花見の舟の客

夕食を外で摂ろうか日曜日

極楽はいつ来てみても日曜日

日曜日早起きすると妻に角

嘘のようなほんまの話聞かされる

誰にでもほんまほんまとはつ合わす

オレオレとほんまの孫のEメール

問い詰めるたびに小さくうるま

ほんまではおもしろくないのでウソま

ほんまより派手に噂が風にのり

ほんまかと問われて嘘が切り出せぬ

あの人舌だほんまにうまいやろ

けつたいな奴がほんまの顔を持ち

ターミナルビルで証の旅土産

国賓が着く厳戒のターミナル

天国行きのバス停のあるターミナル

居酒屋は喜怒哀楽のターミナル

終着駅過ぎて余生の車庫に入る

それぞれの殻が浮いてる露天風呂

後頼む託した坊さん先に逝き

立ち止まることも大事と影がいう

単純な脳だがまっすぐに歩く

親切の行き着く先に恋がある

竹原川柳会

時広

一路報

桜はまだ蕾長女一女三女

春吟行あなた席は取つてある

命日の吟行亡父が笑つてゐる

美籠

高栄

照子

きよし

祐作

庸佑

あやめ

稲子

治三郎

活恵

宏章

典子

昭

宵草

武史

比る志

泰雄

秀夫

求芽

義一

鹿太

重人

砂輝守

蘭幸

貞子

千代美

佳句地十選 (6月号から)

武本

碧

あの手この手使い果たして丸く生き

善悪の籠が時々外れそう

大きな声でうららかになることば

手さぐりの愛がとき時ショートする

木簡に僕の給与が丸裸

修羅の痕かがれば亡母の温い糸

上向いて歩けばいつしか空に溶け

分る振らせねば峠は越えられず

猛烈な野次にはじつと死んだ振り

いつの日か夕日の赤と沈まんか

サクラのよう散つた少年悔やまれる

追想が煙の中に消える通夜

亡父の跡を追うと海に辿りつく

夢を追いつづけて今日の青いバラ

その日まであなたの背中追うてゆく

追っかける男も追っかけられている

もうよそう追うのを止めて右へ行く

ドカドカと介護が追つてくる弥生

夢を追う鏡を一つ持っている

父の瞳がいつも私を追っている

憧れは強くてかっこいい女

鯉のぼりも笑うよ空が青いから

水平線ほんのり白む陽が昇る

ほんのりほんのりと僕の後ろから

湯上がりにはほんのり香る孫の肌

哲子

一粹

美籠

呂万

慕情

宏

公子

玄也

美代子

正宏

輝恵

幸子

半覚

淑子

不朽

年子

厚子

寿枝

慶枝

千枝

史子

栄恵

笑枝

孝枝

朴訥な中にはんりのりある温み
 慕われてバラはほんのり彩にでる
 ほんのりとほほ染め会釈する少女
 母の日にほんのり酔ったのは嫁ご
 艶っぽくほんのり酔ってみたい夢
 母の矢はほんのり急所突いていた
 ほんのりと甘い乳房にもみじの掌
 ほんのりと漂う妻の香を愛す
 ほんのりで止め百葉の長となす

東大阪市川柳同好会 森下

時刻表天国行きが載っていない
 花好きが花を追うてる時刻表
 しがらみを捨てて旅立つ時刻表
 戦乱のイラク思えば耐えられる
 これ以上耐えたら僕の骨折れる
 家族愛五欲に耐える一つ屋根
 お互いに耐えて笑顔の嫁姑
 ブランドに弱い女をカモにする
 日本のブランド着物かも知れぬ
 ブランドより妻の手編みの暖かさ
 Tシャツの胸イチョローの顔を抱く
 家中を裸で歩くお父さん
 失礼な奴だが実力侮れぬ
 失礼な奴だが実力侮れぬ
 あの人なぜその行いは敵だろう
 ライバルの背なへいつでも届くは手
 専用車という敵陣にひとり乗る
 素朴さに敵対出来ぬ人情味

愛論報

房 子 静 風 規 代 汎 美 節 夫 敬 子 青 居 一 路 秀 夫 朝 子 美 弥 子 良 子 太 郎 章 久 和 代 とみを 度 一 志 雅 文 敏 子 ばつは 三重子 高 尚 湖 風 シマ子 愛 論

川柳ふうもん吟社

夏目 一粹報

オレ流だ無言の愛も愛である
 神様の失敗作の一人です
 大路川春を流して無口なり
 オレ流とわたし流とで輪を紡ぐ
 オンボロの妻がまあるく家仕切る
 オンボロの介護銭では計れまい
 味方とか敵とか言わぬ青い空
 風化した過去をしゃべっている写真
 現ナマじゃどうにもならぬこともある
 オンボロになっても母は母である
 現ナマが絆締めたり緩めたり
 イチローや松井目指してバット振る
 少しずつ地球がめげる音がする
 万葉人も愛でたであろう大路山
 オレ流に生きて独りの酒をのむ
 オレ流も時にいい風呼んで来る
 三角形めいであるく治めたい
 現ナマに心裏まで読まれてる
 オンボロな車庫からベント出でくるぞ
 オンボロの妻でも居れば暖かい
 現ナマがチラチラ迷路から招く
 この愛はめげる運命か不倫です
 不都合はめけた頭のふりをする
 オレ流の鯛釣るコツを教えたる
 夫婦喧嘩に投げてめく皿選っておく
 父さんはオレ流の旗振りまわす

洋 々 鬼 桜 忠 良 悦 子 延 子 志 げ 緒 無 限 一 康 公 子 裕 子 節 子 圭 一 郎 孝 男 一 京 末 佳 道 子 千 代 金 祥 茂 登 子 美 雪 一 瑤 雅 女 朋 恵 蟹 郎 美 惠 子 房 江

お札ならオンボロだつて貰つとく
 オレ流の笑顔で福の神を呼ぶ
 現ナマは汗水流し稼ぐもの

はびきの市民川柳会 徳山みつこ報

遺影にはこれがいぞと決めておく
 写真機を向けると猫がポーズとる
 深い皺写してカメラ叱られる
 アルバムに貼れぬ写真が別にある
 写真にも人柄写る怖ろしさ
 一夜漬に鉛筆の芯よく折れる
 母と子を繋ぐ鉛筆走り書き
 鉛筆で書くことやさしい句ができる
 鉛筆が私のところ掘り起こす
 4Bにしたら優しい字が書けた
 愛の鞭赤鉛筆がよく叱る
 多数派に組しなかつた正義感
 多数派に安住僕が瘠せていく
 父さんの意見は却下母娘
 花片を集めてゆるり花筏
 多数決本音しばらく目を瞑る
 多数より存在感を持つひとり
 多数派へいつしか体寄せている
 多数決どどと闇になだれ込む
 モナリザのほほえみ謎を深くする
 愛の深さ今更知った母の海
 深い井戸声をかければ飴する
 深々と挨拶交す初対面
 受胎告知それから祈り深くなる

行 男 昌 鼓 一 粹 章 司 ヨシ枝 敏 志 洋 りつえ 耕 策 庸 佑 久 仁 雄 アヤ子 いさお 重 人 昭 平 ダン 吉 光 男 美 代 子 六 点 扶 美 代 かつみ みつこ 喜 久 子 悦 子 静 子 フ ジ 泰 子

うぬばれて川の深さを測りかね
先立たれ孤独の深さ噛みしめる
女性とは深層心理わからない
理屈では解けぬ男女の纏れ糸
理屈っぽい男が溶けるアルコール
謝れば済むのに理屈並べ立て

はたる川柳同好会

水野 黒兎報

さてと書きいくつ飲み干すコップ酒
初夏の候さてと寺から寄付の事
お逢いしたことはありそうさてどなた
待ち切れずさてそれではと腰を上げ
毎日が休みさてと連休と言われても
さてもさても見事に伸びた孫の脚
人のふりさてわたしはという不安
席取ればもう化粧室仮眠室
毎晩のテレビ取合う老いらず
何もなく健康だけが取柄です
深呼吸取るに足りない事だった
何もかも取りそこねてる鳶もいる
生き抜いた気骨老いには邪魔となる
綺麗過ぎるばかりに溜まる空の箱
軍帽とかえった父の白い箱
五十年添うて上げ底みとめあい

尾崎尾浜川柳会

山田 耕治報

若い気で炎えてもみたいキユウリもみ
ロボットも暇な連休ころ寝中
見た目より若く歳いいうほめ上手

一壺 惠勇 真一 一知 吐来 狹沓

晴美 五月 美 五月 美 五月 美

場違いの椅子ビリビリとする空気
連休は木陰にシートあれば足る
胸をはり吸った空気は杉花粉
寄り添って空気のようなあんた好き
新緑の空気さわやか並木道
ニート君若年寄りになりますよ
ITで世界に翔ける若い眉
夕方にだんだん空気が抜けていく
ボンボン母がいた日の音で起き
ヤングパワーが覗くジープの破れ
句読点打って空気が甦る
老いてなお母という字に湧く慕情
若者の声笹する山の駅
老いてこそ洒落がしたいイヤリング
空気が買う時代がやってくるような
若者の無礼が通るターミナル
遙かなる友へ献花をする少女

あかつき川柳会

山本 柳昌報

口数の少ない素敵な友がいる
お人柄しのぶかな文字墨の色
百歳の命素敵な笑い皺
神の手の素敵へ欲の手が伸びる
核のない地球素敵な星になる
歳月は重き疼きも思い出に
疼いても所詮あなたは他人です
青春のかげらが疼く日記帳
傷よりもひとりぼっちが疼く日々
運命の曲で疼きを柔らげる

里江 勝巴 カズ子 よし子 亀子 昭三

美智子 重人 朱夏 柳昌 一步

後悔を覚悟でバラの棘触る
疼くもの鞆につめて春の駅
志ちよつと忘れて縄のれん
あるとこじや一億円という寸志
健康維持八十歳のストレッチ
志いっつか売った過去がある
核捨てた日を人間の日とした
スイッチオン火花が散ってそれつきり
討論は好きだ火花を散らすから
脳みその中が漏電したらしい
たかが蹴りではないか火花
金は出せせとの介護は放つとかれ
日本海ミサイル飛んで波高し
新聞を閉じたいニュース多過ぎる
九条のバジカがやく春帽子
もの言わず妻は家計簿そつと出す
不況テロの不安気にせぬバスポート
九条の署名したよと嬉しそう
星条旗星の数ほど核の罪
安全を儲けに売った西日本

川柳塔唐津

仁部 四郎報

親と子の絆を試す偽電話
消火器の損したような期限切れ
客扱い笑顔ひとつが武器になり
生きてゆく見果てぬ夢を追いながら
ママの鼻声に耳貸し蟻地獄
退院日街に酒屋の多いこと
国民へ党の人事のシワを寄せ

孝一 義昭 蕉子 千歩 丹吉 良知 修

正 實 勝 翠 正 實 水 笑 四 郎

ばらばらの拍手の中に義理もある
町内に昔は有った貰い風呂
美味いからカビがつくんじやないの

西宮北口川柳会

黒田 能子報

紙の鍋珍味を炊いて上機嫌
絵葉書のすみずみうめて初便り
脚光を浴びているのは新婦だけ
脚光を浴びて悲しい事故現場
一隅の花ヘライトを当てている
歳だけは求めた訳でないのだが
花の蜜求めて盛り場の灯り
ポックリを求めポックリ寺参り
二度の職求める父の子はニート
青い鳥求めて心研ぎ澄まし
ひよつとしてなるかも知れぬ良い御縁
土産手にひよつと顔出す友がいる
ひよつとしてひよつと信じて夢を追う
上を向いて歩けば粗忽鬼を踏む
収束の日々風と逢い陽と笑う
ボスの座を妻が握って離さない
遺句集の輝き増して巨星墜つ
美味しい褒めた料理に飽きました
百葉の長効き過ぎて二日酔い
幸せは金で買えない友がいる
人命の軽さを想う献花台
グーチョキバー未だ動くと老母の声
鈍行の人生半はこれで良い
幸せかと風が私に問うてくる

輝夫
高明
虹汀

奮水
春蘭
光久
江美
富喜子
哲男
求芽
朋月
五月
文
絹
歳子
開子
孝一
美籠
忠
松煙
昭三
一之
石舟
鹿太
千代
トミエ

ポツケには本音のメモを持つている
薫る風師の名広めよ幾十年
カーネーションが微笑む母の顔になる
おちよば口たこ焼食うときカバの口
五月晴今年の冬を押し入れに
すべて許して空の青さとひびきあう

京都塔の会

都倉 求芽報

フリーターやニートがベット飼う時代
追憶にアルバム整理捗らず
万緑が好きだった草田男 水客も
天の声心で聞けと諭される
子よ孫よ俺を跨いで行くがいい
あほくさい夫婦げんかのなかだちは
牛乳より高い自然の水が売れ
アホクサイ相談だから骨折れる
ヤドカリに習い身丈に合った家
何かある貝になつてる実力者
アオヤギとネギぬたの味母越せず
バックからうまい空気と母の声
食べさしのバックが集う冷蔵庫
バックした構想たまも広げてる
青い空バックしたいな明日のため
出す相手ないのに書いたラブレター
おだやかで相談できるうちの母
相手にはほしくないと言うて負けている
追い越せぬ背中と思う日の相手
くり返す話やさしくきいてくれ
長電話妻も相手もひまらしい

正和
貴代子
比ろ志
いたる
良恵
たず子
きよし
庸佑
和友
高栄
鹿太
英子
萬的
百合子
福子
啓子
満子
典子
則彦
輝美
宏子
益子
久留美
正坊
欣之
葉子
求芽

川柳塔鹿野みか月

土橋

飯つくる手間の苦勞をよるこんで
被災地のおにぎり寶石に勝る
飯だよの明るい声に目をさます
年老いて食べた御飯をもう忘れ
飯粒のひとつ一つをかみしめる
過去辿り飯にすまない事はかり
セレモニータ花束抱いて職を去る
野の花を束ねて母にありがとう
受験の子朝な夕なに便を待つ
仏飯をねらうごきぶりにもある権利
体力の元になる飯よく食べる
姿なき松茸めしの香りだけ
遠い日の飢えを知つてる菜っぱ飯
炊飯器育ち盛りが空にする
穫りたてのえんどう飯で田植える
ご飯です嫁がやさしく呼んでくれ
米と麦半々だった握り飯
仏めし大盛にして差し上げる
喜寿記念花束よりも長寿梅
世の中が震んで後ろ向きになる
いきいきと旬を奏でる五目飯
裏切った日は鬼と蛇と飯を食う
職安であしたの飯を探してる
てんこ盛りご飯うれしのお爺さん
今年から母の花束一つふえ
献花の夜夜露にぬれて泣いている
花束の絵を描き添えて便りする

蟹報
汲香
永子
八重子
保子
喜与志
八重
みさ子
陸子
かつ乃
武子
久枝
幸枝
くに子
節子
実満
房子
宣子
きみ子
蟹
和子
富久江
盛桜
弘子
はるお
菊乃
彩子
公子

花東よ海哀しみに包むのか
花束にしてクローバー母の日に
シヨアアップさあ花東よ両親に
孔美子
茶子
諷人

川柳塔わかやま吟社 牛尾 緑良報

組板の鯉になつても暴れます
感謝する心に深い値打ち知る
母の背を拭く丁寧に丁寧に
記念日の妻クインにしておこう
お母さんの星でなすか迷い道
菩薩にも夜叉にもなる鬼子母神
日記帳母はひとりものドラマ織る
春菊の花が咲いたよお母さん
旬の味亡母と分けて盛る手しよう
夜寒に母手づくりのチャンチャンコ
ふり向けば笑顔の母は川向こう
争わぬ母の背中を見て育ち
黒猫の自負クインに抱かれない
イエスマン集めて今日も女王さま
女王がぜ吹かせて財布軽くなり
良心と葛藤してる板ばさみ
決断を迫られている板挟み
板についたら一人暮しもいいもんだ
簡単に謝まる癖も板につき
板前の味が沁みてる割烹着
板前も日本料理に苦勞する
触觉を伸ばし値打ちの春拾う
結城紬でモンペを縫つて叱られた
安全の値打ちに疼く時刻表

よしこ
泰女
さち子
輝子
保子
克子
三男
和
小
豊太
裕美
順子
千代子
富美子
夕胡
あき子
智三
佐一
三喜夫
英子
和香

一円の値打ち一兆をも崩す
感動の値打ちに情熱を燃やす
労働の値打ち光がさして来る
ダイヤより薔薇一輪が嬉しい日
西欧に男の寡黙通じない
古ぼけた茶碗そんなにいいのかね
紀久子
悦子
和子
朱夏
東吉
大輪

川柳塔きやらほく 福代 天雀報

コンプレックスわたし方向音痴です
片付けて探して春の小半日
吊り鐘のそばからちの鳩が飛ぶ
「ナマステ」で友達になる花回廊
七路も互いにとほほ友白髪
さわやかな返事寝足りた月曜日
花風猪口にひとひら盛つてくれ
椿あかくて月の雫に艶をます
説教もどく風と反抗期
大陸の砂で重たくなる帽子
犯人はカラス鳥ウィルス運ぶ
景品の皿がほしくてパンを買う
雪解け水にわさびしやきつと身をかため
花見客吞んで唄つて出すパワー
ゆるりゆるりと西の港へ進んでる
またこも女性パワーで噎せ返る
連休の天気予報で組むプラン
視界から一人二人と友が逝き
あかね雲想いめぐらす夢はるか
柳壇に嫁と姑で投句する
恋をしてやさしゅうなつたごんたくん
紫泉
春枝
瑞枝
寿々子
初枝
天雀
蘭
てい子
玲子
千代
田鶴
富美子
ふみ
雪江
日枝子
恵子
すみえ
亜弥
章江
那珂子
やえ

紫泉
春枝
瑞枝
寿々子
初枝
天雀
蘭
てい子
玲子
千代
田鶴
富美子
ふみ
雪江
日枝子
恵子
すみえ
亜弥
章江
那珂子
やえ

干し大根母の匂いがしてきます
川柳塔なら 坊農 柳弘報
晶子

しくじりの弱音の筈がタンカ吐く
勝ち組の筈だったのに青テント
開けたなら学ぶことある知恵袋
人教す事を学んで見違える雲
学ぶほど忘れることが多くなる
パソコンに右脳左脳をためされる
ヒーローの軸足揺らぐ民営法
ヒーローの周り厳しい風が吹く
ヒーローは絵に似るポーズ知っている
晩酌でやつと仮面をとるヒーロー
海を見に行こう元気になる筈
天才のどこか学べるところがある
妻よりも先に逝く苦喪主の席
超ヒキニ男の視線独り占め
男でも女でもないようになり
母さんに異性を意識したある日
初めての異性は父の広い背な
ヒーローの涙拍手を倍にする
無になつて他人の動靜見て学ぶ
片想い彼の口笛ヒカイチだ
ヒーローの孤独知っている金魚
異性だから余計に腹が立つてる
耐えることを森羅万象から学ぶ
勝てる筈おごりで足を掬われろ
虹見える筈だったこの坂頭張ろ
一輪の異性に蝶が群れている
カズ子
博一
蘭香
登美子
とし子
重人
ふりこ
太一
春蘭
真理子
茂雄
絹子
弘風
義
孝子
富子
理恵
弥生
千梢
冬葉
ダン吉
國治
隆盛
朝風

晶子
カズ子
博一
蘭香
登美子
とし子
重人
ふりこ
太一
春蘭
真理子
茂雄
絹子
弘風
義
孝子
富子
理恵
弥生
千梢
冬葉
ダン吉
國治
隆盛
朝風

フオークダンス手と手が異性意識する
一冊が向学心に火をつける
帰省する筈のふるさとタムの底
ヒーローもいつか挽歌を耳にする

うぶみ川柳会 小谷美ツ千報

子の寝息母は安堵の添い寝する
臍の緒がいざとなったらモノを言う
一言の感謝も含め札を言う
幸せな眠りに息が合つてくる
税金を含むかどうか聞かなんだ
叱られた事を忘れてる寝息
ゆるやかに浅瀬流れていくドラマ
母の恩忘れるなどいつているへそ
十月十日命つないだ臍のあと
わたくしの城です寝息気にしない
ジーパンが雨を含んで手こずらし
出べそでも人に迷惑かけません
やたらに疼くのはヘソのあたりから
ブランコの軋みも春のゆるやかさ
三椏の花かんざしもいろいろ褪せて
晴れている時に散りたい花ばかり
夜桜が白河夜舟漕いでいる
よそみなどしつつか二人の花筏

川柳ささやま 遠山 可住報

四こまのどまん中には亡母が居る
人生の舞を納める花吹雪
少々は頭の冴える酒を注ぐ

恭 昌 道 子 愛 論 春 雄
か つ み よ し え 黙 光 陸 子 天 雀 芳 江 あ づ ま ひ ろ み く に お き み 子 天 人 重 忠 雄 人 美 ツ 千 ひ ろ こ 螢 石 花 菜 宣 子

身は軽く八十路の坂に荷を放す
真ん中で人生行路花咲かす
まん中なら自立たすにすむ背の高さ
誰にでも好かれ舞います花吹雪
それなりの倅せ満たすどまん中
パンを焼く匂いの冴えてよい目覚め
人生の真ん中すぎてマイペース
つらい坂乗り越え人も丸くなり
手をつなぐ園児を祝う花吹雪
まん中に鬼が一匹居て平和
圏外の無欲の案が冴えている
坂道は杖と語つて楽しくね
ご利益をいただく坂を前屈み
満願の坂登り切るいい眺め

尼崎いくしま川柳会 春城武庫坊報

坪菜園土の声聞く足の裏
農に生きしつかと大地踏む親子
男まさり過去のはこりと生きている
同窓会秘かな思い胸はずむ
新芽伸び弾む季節に背も伸ばす
ホールインワン弾む足どり艶やかに
五連体音なしの中我みつめ
忌憚なく師を悼みつつ偲びつつ
春の岬でこれからの夢組立てる
嘘ひとつ吃水線に立ち止まる
平戸躑躅きつしり咲いて戻り寒
日溜りの初蝶とんで猫も見ている
歩き胼肌切ればなすなの咲きにける

美 緒 子 文 子 美 紗 子 靖 子 と み 子 多 美 子 開 子 か ほ る つ や 子 八 重 子 富 美 富 子 哲 男 可 住 勝 巳 守 弘 し づ 子 宏 一 幸 子 東 園 千 恵 久 子 武 庫 坊 紀 乃 年 代 正 子 薫

古希祝う記念時計が刻む夢
声が澄み五月の朝の立ち話
犬ふぐりひよいと跨げば汽笛かな

八尾市民川柳会 宮崎シマ子報

物あふれ光る宝も捨ててある
火も水もくぐつて光り出すいのち
モラル問う恐い話が多すぎる
肩書きが時にはモラル隔へやり
モラルとは今の時代にな言葉
右側を歩いてモラル右下がり
左側を歩いてモラルのくやし泣き
なおざりにされてモラルのくやし泣き
モラルなどどうでもいいと勝ちいそぐ
糠床の呪縛見つめる鬼瓦
ありがとう私を褒めて床につく
床上げも待てない主婦で家事育児
下町の夏を待つてる床の風
床の間に四季を演出する茶人
糠床を混ぜると逢える亡母の顔
弱点を奪い返して燃えている
燃えつきてみたい貴方の腕の中
どうせなら太く燃えよと蟬しぐれ
心地よく燃える男に酒を注ぐ
男のロマン捨てて傳く子や孫に
何本のローソク消した誕生日
牛井を注文して星条旗
明日が分らぬだから大事にしたい今日
残り火を噛み締めながら酒で消す
少年の辞書に白紙のページあり

寛 之 昭 三 芳 子 秋 雄 加 津 子 レ イ 子 あ か り 頂 留 子 弘 直 柳 伸 ダ ン 吉 更 紗 弥 生 宏 至 直 子 シ マ 子 ま つ お た も つ 欣 之 欣 子 春 蘭 義 明 一 風 浩 三 ア キ ラ

運転士きつと急いでいたのだから
安売りの球根咲くまで疑ぐられ
いいですね夫婦げんかの出来る人
過ぎし日を手繰り寄せてる昼の月

川柳塔おとし

鈴木 一弘報

春風が笑顔が好きと撫ぜに来る
いつまでもさらさら光る目でいたい
支えあう町の笑顔に生かされる
さらさらと希望あふれるランドセル
真っ白い心を持って生きていく
白いシャツ着て泥舟を漕いでいる
心配はするなど明るい母の声
思いきり笑ってみたい福は内
お笑いを聞いてはいるが笑えない
赤ちゃんの十指が把む明日の夢
喜寿過ぎた男は十把一からげ
笑ったら負けのにらめっこに弱い

川柳塔みちのく

小寺 花峯報

重責を果たした古希の背が軽い
二人つきり桜吹雪で遭難中
おさげ髪ゆらしてかけた通学路
末席の愉快な酒に輪が生まれ
尻軽なところに明日が見えて来ぬ
相撲史に残る軽さの舞の海
充ちた日は足取り軽く帰路につく
乾盃のグラスに笑顔から詰める
花言葉ふわつとかけて恋になる

芳香 幸生 ますみ 森子 道子 ヒロ子 風花 清一 真一 一弘 和子 登美 知恵 艶子 幸次郎 由多香 小寺 花峯報 きよし 和香子 誠子 ふさゑ 花匠 井蛙 順風 銀人 黙人

打ち明けて胸の重石がとれてゆく
しあわせな種子はずんずん風に舞う
懺悔する酒が揺れてる思慕の坂
悪友が一升瓶を提げてくる
特大の胸が邪魔して走れない
葉桜になって自由の樹に戻る
花吹雪今日はどこまで行くのやら

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

いい夢を向かいの犬におこされる
夢を持ち破れジーンズ闊歩する
夢心地味わいたいな当りくじ
良心が痛む時々不整脈
流れゆく時を惜んで老いの愚痴
韓流に合わせた妻のスケジュール
今日は今日明日の流れを待つてみる
数知れず水に流したわだかまり
身のうちに満ちるものなく流される
早すぎる時の流れにさからわず

川柳ねやがわ

森 茜報

新人よ覇氣と若さをいつまでも
Uターン新人として農に入り
新人の風に初心をふと思う
新人の素質へコーチ増となる
遠足へおにぎり行くつ増やしとく
遠足の先頭を行く車椅子
遠足もコンビニ弁当持たされる
遠足にれんげを知らぬ都会の子

岳水 霜石 花峯 慕情 一花 五葉庵 苳 シマ子 ますみ 香住 民 弘直 欣史子 能子 加津子 あずき 慶子 一炊 晚翔 朝子 庸佑 博泉 たもつ 勇太郎 あやめ

遠足で分け合う母の手べんとう
一年生遠足月へ行く騒ぎ
寝不足でゆく遠足の帰り道
咲き満ちて水面に浮かぶ花筏
ブランターワッショイしてるさくら草
咲いた咲いた昔むかしがいい国語
ひっそりとすみれ日本の色で咲く
ひそやかにうすくれないに咲くつもり
友情が愛情となり今がある
友情が愛保と信じ貸してやる
友情は細くて長い悲し十年
悪友の汚名が消えた悲しい日
友情がうれいときと邪魔なとき
友情が背中に感じて別離
友情が背にあたたかい車椅子
友情は友情として金は金
少しでもいい顔しよう昨日より
子も愚痴も実家に預けリフレッシュ
遺言だからきつと守ってくれるはず
ひまわりを帽子代りにカッパの子
空にして時どき空を翔んでいる
定年がほとけの顔にしてくれる

長柳会

坂上 淳司報

お誘いはまだか女の灯は揺れる
喜寿過ぎてまだ人生の青二才
もうはまたまたはもうとや命の灯
嫁姑これぞ男の泣きどころ
背伸びした付けが残った請求書

一風 利昭 恵子 任宥 かずみ 仁清 修 一笑 弘風 さち子 とし子 忠央 亜成 栄二 洋 寿子 弘一 日出子 鈍甲 三郎 和子 正子 直樹 芳野 富美子

煩惱がまだ捨てきれぬ座禪草
また女競う気持の試着室
また覚めぬ夢の続きへ旅枕

参観日目立ちすぎです僕の母
背伸びして丸い地球で生きている
まだはたちあつと言う間に花が散る

まだ恋を知らぬ私は七十歳
順風でまだ引き際を見いだせず
吉報を待つてる時の一体感

休日は良妻賢母も跳んでる
本棚にまだ読んでない本がある
背伸びして家建て暮し傾いた

失った男の値打ち今わかり
また男三男誕生浮かぬ顔
新弟子はコブを作つて背伸びする

パソコンの講義終るとすぐ忘れ
まだ元氣もう歳ですのうら返し
男前茶髪やひげで台無しに

それ以上言うな男が立たぬから
男盛り過ぎて潰しの効かぬ人
タンポポの背伸び綿毛のひとり旅

見渡せば日本にだつていい男
袴を脱げばたわいのない男

川柳大阪

高木

信辭報

妥協して今宵ジョッキがほろにがい
楽々と人生越えた山はない

朝ドラの笑顔もらつて動き出す
二十年戻つて暮そいい地球

一 慧 幸 雄 三 和子 も こ 英 美 けい子 輝子 たけし 史 マ サ よしお 武 男 明子 美代子 やすひろ 不二雄 孝 彦 明 信 敬 二 正 一 和 代 正 美 淳 司

おふくろの味が支える縄のれん
花の絵に癒し求めて酔いしれる
おおきにと言われて嬉しい風になる
人の字は支え合うこと教えてる
九条が支えてくれていた平和
神様は人の求めに答えます
剣刺を裏で支える切られ役
おおきにと心の内で言う介護
求人は豊富にありてなオニート
苦勞した昔は言わぬ東髪
喧嘩して支え合つてる夫婦仲
九ちゃんの歌を忘れず輪を広く
まごころが一番好きなおみそ汁
雨宿りうまい具合に赤提灯
星占いたかが古い気になる凶
花粉症今年も律義にやつてきた
味噌汁が生きている証くれる朝
真っ直ぐに引ける定規を今日も持ち
デュエットで青春想う古い二人
平成の中でも俺は黒電話
愛し合い支え合つてるうちのポチ
おおきにが響く流行の赤のれん
支えられ支えて生きた青い鳥
小賢しいCMアリコを考える
無医村に骨埋める氣で来た白衣
報道の自由をのせて世を乱し

一 風 孝 一 芳 香 いわお ダン吉 宏 美 籠 昌 紀 五月 東 吉 一 步 重 人 照 月 川 童 功 隆 司 洛 醉 喜 楽 力 泉 彦 太 善 純 青 道 柳 弘 まつお 信 醉

三幸川柳教室

古久保和子報

野の花も小さく咲いて自己主張

かずみ

明日の日はどんな色咲くチューリップ
人生いろいろ咲いて萎んで繰り返し
もう一度咲かず氣迫を懐に
野に咲いて風に心を試される
九分咲きで刻を止めたい水中花
野次が咲いて記憶がまた疼く
ロマンスに賞味期限があるらしい
夫誘いロマンスごっこしています
保育所へ休まぬ訳が一つある
ロマンスの断片みんな捨てて春
ジュリエット今宵の癖は高すぎる
ロマンスの花を咲かせた丘がある
ロマンスを語れば尽きぬ火のルージュ
満月へ遠吠えしたくなる慕情
怒らない約束信じて打ち明ける
茜雲明日もまたね握手させ
何もかも約束したら進めない
約束にも甲乙付けて日々多忙
箆めし祖母の元氣をてんこ盛り
竹の子の骨のありかを確かめる
楽をして食べる竹の子ややかたい
かぐや姫いそうたけのこそつと握る
雨だれの曲で箆目を覚ます
箆のえぐみに残る自己主張
桜さくら古い約束思い出す
手帳には書けぬ約束事がある
約束をした小指から雨になる
たけのこを掘り出す腰の無重方
箆の出る頃春闘が終わる

信子 当代 公子 和子 碧 次 根 昇 幹子 靖子 章子 清史 み ね 登美代 義男 徑子 起世子 千秀 イセ 八重子 宏 夫 孝子 町子 朱 夏 保 州 桂 香 智 三 准 一

サークル檸檬

吉田あずき報

プロポーズ方法なんか気にしない
真似するがやっぱり母のお味噌汁
つばめ返しの方法もあり風五月
金儲けの方法神は教えない
とんでもない約束しそう雨上り
引きずって来たものを捨てる日暮れ坂
電車待つ安全圏ほどのあたり
柔らかに重い愛という荷物
窮すれば通ずる文はたばたしなさんな
変換キー不吉な文字が多い国
戦争だけは覚えていませぬ認知症
方法はないはずないとまた努力
ジャンケンで鳥の取り合いしませんか
方法が尽き堂々の自己破産
地球いま和顔愛語に飢えている

豊中もくせい川柳会

江見 見清報

啓生 高栄 英子 庸佑 タミ 満寿巳 宇乃子 萬的 求芽 春

よれよれの本の余白にある歴史
つまずいてやさしい母の一言が
好き嫌いいっぱい言うて孫三つ
せめて花いっぱい飾る妻の古希
プラス思考で余白を埋めるポラントピア
小津映画やさしさいっぱい連れ帰る
子の笑顔カーネーションで思い出す
小泉さんは実行力があるみたい
余白から声のしそうな師の句集
算数はついに死ぬまで出来なんだ
絵手紙の余白を飾る一行詩
余白から本音がこぼれ出た手紙
怖いこと第四の義務考慮中
実感が湧かぬ私のお葬式
取り過ぎて四苦八苦するバイキング
青春の悔いの余白がうまらない

城北川柳会

吉岡 修報

暖かく心を撫でている家族
茶柱が何かを知っているらしい
素晴らしい笑顔が揃うハイチーズ
満開へ防犯カメラ見逃さず
重ねても会得しがないカメラアイ
ケイタイのカメラが覗くプライバシー
蝶一羽シャッターチャンス待っている
口先で女心は撫でられる
信じてた顔を逆なでされるまで
撫で肩の男へ無理が頼めない
陣痛のお腹を撫でる仏の手

隆 蛙 都代子 正坊 石舟 玲子 巴子 郁子 千津子 寿美子 知香子 尚士 緑骨 則彦 幸雀 見清

お利口へ頭ぐりぐり撫でてやる
大峰を六根清浄登る杖
立ち止まるたびに勇氣をくれる杖
独り寝のツインルームに罪ひとつ
待ち合わせるホテル仮面の人ばかり
ヒーローミミの数を確かめる
一分を競う世相が悔い残す
またかまたか想定外の事ばかり
鯉のほり五月の空に踊つてる
手さぐりで湿布ぐすりを貼る独り
花の冥空き缶拾うホームレス
熱心に聞かせるセールの膝を寄せ
年寄りに乗ってあげよう一両目
父の日もあつたはずだとカレンダー
脛の疵やがて無効になる傘寿
言う事を聞かぬ猫の爪すくのびる
戒めが転ばぬ先の杖となる
自信過剰もとに戻れぬボタン穴
逝き急ぐ師の影ゆらし風薫る

岩美川柳会

石谷美恵子報

哀しみを消して太陽東から
春うらら方角決めず旅にでる
紙ひこうき方角無視で飛ぶ構え
過疎に住むことも定めか天の川
藤寺へ行く方角はカーナビで
方角に凝って進まぬ設計図
涼しくて踵には良い北枕
方角は足が知ってる茸の城

朝風 史一 集和 夫はじめ 重人 千歩 倫子 達子 志華子 正 萬的 順三 利昭 とし子 昭子 柳一 千里 たもつ

独裁者いる方角を睨んでいる
方角が決まらないまま古希を過ぎ
断りの訳に方角持ち出され

飽食のつけに泣く日がきつとくる
竹の子は方角なんか気にしない
同じ路ついで行きます半歩後

足湯に入れて踵も少し休ませる
父つつあんの踵は釘も刺さらない
母となる自覚で歩くローヒール

地下足袋の踵しつかり土を踏む
いつの間に踵つる春が来た
父の踵に土の香りがしみついた

風小僧砂丘を舐めてつるつるに
掃除好きつるつる滑るほど磨く
何もないつるつる飲んだ生卵

氷上で転ぶがごとく生きてきた
戦争にトカゲも食って今がある
人食った顔が遅刻でやってくる

バイキング超カロリーの盛りにする
この輪から踵かえすのも勇氣

川柳さんだ

北野 哲男報

金婚日リボンで届く万歩計

アオザイとリボンが揺れて暑さ飛ぶ

懐しい人に出会ったお葬式

来年も逢う指切りの藤の花
待ち合わせ背中合わせで打つメール
初デート妻は仔細に記憶する
肉体で縛る自信はありません

よしえ
稔

たぬ
祐子

幸枝
季芳

はるお
忠良

節子
和子

雅女
石花菜

孝男
睦子

一粋
蟹郎

和枝
公子

美恵子

雅司
章子

歳子
房江

開子
好文

忠

真夜中の鍵穴がす千鳥足
頰杖について言い訳聞いてやる
未知求めたんばほ風に子を放つ
黄色だけ目に残ってるゴッホの絵
定年日アンテナ違う方へ向け

川柳塔まつえ吟社 三島 沁丘報

真つ当に姑の轍の跡を踏む
父の背に愛の踏み台見つけた日
竹踏みも四五日たてば飾りもの
踏まれても俺は雑草生きている
土踏まず裸足の感觸恋しがる

人のあと踏んでばかりで埒明かぬ
満ち足りて自分に光る色探す
善と悪同じ光の中で生き

平幕が横綱倒す星光る
客が来る窓もコップも光らせる
ひと筋の光につなぐ突破口

光陰の早さ実感した卒寿
純情な恋かも知れぬ落椿
純粋に述べた意見を煙たがる

純白のドレスで明日は芝居する
純と言う脆くいとしいものがある
純情な男の胸にある微罪

一途な人に一途に書き添えて五月晴れ
パンコンは苦手手滑きの匙加減
計算が苦手な老母の匙加減

知恵磨く苦手をぶった切るために
海が好き泳ぎは苦手貝拾う

朋月
正和

婦美子
藤朗

哲男

多賀子
幸子

政子
茂美

きみえ
注湖

義良
ちえこ

小生
昌枝

多恵子
長吉

喜美子
たけし

桂子
藪

松丘
畔

房子
螢

芳山
治代

母さんの長いお小言チヨイ苦手
秀才も苦手があった人間味
冗談が言える明るい夕餉時
冗談を言って笑わす森がある
キャッチボールのように冗談投げ返す
冗談を本気にとられ渦を巻く
言ってみるものだ寿司桶届けられ
焼酎と酒で冗談言える仲

岬川柳会

八十田洞庵報

着飾ってしつかり抱いた宮参り
さくら色に着飾る道を万歩計
塩漬の株がやつとこ面を見せ
中高年登山ブームに落すかけ
七人の敵なき倒す一張羅

奥山の初音さわやか添うて聞く
さわやかな言葉で過去を捨てて行く
踏み込んだ迷路で逢うた釈迦如来
弁当も陽気多彩な色づかい

着飾って特殊メイクのうちの妻
この陽気髪切つてから何処行こか
妻だつた頃が懐かし老いひとり
入学式飾る母のうれしい顔

入向いて生きる陽気を持った蔓
花のかんげせ着飾つた娘の門出
着飾つてないが自然の娘立よさ
顔よりも心美人で若くなり

元気でサブリメントに頼る日々
改革は予算先行見直し中

多喜
知恵子

紫晃
宏

静恵
嘉寿恵

玲子
叮紅

和香
年子

四郎
桜琴

悦子
和美

房枝
洞庵

蛙城
香代

和里
美

孝子
令子

俣子
みやこ

茂平
富美子

鉄男

若葉風もいちど君に逢いたいな
 鮮やかに生き死してな お風薫る
 師の訃報四月の空を深くして
 無限なる慕情作句をする限り
 川柳の楽しさ残してくれました
 病床で書かれた師の句財産に
 にはかんだ笑顔遺して恩師逝く
 偉大なる恩師を悼む人の列
 飄々として肺半分で逝き給う
 川柳が命の風を吹かせた師
 川柳を広めいずこへ逝かれしか
 風薫る柳師の星を仰ぎ見て
 亡師の教え明日に輝く塔仰ぐ
 春寒し呼べど帰らぬ恩師の名
 瀟洒なるお姿遙か雲の峰
 亡師の教え穿ちうがちと耳の底
 薫陶受け師に報いんと今誓う
 西方浄土へみやげの句集重かろう
 諍うて身近になった師との距離
 巨星墜つ悲しみは日々深くなり
 師の好きなラビアンローズ捧げます
 片肺飛行の御恩忘れぬグッドバイ
 薫る風真紅のバラに師を想う
 ほほえんで浄土の蓮の句座に居る
 死を悼む五月の闇のな お深し
 薫風師うばい去ったか春風
 蓮の花眼鏡へ映し笑み給う

理恵 尚士 真理子 照子 日の出 舞夢 桃花 久峰 昭 蕉子 蛙 満作 絹子 石舟 千歩 志華子 孝一 千梢 美籠 観子 会美 春 良一 捷也 希久子 さと美 富子

大師匠ご帰天の日は春の宵
 天国で川柳きつと説かれてる
 やさしい声残し逝かれたお浄土へ

倉吉川柳会

竹信

照彦報

責任者針の筵を這いまわる
 楽しいね責任いらぬ川柳で
 へその緒に責任からめ生まれ出る
 子の背中押してやるのも責任だ
 責任があるから大口たたけない
 リタイヤで責任感も置いて来た
 責任を持って最後の火の始末
 梟よお前もひとり寂しいか
 亡母の名を呼べば甞が返るだけ
 寂しくてわざといじわるして見せる
 これからは寂しいことを楽しもう
 寂しくてみんな忘れる事にする
 ざわめきも太鼓も止んだ祭りの夜
 つばめの子猫に捕られた寂しい日
 ずっしりと重石のような曾孫抱く
 いつの間にか苔むす石になっている
 石だつて寝苦しい夜は咳をする
 一日中石になるのは難しい
 墓石にも松竹梅がある浮世
 蹴躓く石もないのによろけてる
 ややこしい話は聞かぬ土台石
 星のかけらと石がウイニングして眠る
 あと十年この世で飯が食えるよう
 希望には添えぬと遠慮がちに言う

れんげ 水昇 石花菜 泰輔 活枝 風露 荻江 京子 よしえ 節子 日出子 瑞子 美ツ千 和枝 重忠 康子 螢 季芳 芳光 次男 龍枝 賀寿恵 きみ子 完司 睦子

川柳藤井寺

高田美代子報

歳重ね食べて歩いて眠ること
 希望抱き四月に入社五月病
 手の平の中から希望つかみ取る
 賽の河原積んでいるのは丸い石
 恋かしら生きる希望が湧いてきた
 赤ちゃんの拳の中にある希望
 開いてみるまでが楽しみ福袋
 追い詰めてそつと裏木戸開けておく
 風風や窓全開の深呼吸
 春風に心開いた車椅子
 開けないで私の過去が飛んで出る
 泣きにくる小部屋はいつも開けてある
 あした咲くつもりでぐつすり眠る
 合鍵をどうぞお風呂も沸いてます
 童心にかえると大人美しい
 返事せぬ大人が増えて情けない
 八十の母から見ればまだ子供
 山菜の苦味大人の春を呼ぶ
 相談するのに酒がいる大人
 悪い事だけは大人の真似をする
 少年の頃の大志は胃のあたり
 郷愁を胸に包んでいる大人
 退く事を知らぬ聞き分けのない大人
 修羅いくつ越えて大人の顔になる
 責任がずっしり肩にある大人
 空振りにかつらが飛んだティッシュヨット
 春風のいたすら浮いているかつら

和子 悠子 勝誉 玲子 鬼一 照彦 志洋 惠勇 登志子 栄一 悦子 昭子 みつこ 重人 春蘭 武義 かつみ 一知 庸佑 いさお 桂子 瑠美子 美代子 鐘造 龍一 耕策 喜代子

かつらなら脱きたい夏の多い髪
本物のはげですカツラとは違う
着飾った妻のおともをするかつら
幸せを掴んだ熟年のかつら
付けるより外す勇気がいるかつら
したたかに生きるかつらがたとある
かつらかも知れぬ髪型よう変わる
桜咲き永遠の眠りに法王は
何時からか母の口癖とっこいしょ

川柳クラブわたの花

井尻

ヨシ枝 一筒 シマ子 扶美代 淳司 弥生 六点 静子 雅枝 民報 宏至 ミツ子 君江 宏 一風 きらり 欣子 幸枝 晴美 俊子 浩三 (本)たえ子 (赤)妙子 ますみ 敏男 義明 ふりこ

豊かさに馴れて粗末が置きざりに
フルムーン粗末な宿に拗ねる妻
来客の掃除あたふた痛む腰
災を知らず今日まで来た無口
すいとんがご馳走だった戦中派

高知川柳社 川竹 松風報

表面を盛り上げて注ぐコップ酒
表札がまだにも言う亡夫の顔
表沙汰にしますと女攻めロモン
市場かご一番上に置くメロン
世渡り上手表と裏の使い分け
ひとりで魅力が一つ消えまじた
汗かいて歩く瞳に嘘はない
割引いて公約を聴く選挙戦
腹割ってじっくり話す経営者
穀を割る力を溜めている卵
割れ物のように育てた子の弱さ
割り算のようにはいかぬ嫁姑
県民を二つに割った知事選挙
神様に割り当てられている命
母の介護姉妹で割って雪解ける
割れ鍋の独りに厳し冬の日
再婚し一蓮托生半世紀

むらくも川柳会 毛利 幸報

緑みどり私の中で萌えるもの
オアシスは砂漠の中の緑です
田園の緑の苗に夢託す

知佐子 美代子 民 hajim 正純 (敬) 圭二 孝雄 快風 啓二郎 幸 悦子 和江 良雄 暖 成美 則子 てるみ まき子 京子 美々 竹萌 幸報 秀子 信夫 定子

薫風が緑の香り連れてくる
新緑の息吹きが背中押して行く
新緑の風柔かし田植笠
新緑の中で居座る常緑樹
歳月がこんな早い喜寿の春
大相撲外力士の剛勇さ
老いて今まだ捨てぬ希望あり
不注意のまた腰痛に悩まされ
漬物石母の歴史の愛がある
皇族の笑顔が揃う初参賀
何べんも手ばかりないかと念押しされ
もう少し燃えよと頬を叩くこと
神様との誓いを捨てた薬指
ボケた振りして難関をすり抜ける
カラオケで昔の歌がなつかしい

堺川柳会 河内 月子報

包装紙替えて中味が里帰り
包むもの見栄と本音が喧嘩する
包みからはみ出している下心
でかいのに包容力がまるでない
誤字だらけ没には惜しい穿ちあり
癌疑惑晴れて祝盃あげている
割り勘の算数をする箸袋
念入りに包むと愛は逃げたがる
晴れやかな場所へこの頃妻ばかり
晴れがましい舞台上に照れる古希の舞
包むより手離す愛を子は知らぬ
神さまのほほえむようないい天気

幸彰 安男 美保 惠美子 ます美 明朗 喜美 富さえ 昭子 かずこ 秀夫 俊夫 伊千子 鐘造 公誠 玄也 時雄 惠勇 朋月 好 つつや 五月 八千代 さくら 冬虹

責任をうすめあつて多数決

母の手で包むと軽くなる悩み

晴れた日はちよつと得した気になれる

ゴシップを防弾チョッキで受け止める

ランラン今日日はわたくしデートです

好奇心いつも包んで持ち歩く

風呂敷で法螺が出版を待っている

地球いま自然破壊に包まれる

忘れずに薬飲ませて飲んでます

弾みすぎ包んだ本音こぼれだす

包むのが下手でいつでもボロが出る

やんわりと本音包んでいるジョーク

晴れも待ち雨も待っている地球人

ご招待帽子の中の宇宙まで

よつ葉のクローバーよりたこ焼きにたこつ

飲んでよい許可に晴れ晴れ健診値

数字にはうといが金は貯めてはる

応援団数の威力で攻めてくる

川柳エスポ

山本 三郎報

恋のステップ彼女のハートへ届くまで

春風にステップ軽く弾む恋

おさな子がスキップ遊びうれしそう

マツケンのサンバは軽いステップで

春風に妻がステップ若やいで

足ばかり踏む相棒と踊っている

青空へ組体操で立ち上がる

風孕み虚空を泳ぐ鯉職

老々介護今日はワルツで足ならず

梓

娘

和夫

潤子

篤子

文

舞夢

伸子

りつえ

泰子

かりん

康浩

真澄

健造

健吾

酔粋

侑子

さとし

一炊

綾子

一歩

団地

恵美子

晚翔

任翔

一幸

合格に母のステップ見て嬉し

中高年ステップ踏んで姿勢良し

父さんのステップ母のリモコンで

大空で帰る術待つブーメラ

一粒の塵の思いが空の青

空に向く視野のひろがり寿命のび

浮き雲の気候な暮し私にも

ステップを踏んでニッコリ歩こうか

み仏の御慈悲か今日まで難もなく

とし子

さち子

かすみ

れい子

たか子

はつよ

みさと

星花

三枝

番傘川柳本社八月句会(水府忌)

日時 8月6日(土) 18時

会場 大阪市港区弁天一―二―一

地下鉄中央線弁天町駅すぐ

環状線弁天町駅すぐ

三井アーバンホテル

6577-1111番

お話し「水府を語る」 田中 新一

宿題「砂 漠」 玉利三重子選

「比 べる」 坂元 一登選

「古 い」 片岡 湖風選

「浪 速」 山本 義子選

「骨 」 磯野いさむ選

ほかに席題一題 各題二句

しめきり 18時50分 会費一〇〇〇円

第6回 生駒市民川柳大会

日時 7月17日(日) 12時30分開場 13時30分締切

場所 生駒市芸術会館「美楽来」近鉄生駒駅北西400m

〒630-0246 生駒市西松ヶ丘2-20 TEL0743-74-1101

宿題と選者 「各題2句」

「進 む」 中田たつお

「裏 」 久保田元紀

「失 敗」 阪本 高士

「サービ」 坊農 柳弘

「窓 」 牧浦 完次

「任 す」 森中恵美子

会費 1,500円 発表誌呈

連絡先 吉川 卓 TEL0743-74-6019 FAX0743-74-6099

この浮気仏の顔をもう一度

昼はとけ夜は悪魔の裏表

子の描く空キャンパスに夢無限

空に舞う春の雪にも淡い夢

目に見えぬ仏の慈悲に包まれて

成仏が出来ぬと困るので泣かぬ

姉逝つて手編みのセーター小休止

ブランドを身に付け妻よ何処へ行く

よねぞう

昭一朗

高栄

文好

ゆき子

ルイ子

とよ子

三郎

暑中お見舞申し上げます

竹原川柳会

平成十七年 盛 夏

〒725-0022 広島県竹原市本町1丁目14-3

小 島 蘭 幸 方

会 監 会
計 査 長

山	正	福	沖	三	古	藤	古	石	森	岩	時	小
内	畑	島	浜	宅	田	解	谷	原	井	本	広	島
ほ	房	半	万	正	太	静	節	淑	菁	笑	一	蘭
か	子	覚	年	宏	朽	虚	風	夫	居	子	路	幸
会												
員												
一												
同												

暑中お見舞申し上げます

平成十七年 盛夏

堺川柳会

川河河柿奥萩大大太大榎榎岩稲泉石河
西内内花野橋谷田久保本本崎川谷堂内
真康健和時像鐘篤扶伸舞日の公惠喜潤天
澄治造夫雄山造子美代子夢出誠勇子子笑

半中中中中中徳津高志齋小小源神河河
井村野崎川井山守木田藤西寺田原盛内
醉忠健深みなぎ世千さ小竜八龍月
粹敬吾雪楓萌つこざ紀代くら雪之介千代文三子

和米山矢矢八村宮升藤日樋原長長西西
田澤本野倉木上本成田野口川谷川村内
つ俣半五侑玄かり泰冬清春り朋
づ子錢梓月子也ん好子愿虹晋蘭彰つえ月
や

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔わかやま吟社

杉山	芝	澤田	坂部	坂口	乗原	柏原	小倉	野村	顧問	川上	副主幹	主幹
精子	あつむ	和重	紀久子	公子	道夫	夕胡	アサ	太茂津		大輪		牛尾 緑良

福本英子	福田和子	橋爪佐一	根田よしこ	中嶋正博	中島清史	中後清史	中井栄美子	堂上泰女	寺田裕美	玉井豊太	谷口信和	谷村あき子	田中輝子
------	------	------	-------	------	------	------	-------	------	------	------	------	-------	------

和良一	横垣忠翁	山西佳子	森下順子	宮本三喜夫	宮園射月芳	宮口克子	松原寿子	松尾和香	堀端三男	堀富美子	細川稚代
-----	------	------	------	-------	-------	------	------	------	------	------	------

会員一同

暑中お見舞申し上げます

いずも川柳会

会長 竹 治 ちかし
会 員 一 同

事務局 〒693-0052 出雲市松寄下町284
吉岡 きみえ 方
TEL 0853-22-1068

暑中お見舞申し上げます

エイシス堺

講師 河内 天 笑

島田 誠一	阪井 智之	齋藤 さくら	源田 八千代	荻野 像山	奥 時雄	大谷 篤子	大久保 伸子	榎本 舞夢	榎本 日の出	稲川 恵勇	泉谷 喜代子	石堂 潤子
米澤 俣子	矢野 梓	矢倉 五月	村上 玄也	宮本 かりん	升成 好	樋口 冬虹	原 清晋	中野 健吾	中井 萌	富山 ルイ子	津守 なぎさ	高木 世紀子

暑中お見舞い申し上げます

夏バテをせぬ気遣いが要りますね

2005年 盛 夏

私たち“川柳塔鹿野みか月”第25回記念大会は
12月4日(日)に年忘れ大会を兼ねて開催予定です。
皆様のご支援を心からお待ちしております。

※ 詳細はあらためてご案内したいと存じます。

川 柳 塔 鹿 野 み か 月

事務局 鳥取市鹿野町鹿野1279 中原諷人方
〒689-0405 電話 (0857) 84-2100

暑中お見舞い申し上げます

川 柳 ふ う も ん 吟 社

会 長 両 川 洋 々

会 員 一 同

事務局 〒680-0033 鳥取市二階町3-102
植田一京方

月例会 毎月第4日曜日 13:00～
JR鳥取駅構内（シャミネ会議室）

暑中お見舞い申し上げます

翠 洋 会

高杉	住谷	清水	佐々木	児玉	古今堂	奥田	岡本	太田	大川	榎本	榎本	井上	居谷	穴吹	安土	(做)橘高
千歩	石舟	絹子	満作	蛙	蕉子	みつ子	久峰	昭	桃花	舞夢	日の出	照子	真理子	尚士	理恵	薫風
渡辺	渡部	米田	横山	山本	矢野	安永	藤井	長谷川	西出	中村	長浜	天正	坪井	津村	谷口	田中
富子	さと美	恭昌	捷也	希久子	良一	春	正雄	会美	楓楽	叡子	美籠	千梢	孝一	志華子	義	正坊

暑中御伺い申し上げます

香川県東かがわ市白鳥

川柳塔おっぱこ吟社

会 長	成重	放任	会 員	角尾	いさむ
会 計	川崎	ひかり	”	辻上	よしみ
顧 問	木村	あきら	”	向山	治延
同 人	池内	かおり	”	岩倉	文仙
”	原	賢	”	山崎	初恵
”	伊勢	八重子	”	松村	輝夫
”	”	”	”	赤沢	貞月
”	”	”	”	中塚	寿々女

大 阪 川 柳 の 会

句 会 毎偶数月上旬・大阪駅前第2ビル5階 第1研修室
事務局 〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706 本田智彦 方
TEL (06) 6303-7297

大	坂	大阪川柳人クラブ	砂	吉	安	森	本	濱	内	竹	坂	岡	碓	足	世話人	磯	代
堀	本		木	村	井	口	田	田	藤	森	本		氷	立		野	表
正	晴		啓	雅	英	美	智	良	光	雀	和	良	祥	淑		い	
明	美		三	文	華	羽	彦	知	枝	舎	樹	三	昭	子		さ	む

前 進

川柳塔のぞみ

代表 播本充子

〒193-0832
東京都八王子市散田町2-31-3
TEL.FAX 0426-65-3172

暑中お見舞い申し上げます

岩 美 川 柳 会

会 員 一 同

〒681-0074 鳥取県岩美郡岩美町網代118-115
TEL 0857-72-0762

季刊

A5判
一五二頁

「川柳展望」

年間誌代 ¥四、九六〇（年間）
☆見本誌贈呈いたします

〒567-0009

茨木市山手台四―六―三―一〇―一
TEL〇七二―六四九―五二二六
FAX〇七二―六四九―三三三四

川柳展望社

主宰・天根夢草

暑中お見舞

申し上げます

熊本川柳会

高野宵草

永田俊子

岩切康子

暑中お見舞い申し上げます

鳥取県川柳作家連盟

会長 鈴木公弘
会員 一同

事務局 〒680-0843 鳥取市南吉方3丁目364
安田方 春木圭一郎
TEL 0857-24-2834

暑中お見舞い申し上げます
川柳塔みちのく

主幹	齊藤 苧
副主幹	小寺 花峯
相談役	福士 慕情
	工藤 甲吉
顧問	森中恵美子
	波多野五楽庵
理事	岩渕 黙人
	櫻庭 順風
	佐治千加子
	浅田 隆樹
	肥後和香子
	田中 叶
監事	相馬 銀波
	小枝ふさゑ
会計	相馬 一花
	ほか同人一同

盛 皆様お大切に 夏

川柳藤井寺
川柳みささぎ

会員一同

暑中お見舞申し上げます

南大阪川柳会

会員一同

暑中お見舞申し上げます

川柳塔まつえ吟社

同人一同

〒690-0056 松江市雑賀町1686 恒松町紅方
電話 0852-24-5450

森	佐	向	家	前	助	林	河	堤	林	土	永	池	宮	仲	宮	加	不	寺	岩	長
本	藤	井	路	田	川	越			橋	田	田	地	谷	野	藤	破	田	佐	呂	谷
み	文	野	ゆ	和	春	み	檀	力	房	岩	一	弘	み	仁	甚	ダ	ン	呂		
代	夫	清	添	い	美	栄	子	代	子	枝	守	夫	脩	子	江	基	緑	一	吉	万
佐	小	稻	小	三	柿	藤	中	森	雪	松	田	中	小	堂	田	山	原	井	芳	
藤	笹	葉	林	宅	本	井	岡	元	本	村	中	島	島	免	口	本		伊	地	
幸	鍊	淳	ゆ	あ	照	香	ふ	珠	睦	文	寿	笑	路	穰	蛙	さ	よ	東	狸	
子	太	洋	子	子	子	女	代	よ	子	馬	時	海	司	子	一	城	子	吉	村	

暑中お見舞申し上げます
 岸和田川柳会
 平成十七年 盛夏

暑中お見舞申し上げます

八尾市民川柳会

会員一同

暑中お見舞申し上げます

川柳ささやま 一同

暑中お見舞い申し上げます

ほたる川柳同好会

佐藤 谷川 中川 宇山 北山 前田 多田 小野 水野 藤澤 宮田 唐井 寺住 江見 米原 出川 高嶋 田邊 二ノ倉 栗田 田中 藤原 山田 椋山 前田 富永 藤村
ほか 藤川 憲 勇 春 禮 ヤギ エ いさむ 契子 信男 黒兔 長一 骨実 柳童 見清 雪子 セツ子 正三郎 倉よしろう 久子 螢桂 祥風 昭子 敏子女
員一 同 治 治 代 子

定例句会・毎月第2火曜日午後・豊中市蛍池公民館

暑中お見舞申し上げます

西宮ローズ川柳会

山本 山崎 春城 春城 西口 長浜 坪井 久保 木村 菊池 亀岡 小倉 奥田 岩倉 飯西 秋元
義君 年武 武庫 坊 いわゑ 美籠 孝一 まさお 貴代子 トミエ 哲子 藍子 みつ子 キク子 ミサヲ てる

暑中お見舞申し上げます

高槻川柳サークル卯の花一同

月例会は第三木曜日

暑中お見舞申し上げます

城北川柳会

会 員 一 同

暑中御見舞

河内長野

長柳会

水谷正子

村上直樹

山岡富美子

坂上淳司

暑中お見舞い申し上げます

尼崎尾浜川柳会

田小松木延村作瀧奥河軸小酢西岩林松坪山河長西坂黒
 他辺熊村村野上山本村野丸西谷部城 下井田津浜内本川
 一鹿江里美カよ信き五折勝ま亀イ義昭比孝耕正美朋晴紫
 同太美江子代ズしよし月杭巴さ子ミ芳三志一治治籠月美香

誌上句会への御協力ありがとうございます
 いました。おかげ様にて、七月十日
 句会再開となります。引き続きまして
 句会への御協力もよろしくお願い致
 します。

〒301-0042

茨城県龍ヶ崎市長山五十七ー六

つくばね川柳会

会 長 太田紀伊子

総務部長 坂倉 敏夫

会計部長 青田 隆司

編集部長 葛西 清

句会部長 坂本香代子

HP <http://www.tsukubane.gr.jp>
 Eメール info@tsukubane.gr.jp

暑中お見舞い申し上げます

京都塔の会 一同

暑中お見舞申し上げます

サークル 檸檬

吉田 あずき	山本 義子	山口 光久	山本 希久子	前川 たもつ	早川 棲世	西村 哲夫	西出 楓楽	西口 いわゑ	長浜 美籠	鶴田 遠野	田中 正坊	久保田 千代	片岡 智恵子	奥田 みつ子	大塚 節子	太田 扶美代	井丸 昌紀	浅野 房子
--------	-------	-------	--------	--------	-------	-------	-------	--------	-------	-------	-------	--------	--------	--------	-------	--------	-------	-------

暑中お見舞申し上げます

川柳おたまじゃくし

雪本 珠子	山本 蛙城	森元 ふみよ	林 力子	中岡 香代	堤 楢代	土橋 房枝	助川 和美	赤塚 楽天
-------	-------	--------	------	-------	------	-------	-------	-------

〒596 0076 岸和田市野田町一―六―二

土橋 方

TEL (〇七二四) 三八―三三〇八

暑中お見舞申し上げます

川柳若葉の会

吉田 あずき	山内 香住	宮本 欣史子	宮崎 シマ子	宮崎 弘直	古川 喜美子	辻川 慶子	黒田 能子	井尻 民	生嶋 ますみ
--------	-------	--------	--------	-------	--------	-------	-------	------	--------

暑中お見舞申し上げます

川 柳 大 阪

会 員 一 同

大阪市交通局互助組合文化部・川柳部

暑中お見舞い申し上げます

はびきの市民川柳会

会 員 一 同

佐々木満作	坂本夏代	古手川光	熊代菜月	国見蘭香	吉川寿美	神原まさと	笠井欣子	岡本訓也	内田甲子	伊藤博仁	井尻民	生嶋ますみ
	和田つづや	米田水昇	山本宏至	山口美津子	松井敏子	松井秀夫	堀富重	星野きらり	西川更紗	中村れんげ	中岡妙	飛永ふりこ

エィシス東大阪
講師 河内天笑

暑中お見舞い申し上げます

暑中お見舞申し上げます

川 柳 塔 社

					常 任 理 事		副 理 事 長	副 主 幹	理 事 長	主 幹
米	山	坊	鶴	河	大	前	小	奥	板	河
田	本	農	田	内	内		島	田	尾	内
恭	希	柳	遠	月	朝	た	蘭	み	岳	天
昌	久	弘	野	子	子	も	幸	つ	人	笑
	山	松	長	木	籠		西	仁		
	本	原	浜	本	島		出	部		
	義	寿	美	朱	恵		楓	四		
	子	子	籠	夏	子		楽	郎		

川柳塔社常任理事会

柳界展望

☆第6回井笠川柳会笠岡大会(第16回藝大会)は、5月21日笠岡市保険センターで開催された。当日の本社同人の成績は次のとおり。
 (岡山県知事賞)

太田扶美代

▽同人動向△

☆平成17年造幣局桜の通り
 抜け川柳は、約1600名の
 投句の中から、三才、秀
 逸、佳作計33句が入選。本
 社同人の入選者。

(佳作)

小谷集一・岩崎公誠・高
 田美代子・河内天笑・津守
 柳伸・齋藤さくら

□5月21日、井笠川柳大会
 出席のため、たもつ、楓楽
 副理事長ほか3名岡山県笠
 岡市行。

□みつ子副主幹は、5月24
 日川柳塔のぞみ勉強会講師
 のため東京行。

□5月29日、楓楽副理事長
 は朝日放送ラジオ「ちよっ
 といい話」に出演。川柳を
 アピールした。次回8月21日。

▽代表交代△

□高槻川柳サークル卯の花
 は、6月1日付で代表を川
 島諷云児氏から瀧本きよし
 氏に交代した。

▽出版 版△

○三幸川柳教室は、開講三
 百回記念合同句集「実り」
 を5月28日付で出版。会員
 151名1510句を掲載。
 (B6判・313頁)

ヒーローの肩幅で出る

映画館

高瀬霜石氏(同人・弘
 前市)は、第14回井笠川
 柳会笠岡誌上大会「葉」
 で天位を獲得。5月21日
 笠岡市古城山川柳公園で
 句碑が建立された。

句碑建立



新同人紹介

撰 喜子
 一みつ子・克枝・富子推薦

▽御芳志御礼△

○田中正坊氏(参与)から
 句集出版内祝として金一封
 拝受。

▽お供拝受△

○磯小池しげお氏のご長
 男、一央氏から亡父の供養
 として金一封拝受。

▽住所変更・表示変更△

○大石あすなろさん(同人
 名簿4頁)岡山県英田郡大
 原町→美作市

○籠島恵子さん(同人名簿
 6頁)〒572-0801
 寝屋川市寝屋1210-1
 -501。電話変更なし。

▽訂正と削除おわび△

5月号P8上段19行目、
 亀山市→亀岡市 P48上段

12行目、這い這いの…を本

人申し出により削除

6月号P1272段26行目、

鳥取県→岡山県

特別常任理事会(参与以上)

6月7日(火)出席者24名 ①

同人・誌友の現状報告、約

10年前との比較と対策につ

いて ②規定改定案正坊氏

より提出、次回検討 ③徳

ぶ会・追悼句会の件 ④11

回川柳塔まつりについて、

案内・記念品、係 ⑤同人

承認、編集部他

次回常任理事会 7月7日

(水)9時30分、アウイナ

句会名	日時と題	会場と投句先
ほたる川柳同好会	12日(火)午後1時から 港・引く・たまに	豊中市立堂池公民館 阪急・モノレール 堂池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
岸和田川柳会	16日(土)午後1時半から 見切る・空しい・眼鏡・持ち味	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-307 長谷川呂万
川柳藤井寺	17日(日)午後1時から 耳栓・まだまだ	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市藤井寺公園1-105 高田美代子
川柳ねやがわ	17日(日)午後1時半締切り 便利・無視・糸・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	17日(日)午後1時半から 汗・配る・たっぷり	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい川柳会	18日(月)午後1時から 財布・カメラ・黙る・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
高槻川柳サークル卯の花	21日(木)正午から 出会い・一筋縄・めっきり ユーターン・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1118 高槻市奥天神町1-26-17 瀧本きよし
川柳クラブわたの花	22日(金)午前9時半から 池・覚悟・惜しい・ちらちら	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市川柳同好会	23日(土)午後6時から 解く・ゆとり・帽子・皿	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-1-21 片岡湖風
はびきの市川柳会	24日(日)午後1時から 決まり・デモ・豆・「夢」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳ふうもん社	24日(日)午後1時から まさか・ハイテク・夏バテ	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京都塔の会	25日(月)午後1時から 泥・どよめき・指輪	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川柳塔みぞくち	25日(月)午後8時から 強い・泳ぐ・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
南大阪川柳会	27日(水)午後6時から 在庫・吠える・さっぱり・祭り	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

7 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
尼崎 いくしま	1日(金)午後1時から 押す・腕・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富柳会	2日(土)午後1時から 路・待つ・自由吟	富田中央公民館 (近鉄南大阪線富田駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉吉 川柳会	2日(土)午後1時から 仕掛け・血・快い	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
城北 川柳会	2日(土)午後1時締切り つなぐ・深夜・プレーキ 自由吟	旭区 老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮駅3番出口の左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
川柳塔 唐津	4日(月)午後1時半から 汗・涼・アウトドア	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
川柳塔 なら	6日(水)午後1時から 咎める・針・ラッキー	奈良市立中央公民館4F (近鉄奈良④出口徒歩5分) 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子
堺川柳会	9日(土)午後1時から 感じる(共選)・人相 す・い・か(折り句)	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳塔 打吹	9日(土)午後1時から 異常・財・痛い	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0924 倉吉市河原町1879 高多博丈
川柳塔 まつえ	9日(土)午後1時から 土産・星・語る・湯	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島添丘
川柳塔 みちのく	9日(土)午後4時から 蚊・つかむ・痛い	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-0161 青森県南津軽郡平賀町杉館字宮元53-1 小寺花峯
八尾市民 川柳会	10日(日)午後1時から ラフ・鉄・情け・雑詠	山本コミュニティセンター内3F学習室 (近鉄山本駅) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川柳塔 わかやま	10日(日)午後1時から 町・回転・トライ (日本の地名)	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川柳会	11日(月)午後1時から 今・遠い・プレイ・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南西出口徒歩3分 プレラにのみや 〒663-8202 西宮市高畑町2-82-308 西口いわゑ
尼崎 尾浜 川柳会	12日(火)午後1時から 弁当・叱る・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太

編集後記

☆薫風先生はもうこの世に居られないという現実と、それを信じたくない気持ちとのギャップが埋められないまま、追悼号の編集をすすめた。

☆酸素ポンベを引き摺りながら、体力の限界ぎりぎりまで川柳活動をされた先生を、新聞は大きく取り上げて下さった。朝日、毎日、山陽、その他に死亡記事が掲載された。朝日は4月27日に写真入りの追悼記事が載り、番傘の田中新一氏、川柳塔からは田中正坊氏と私が寄稿した。山陽新聞も29日に同じく写真入りの時実新子さんの追悼文で先生を送っていた。

☆先生が亡くなられた当日は、大原川柳社30号記念川柳大会が開催され、11名で

参加した。夕方6時過ぎに大阪駅へ到着、食事を終え環状線に乗ってすぐ携帯にメールが入り、先生の逝去を知った。「川柳大会を楽しんで来なさい。おいしい夕食を食べなさい」と私達を思い遣って、旅立ちの時間を選ばれた気がして切ない。

☆表紙裏に記載の「檸檬抄」は、すでにお気付きと思うが、先生に因んで名付けられた。表紙裏の要項を読んでいたとき、たくさんの投句を待っています。男女の選者共選なので、どんな違いが出るか興味深々。

☆賞応募は例年通り8月号綴し込み用紙を使用、8月10日締め切りとなる。昨年9月号以降分から自選し、下準備をお願いします。

☆8月号から表紙の絵が変わります。

ひとこと

樂しき余生

昭和58年12月、70歳で52年間の宮仕えから解放され、さてこれからの余生の趣味は以前、市広報で入選した川柳と決めました。

「川柳藤井寺」「川柳はびきの」に入会。新聞へ投句も始め川柳のとりこになりました。お陰でたくさん楽しい友人に恵まれ感謝しています。中には「新米だから宜しく」と言って、最初から「天地

人」に入選した人、俳句を十年以上やってきたと自信満々で思わぬ不成績に、すぐ辞めた人など色々。これからも成績に一喜一憂せず川柳とともに楽しい余生を過ごしたいと思っています。

「水煙抄」平成2年初入選句
あれこれと振っていい音の
土鈴留う
大阪川柳「秀吟賞」平成2年1月
大物と言われ続けて未だ補欠
(中島 志洋)

○名誉主幹橋高薫風先生ご逝去の報に接し驚愕いたしました。謹んで深く哀悼の意を表するとともにご冥福をお祈り申し上げます。

○思い返しますと、川柳塔社諸兄諸姉には甚大な交友がおりと存じますが、若輩の私が先生のお近くでうるちよろでできる機会を得ましたことを本当にありがとうございました。

○平成三年春、近くの公民館の川柳会に誘っていた逝去の報に接し驚愕いたしました。謹んで深く哀悼の意を表するとともにご冥福をお祈り申し上げます。

○以後どっぴりと川柳に浸り、あちらでゴツンこちらでゴツンと足手まといの私を厚くご指導くださいました「薫風先生」に改めて御礼と感謝を申し上げます。

○何卒、このうえとも天上からお見守りくださいますようお願い申し上げます。

(説明記事以真)
(ふ)

(よ)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（9月号）地名

市 県
姓・雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



檸檬抄投句用紙

「賑やか」 (7月15日締切)

藤田 泰子 選 — 共選 — 仁部 四郎 選

		B	A			B	A
地名	市	B	A	地名	市	B	A

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい

1948

1948

1948

1948

1948

1948

1948

7月7日(木)

午後5時開場・6時締め切り

路郎忌・薫風名譽主幹追悼

川柳大会

◎本誌121頁を参照して下さい。

作品募集

9月号発表表(7月15日締切)

川柳塔(8句)	河内天笑選
水煙抄(8句)	板尾岳人選
愛染帖(3句)	新家完司選
檸檬抄(2句)	仁部四郎共選
一路集(3句)	「汗」「涼」「アウトドア」
初歩教室「台風」(3句)	矢倉五月選
	多々納テル子選
	久保田千代選
	三宅保州担当

10月号

課題吟 「虫」「まつり」「祈る」
初歩教室 「蜜柑(みかん)」

本社8月句会 5日(金) 午後5時半から
「軋む」「ほのか」「緑」「魂」「怒る」

第24年度 夜市川柳募集

第2回「舞う」岩田明子選
ハガキに3句 7月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌級込みの投句用紙を使用してください。
 - (2)愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙級込みの投句用紙を使用してください。
 - (3)各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

定価 八百円(送料92円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇〇五年(平成十七年)七月一日発行

編集兼 発行人 河内権治

印刷所 美研アートの

〒545-0005 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(06)6629169一四番

振替009801513336八番

第11回 川柳塔まつり

《同人総会》

と き 10月10日(月・祝日) 午前10時～11時半
ところ ホテル・アウィーナ大阪 3F 生駒
(近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車・TEL 06-6772-1441)
議 事 平成16年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成17年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《各賞表彰式・記念句会》

と き 同日 午前11時開場・午後1時開会
ところ ホテル・アウィーナ大阪 4F 金剛中・西
表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・茴香の花賞・一路賞・
各地柳壇賞の表彰式を午後1時から行います。
おはなし 「世界遺産・紀伊山地の霊場と参詣道について」 三宅保州
兼題 「若い」 (奈良) 大内朝子 選
「栄える」 (大阪) 前 たもつ 選
「のぞみ」 (東京) 播本充子 選
「例えば」 (鳥取) 新家完司 選
「つくる」 (岡山) 濱野奇童 選
「つばさ」(事前投句・8月31日締切) 河内天笑 選

◎各題2句・欠席投句拝辞

出句締切 正午・午後4時半終了予定

会 費 2,000円(記念品呈)・当日いただきます。

《懇親宴》

と き 同日 午後5時～7時半
ところ ホテル・アウィーナ大阪 3F 葛城
会 費 7,000円
宿 泊 ホテル・アウィーナ大阪 8,000円(朝食付)

- ◇事前投句および懇親宴・宿泊の申込みは本誌同封のハガキに明記の上、8月31日(木)までに本社事務所宛お願いします。
- ◇懇親宴・宿泊のご送金(句会費をのぞく)は同封の払込用紙でお願い致します。
- ◇記念句会・懇親宴には同人・誌友にかかわりなく、一人でも多くの方々のご参加をお待ち申し上げます。

主催 川柳塔社